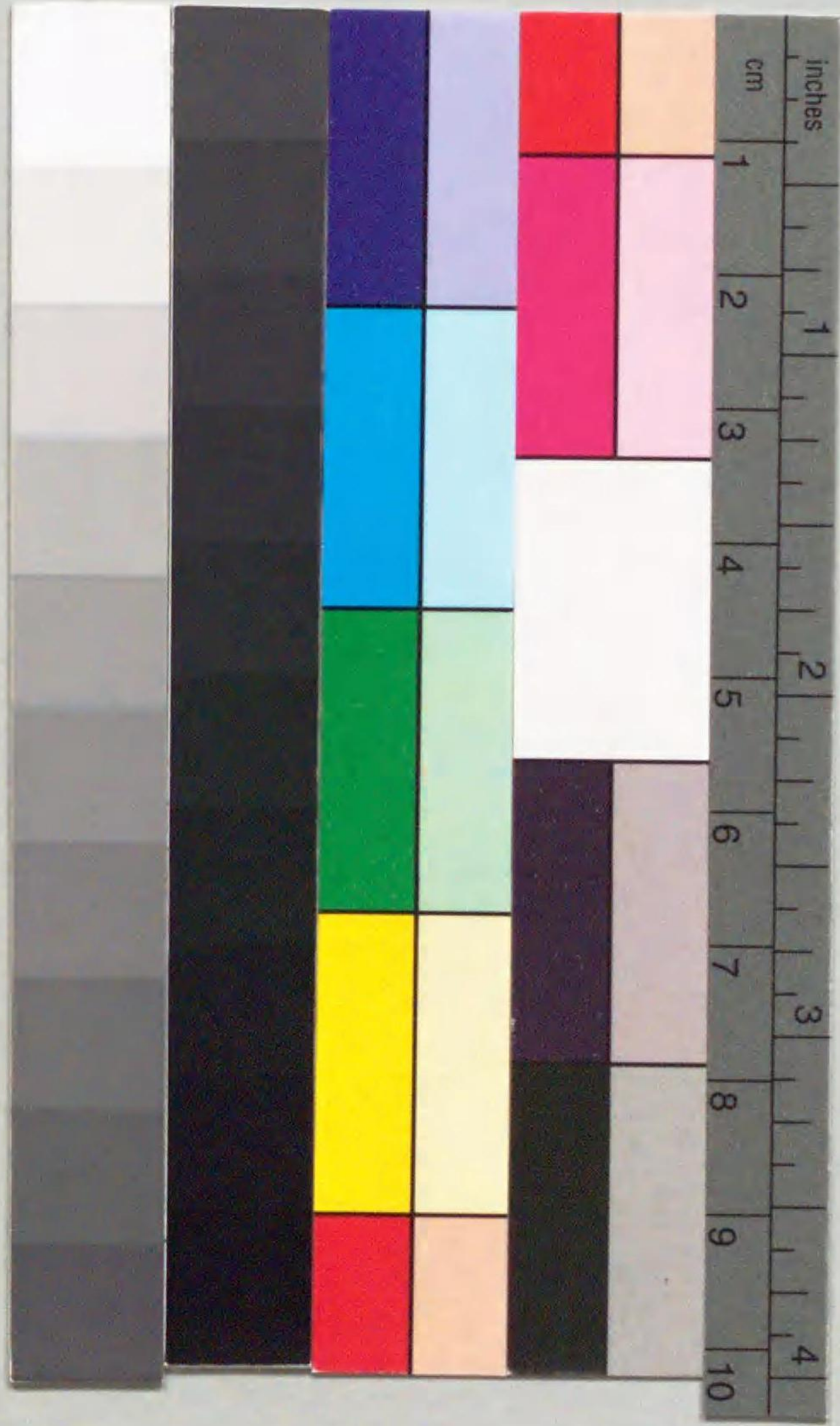


GB71

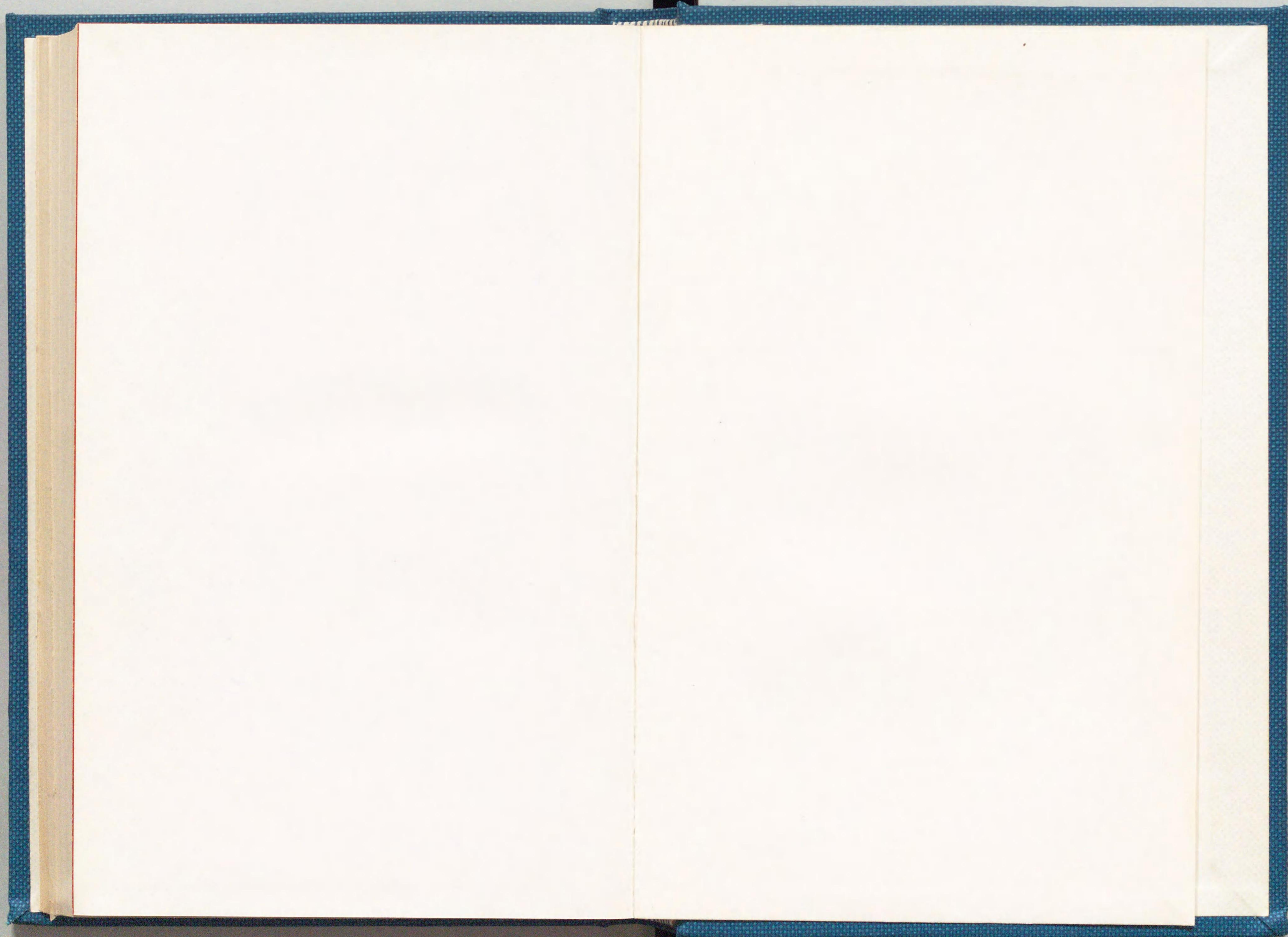
20



00758093







三ノ46

「お母さん」の創つた日本

日本略史

星一著

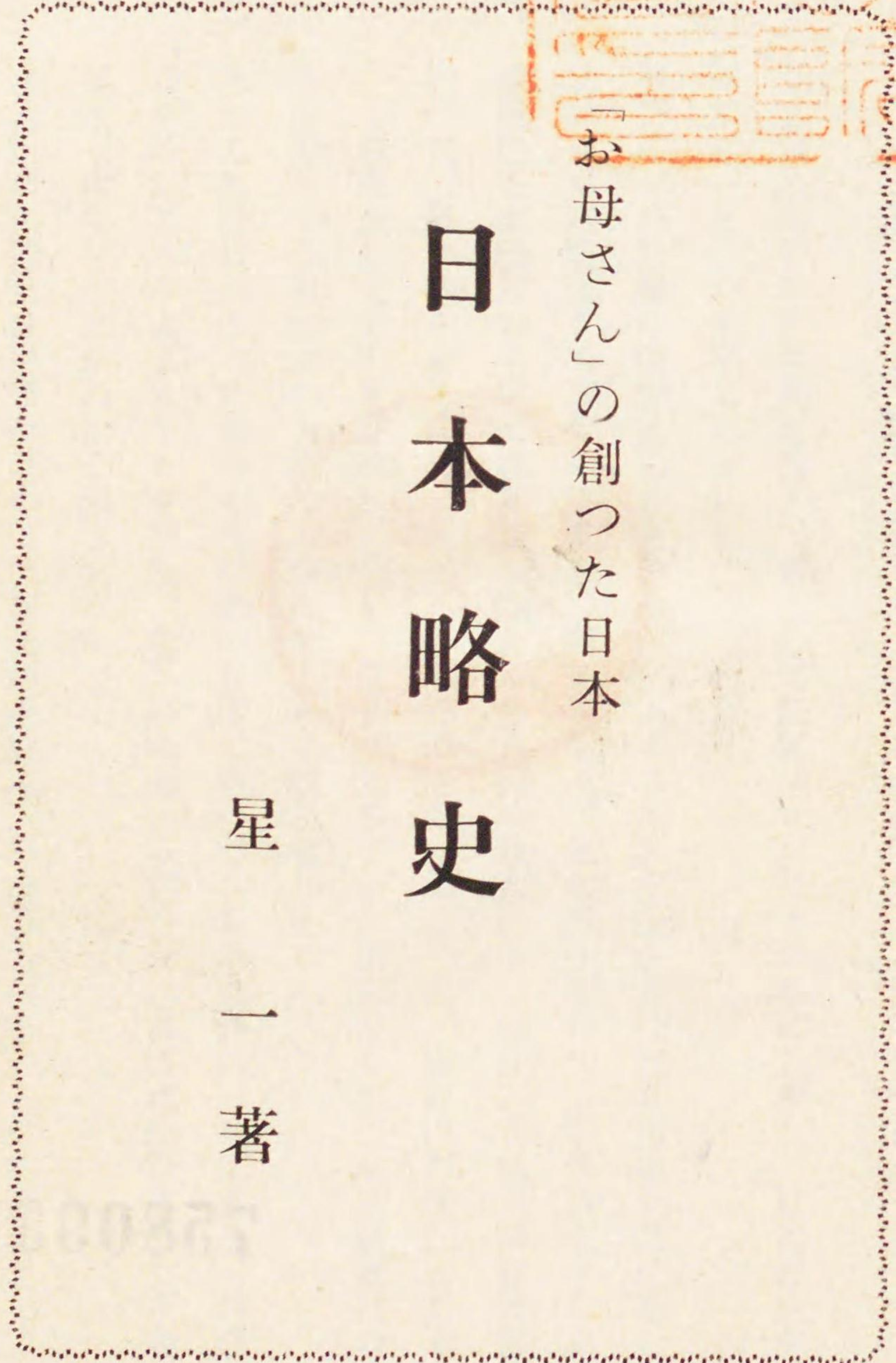




「お母さん」の創つた日本

日本略史

星一著



00373

GB71
20



758093

序 文

星 一

- 一 私は日清戦争の年米國に渡り、暫くして紐育コロンビヤ大學に入學し、政治經濟部に在學四年、一九〇一年卒業しました。
學科中、統計學の研究に重きを置き、メヨースミス先生から特別な指導を受けました。統計學は理論よりも事實の上に立つ科學であり、私は興味を持つて勉強致しました。
- 二 歐羅巴と亞細亞の中間に在る新大陸たる合衆國の最大都市、紐育の大學の特別圖書館内に在つて、靜に本を繙く時に、いつしか第三者となつて公平に、歐羅巴の文化と日本の文化——亞細亞の文化とを比較し、公平に考へて見ることが出来まして、私は歐羅巴の大學に入らずして亞米利加の大學に入つたことを幸福と感じました。
- 三 そして私は日本は「お母さん」が創つた國であつて、日本以外は「お父さん」が造つた國であると考へるようになりました。考へれば考へる程、それには理由のあることを知つて、私は一發見をしたかの如く感じました。
富士山の山麓又は中腹に居つては富士の全貌も、又高さも知ることが出来ません。

鏡に餘り接近しては自分の顔を明らかに見ることが出来ません。

私は米國に来て、初めて日本がはつきり解つたやうな氣がしました。

四 日本は「お母さん」が創つた國であることを、日本國民一般が、本能的より知能的に知ることが出来たら、そうして世界にも、それを知つて貰ふことが出来たら、どんなに祖先は満足するであらう、そして日本は世界一の協力の働きも出来ると悟りました。

説明よりは先づ實踐と考へて、學校卒業後、私は紐育に於て、ジャパン・エンド・アメリカと云ふ半ば英語、半ばローマ字日本語の月刊雑誌を發行しました。

間もなく、紐育に來られた杉山茂丸先生及び伊藤博文公の勧めに依り歸國しました。伊藤公からは統監府の官吏になれば、後藤新平伯からは滿鐵會社に入れと勧められました。それを御断りし、「お母さん」の創つた國の一國民として、小さいながら一生働いて見たいと思ひ、四百圓を資本として製藥事業に従事することにしました。

五

良い藥には國境がない、それに藥は病氣を癒すばかりでなく、病氣の豫防をする。

そうして營利會社中最も少なき資本を以て出發し、自助的協力の依り漸次健全に發展し得るものと信じ、

草根木皮を原料として日本を世界一の製藥國にして見度い、

資本主義の株式會社を家族制度化し、營利會社は資本金の五分の一を人に、五分の四を物に投資すべものであると云ふ法則を建設して見度いと、思つたからでありました。

六

自助協力的の家族式チェーン組織の販賣法を造りました。

星製藥商業學校を造り、販賣者及び其子弟を往復旅費、學費、全部無料にて教育いたしました。其に數百萬圓を支出いたしました。

そうして、總てが豫期の通りといふよりは、寧ろ豫期以上に發達いたしました。

私が茲に豫期以上と申したのは、如何に人間が大きなことを考へても、實際出來得るものより小さいものしか考へ得ぬものでありますことを體驗したからであります。

それが、不慮の災難に遭うて其の發展が阻害されました。阻害どころではない、撲滅されると一般から思はれましたが、能くその障碍を排除することが出来ました。これ全く「お母さん」を目標として、營利會社は資本金の五分の一を人に、五分の四を物に投資すべきものなることを實行したからであつて、又日本が「お母さん」の國であつたからであると感激を以て思つて居る次第であります。

七 私には名譽も金も目的ではありません。一意、日本は「お母さん」が創つた國であることを、日本國民に本能的より知能的に悟つて貰ひ度いと念願し、

そして、其のことを世界の人にも知つて貰ひ度いと念願して居るだけであります。

そして、どうしたらそれが一番よく實現出来るかの考と、行とに忙しいのでありまして、其忙しさの爲めに義理の缺禮をすることがありますのを悲んで居る次第であります。

八 昭和九年渡米の際、私はセントルイス市でウリー・ジョン、ロイド博士に會ひました。博士は私と同じ製藥業者で、ロイド製藥會社の社長であり、學界にも非常な功勞者であります。其の人に日本は「お母さん」が創つた國であることを話しましたら、次年の九月に八十六歳の高齡を以て、私を訪ねて日本に参りました。

私が横濱に迎へに行きましたら、第一聲は「お母さん」の創つた日本の國を見に来たのであるから、伊勢に連れて行けと云ふ言葉でありました。私は其の通り「お母さん」の造つた國を自動車の方々案内致しました。

五十鈴川の橋の上に二人で立ち、一つの雨傘の下に、慈母の乳とも感すべき霞を帯びた微雨に浴した時、ロイド博士は私の手を堅く握つて、此處は年寄の來る所である、今自分は

此處で死んだら、これ程仕合なことがないと言はれました。

奈良の春日神社へ参詣した時は、社前に神社の創立と共に植ゑられた千三百有餘年の樹齡を持つ杉の並木に手を觸れ千三百年の生存を感ずると言ひ、伊勢で言つたと同じく此處は年寄りの來る所である、今自分は此處で死んだら本望であると言返されたのであります。

九 私は其時から、日本は「お母さん」が創つた國であるといふことを外國人に知らしめる英文の本が必要であると考へましたが、多忙のために遅れ／＼になつて居りましたところ、愈々今回其實行することにしたのでありまして、本書はそれの日本語のものであります。實に忙しい時間中に書いたもので、見たいと思ふ参考書も見ることが出来ませんでした。それに畠違ひの私が、只信念から書いたものでありますので、不十分の所も、亦間違つた所も多々あるに違ひありません。

併し、日本は「お母さん」が創つた國であると云ふ點には間違ひがありません。「お母さん」の氣持が神代の時代から今日まで流れて居りますことも間違ひのないことで、前には個人主義の支那文化、後には個人主義自由主義の歐米の文化が入つて、其の影響を受ける處があつても、「お母さん」たるの氣持だけは變らなかつたことも事實であります。

日本略史

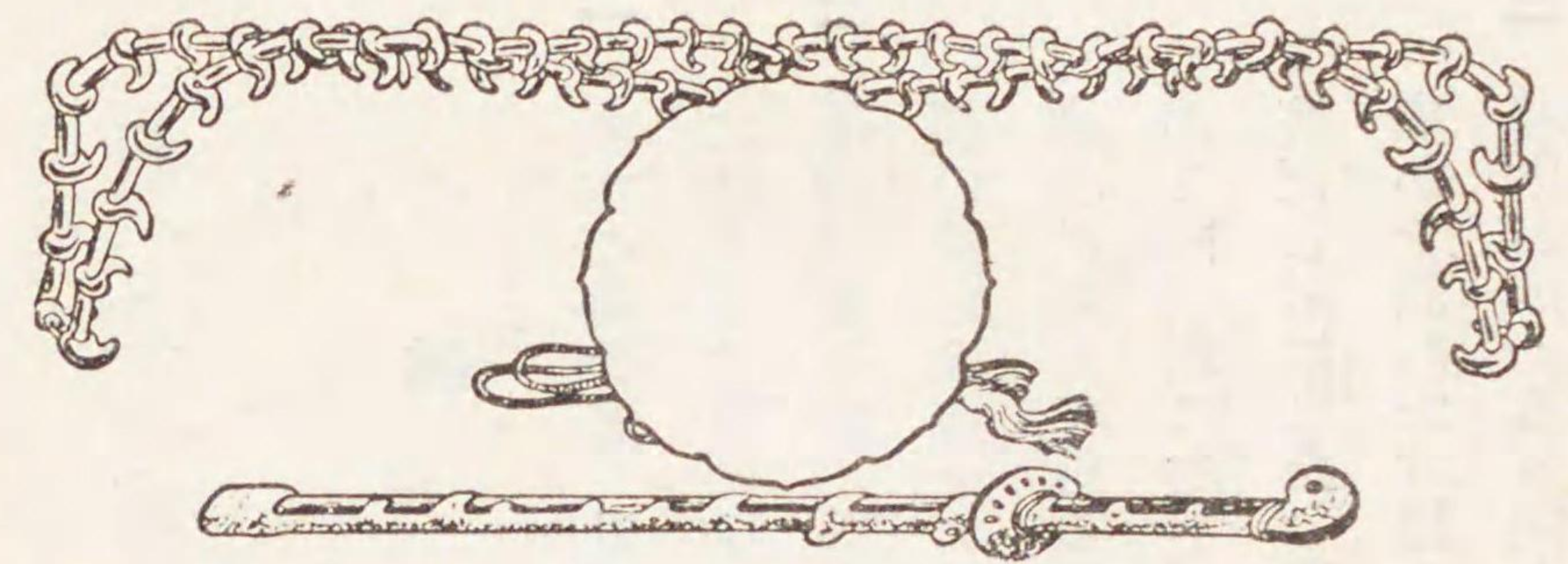
神代

- 一 草木の種子が、風や鳥に依つて撒布されるやうに、人類も、太古にあつては、海潮と風とに依つて世界に分布せられた。
- 二 著者は數年前、動物學の權威として聞えた帝國大學教授、石川千代松理學博士に對し、人類の發祥地は一ヶ所なるか、それともそれ以上であるかを訊ね、若し此の地球に人類の發祥地に適して居る場所が一ヶ所以上あつたならば、其處に人類が發祥してもよい筈であるかと問うたに對し、石川博士は、この頃は二ヶ所だと云ふ人もある。又そうあつてもよい筈だと云はれた。著者は重ねて、然らば普通云はれてゐる人類發祥地の他のもう一つは何處かを訊ねた。博士は、それは南洋邊だらうと云はれた。
- 三 著者がかゝる質問をなしたのは、嘗て著者が倫敦に遊んだ時倫敦の博物館で地球の生物發

祥地を畫いた油繪を見たが、それは海岸に於ける各種の生物の生棲の状態を畫いたものであつて、それが幾千萬年前の日本の海岸でもあつたように思はれたからである。著者は生物進化論から問ひ、石川博士も亦進化論から答へられたのである。

四 日本は亞細亞大陸の東に位置する所の東西に長い島國であり、北は北海道、樺太、千島と島を以て北極に連り、南も亦琉球、臺灣、南洋の諸島を以て南極に繋つて居る。若し日本を中心として北極及び南極に至る迄の島を數へるならば、恐らくは幾十萬と云ふ數になるであらう。

五 未だ人類と云ふ名稱を付し得るものの出来ない太古の時代の日本は、今日の本島の南端たる鹿兒島はもつと南に延びて居つたであらう。チギリス、ユウフラテスの河口及びエルサレムと我が日本の南端とが略々等しき緯度にある事は



三種の神器
八咫鏡、八咫瓊勾玉、八坂瓊勾玉

注意に價する。

六 大陸に接した島で國を成して居るものに、歐羅巴大陸に接する英國があり、亞細亞大陸に接する日本がある。

然し英國は歐羅巴大陸に接して居る孤立の島國で、我が日本は亞細亞大陸に接して、北極から南極に到る迄、無數の島嶼を以て繋つて居る協力の島とも言へるのである。

従つて此の兩國は大陸に接したる島國と云ふ點に於て、開發の上に類似した點もあるが、又異つた點もあるのである。

英國の文化は皆大陸から輸入して來た。亞弗利加、亞細亞の文化を受けるにしても、必らず一旦大陸を通過してのことであつた。然し日本は英國と同じように、大陸から多くの文化を輸入したが、それと同時に、大陸に關係なく南洋方面から直接輸入したものも少なくはないのである。

七 太古の人類の移動は今日我々の想像し得ざる様な大規模なものであつた。それは豫想外に大膽、意外に廣大であつた。舊約全書に依ると、モーゼが埃及を出でた時の壯丁以上のものは六十萬三千五百五十人で、エルサレムに着く迄に四十年かゝつた。到着した時の調べ

に依ると、壯丁以上のものは六十萬一千七百三十人で、出發の時に比して一千八百二十人減少したことになるが、牧師になるので、戦争に出なくてもよい、レビ人とされて居るものが、其外に二萬三千人ほどあつた。此内には生れて一ヶ月以上の男子も含まれて居るが、これを加へると減つて居ないことになる。

以上は戦争に従事し得る男子の數であるから、この外に女、子供を加へると三百萬人からの大人數になる。埃及を出發した時からのものでエルサレムに着いたものは僅かに二人だけで、モーゼもエルサレムを川の手前から見ただけ死んだ。他は全部移動中に出産した第二世第三世である。實に驚嘆すべき移動ではないか。

八 従つて、太平洋沿岸の諸民族が潮流と貿易風に依つて大きな移動をした事は充分に想像し得られる。恐らく、彼等は世界の民族中最大の移動をしたかも知れぬ。それは地理學から必ずしも妄斷とは云へない。彼等は太平洋を舞臺に亞米利加、南洋、亞細亞を縦横に移動したと見て宜からう。

九 佛蘭西の或學者は、人間の發祥地はメキシコのユカタン灣にありとの説をなした。其他にメキシコ地方を同様視する學者もある。

太平洋の中央の海水の鹹さは、人類の血液の鹹さと同じであると説く學者もある。若し人類が海中の分子より漸次進化したものならば、太平洋沿岸が人類發祥の地であり、その場合、或は日本民族こそ、太平洋に於ける最古の民族であつたと、地勢の上から云ふことが出来るかも知れぬ。

何故なら、現在日本程春夏秋冬の整つた國はない。且つ太古には現在よりも温く、生物發祥に最適の條件を備へてゐたと思はれるからである。然し著者は必らず、そうであると獨斷するものではない。只學者の説を綜合して、或はそうとも云ひ得るのではないかと考へるだけである。

一〇

日本の神代のことを書けば長くなるから簡略に記さう。

日本の神代記の示す所に依れば、最初高天原たかまがはらに天御中主神あめのみかみぬしのかみ、高皇產靈神たかむすびのかみ、神皇產靈神かみむすびのかみの三柱の神が在した。高皇產靈神は男性、神皇產靈神は女性の神で、この二神は天地萬物を産み成す神々で、高と云ひ神といふは、恰かも、電子即ち物質に共通な構成要素なる帶電粒子が、陽電子と陰電子とによつて成り立つのと同理である。天御中主神は中心の神である。この三柱の神が最も古く在し、その御子孫に男性の伊弉諾尊いざなぎのみこと、女性の伊弉册尊いざなみのみことの二柱の神

が在し、その間に御生れになられたのが天照大神で、高天原を治めて養蠶、織物、農業を教えられた。

天照大神の五代の御孫が、日本最初の天皇である神武天皇であらせらる。

一 天照大神の御弟、素戔嗚尊は高天原に於て荒々しき御行ひ多く、之を憤らせられた天照大神が天岩戸に御隠れになるや、天地忽ち暗黒となつたので、諸神は天安河原あめのやすかはらに會合し、歌舞を奏して大神の御怒りを解かんとした。その際、石凝姥命いしこりどめのみことは天香具山の金屬を以て鏡を作られ、玉祖命たまのつひは八坂瓊勾玉を作られ、神の枝に飾りとして懸けられ、諸神が賑やかに歌舞を奏せられたので、大神も遂に再び天岩戸を出られたのである。

二 素戔嗚尊は高天原より追はれて出雲に赴かれた。そして簸川ひのかわ上で八岐の大蛇やまたのおろちを退治されたが、その時大蛇の尾から一ふりの劍を得、これは尊い劍であるとして、天照大神に獻納せられた。これ天叢雲劍である。

三 出雲に行かれた素戔嗚尊の御子、大國主命は出雲をはじめ其附近を平げ、なか／＼勢力があるが、其他の地方はよく治まつて居ないので、天照大神は御子孫をして此國を治めしめんと御思召になられ、先づ武甕槌命たけみかづちのみことと經津主命ふつぬしとを使として大國主命の許に遣はして、其

の地方をさし出すやうに御諭になられた。大國主命は喜んで、その御仰に従ひ、領土を獻上して杵築宮きつきのみやに退かれた。こゝに大國主命を祀つたのが出雲大社である。

使に行かれた武甕槌命、經津主命は後世武神と崇められ、利根川口附近に武甕槌命は鹿島神社、經津主命は香取神社として祀られた。

一四 天照大神は出雲國を得られたので、高天原から御子の天忍穗耳尊あめのをしほみみを降して其餘の處を統御せしめんとして視察せしめられたるに、各地に散在して居る部落各々族長を有して統制するの中々容易でないとの御報告であつた。

一五 天照大神は其の御報告に基き、族人一同を高天原に招集し、何人を遣はしてこれを統制すべきかを協議せられ、その結果選ばれて天穗日命あめのほひが行くことになつた。この協議が日本民族會議の始まりであるとする事が出来る。

天照大神が斯かる會議を催しになられたのは、民族統率の重任を擔へる「お母さん」の氣持の現れであり、この會議を通じて民族協力を教へられたものである。

一六 さて高天原に於て民族會議を開催してまで種々御調査になつた上、皇孫瓊杵尊を日向に御降しになられ、そしてこれから御三代の間、日向の高千穗宮にあつて我が帝國を治めら

れた。天照大神と皇孫瓊杵尊の御時から高天原民族の移動が始まつたと観られる。

一七 天照大神は皇孫瓊杵尊に、鏡と玉と劍の三神器を賜ひ、「葦原の千五百秋の瑞穂國は、是れ我が子孫の王たる地なり、汝皇孫往して治せ、幸く天津日嗣の榮えまさんこと、當に天地と共に窮りなかるべし」と宣ひ、八咫鏡を以つて「この鏡を見ること我れを見るが如くせよ」と仰せられ、更に天叢雲劍と、八坂瓊勾玉とを授けられ、國土を治める方針を與へ、瓊杵尊と其の御子孫の爲めに祈られた。

其の時、授けられたる三種の神器は、皇位の御璽として歴代の天皇が傳へさせられる。

一八 瓊杵尊は日向の高千穂峯に降臨せられ、御子彦火々出見尊、御孫鸕鷀草葺不合尊、の三代、この地に居て恩徳を施された。これ迄を神代と稱する。

一、茲で著者が強調し度いのは、日本は「お母さん」が造つた國で、日本以外の國は「お父さん」が造つた國であるといふ事實である。

「お母さん」は子孫のことを考へる、従つて永遠性の考へを持つ。これに反し、「お父さん」は今日のことを考へる、従つて目前性になり易い。

「お母さん」は子孫を絶さず、子孫を繁榮せしめ、子孫の住む此の世をより美しくすることのみを考へ、且つそのことに努力する。

二、生物學に依れば、人類と鳥類とは、子供を生むこと及び育てることに男性が參與して居るが、其他の動物は、多く女性のみで種の保存に努めて居る。これに依つても母の氣持の如何なるものかは知ることが出来る。

三、我が日本は「お母さん」が造つた國であつて、其の「お母さん」を神とし、其の「お母さん」の教へを守つて來て居る國である。

四、天照大神の教へ給へる協力は、子孫の繁榮、子孫の進歩、子孫の住む此の世をよりよく爲したい爲めのものであつた。人類は此の世に絶ゆることなく、子孫は永遠無窮に此の世に生活せねばならぬとの觀念から、子孫の住む此の世を住みよいものにするには、大和民族のみの住みよい世界にするとは云ふのではなく、人類全體の住みよい世界にしたいと云ふ母の念願の現れである。

五、この天照大神の御教へから、著者は、進歩は神である、協力は神の命ずる進歩力であると悟り度いのである。

人間は永遠無窮に進歩するのである。其の進歩を助けるものは協力の外にはないのである。協力的なくして此の世に存在し得るものは一物もないのであるから、協力は神の命ずる進歩力と云つて然るべきである。

六、物體の原をなす電子も陰陽の協力である。

日本國民は天照大神の教へられた進歩と協力を遵奉して居る國民であつて、日本の國體そのものは協力の權化である。従つて、日本の家族生活も教育も社會生活も政治も經濟的活動も皆協力の上に立つて居るのである。

七、日本歴史を見る時に、何人も、凡ゆる歴史の出來事が此の協力觀念から出發してゐることを知らずには居られない。

古來、日本には協力の觀念があつて、權利義務の觀念は絶無であつたとも云ひ得るのである。

個人主義の支那の文化が輸入されても、協力の觀念の上に與へた影響は少なかつた。それが、個人主義自由主義の近世歐羅巴の文化が入るに従つて、強い權利義務の觀念が注入され、法律の上にもそれを見ることになつた。

八、「お母さん」から授けられたる協力觀念のみにては、權利義務の觀念の上に立つ法律を造るのでなければ、諸外國と對等の交際が出來ない爲めに、歐米の法律を日本化する暇を待たずに、權利義務が急に日本に強調されることになつたのである。

然し、今尙ほ、この「お母さん」の教へられたる協力は日本國民の心髓に徹底して居る。偶々現代文化の教育を受けた者の中には權利義務の觀念に提はれて居る者があるが、併し彼等の潜在意識には「お母さん」の協力は残つて居て、何かの機會にそれが現はれつゝある。

九、而して天照大神の教へられた協力は、世界の「お母さん」の念願する協力である。それは民族内の協力和云ふ様な狹義のものではなく、民族と民族間の協力でもあつて、民族間の協力は民族内の協力から出發せねばならぬと教へられたものである。

一〇、この御教への故に、出雲の國に行かれた素戔嗚尊は土着の稻田媛とも結婚せられて大國主命を生み給ひ其の地を治められたのである。出雲の國とは今日の島根縣で日本の西北の所である。

又九州から瀬戸内海を通つて大和國橿原(奈良附近)に於て、最初の天皇として即位式を行はせられた神武天皇も、同じく土豪の五十鈴媛と結婚せられたのである。

一一、「お父さん」の造つた國にも協力觀念はあるが、それは狹義の協力である。自我の協力である。

「お母さん」の造つた國の協力觀念、即ち天照大神の教へ給へる協力は無邊の廣義のものである。

一二、哲學者は人間の働きを眞、善、美の三つに分けて居る。

心理學者は智、情、意の三つを以て説明して居る。

又哲學、宗教、藝術と分けられたものもある。

天照大神は三種の神器を以てそれを示されたものと察せらる。

鏡は眞、智、哲學を示し

玉は善、情、宗教を示し

劍は美、意、藝術を示して居らるゝと著者は考へ度い。

一、日本がかくの如き發達過程を辿る時、隣邦支那は皇紀前三〇〇年頃黃河流域に漢民族が定住して建國の基礎を置き初め、伏羲、神農、黃帝相續いて治世し、皇紀前一七〇〇年頃、西曆前二十四世紀に堯帝位にあり、同じく皇紀前一六〇〇年頃、西曆前二十三世紀には堯の禪つづりを受けて舜位にあり共に模範的善政を施いた。次いで禹は同世紀の末即位して初めて國號を定め夏と稱した。皇紀前一〇〇六年、西曆前十八世紀に夏滅び殷の湯王代つて即位した。皇紀前三九二年、西曆前十二世紀、周の武王は殷を滅ぼして周室を開き、同七世紀末より國內亂れ、所謂春秋戰國時代に入った。

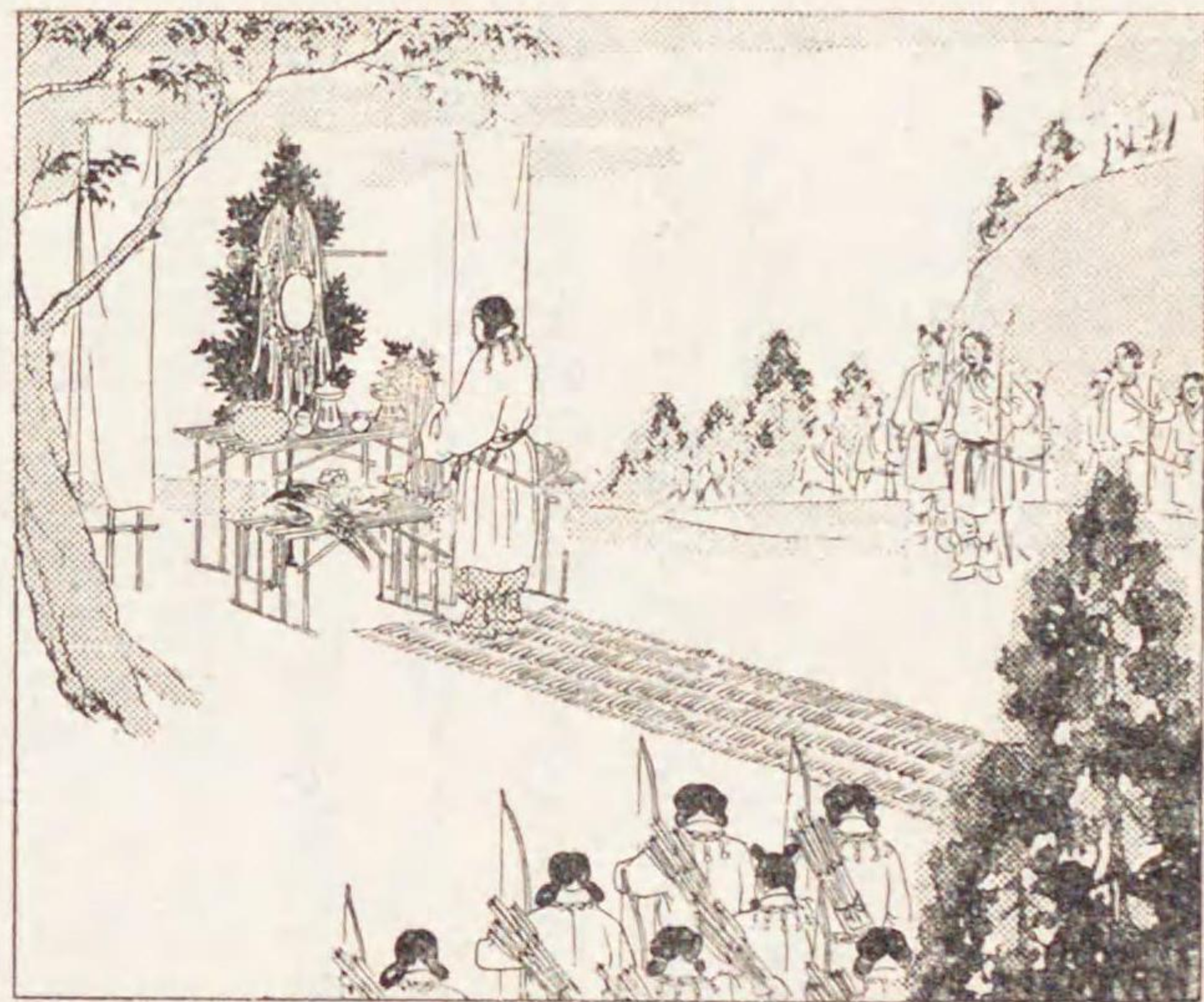
二、西洋に於ては皇紀前三七四〇年頃、西曆前四十四世紀ナイル河流域に埃及國が興り、皇紀前三三〇〇年頃、西曆前四十四世紀チギリス、ユーフラテス河流域にバビロニヤ國興つた。皇紀前一五九〇年頃、西曆前二十三世紀ベビロニヤ王ハムラビは有名なハムラビ法典を作つた。皇紀前一二六〇年頃、西曆前二十世紀ヘブライ酋長アブラハム、カルデヤ地方を去りパレスチナに移つた。皇紀前一二四〇年頃、西曆前二十世紀には既にフェニキヤ人がアルハベットを作つてゐる。皇紀前一〇四〇年頃、西曆前十八世紀にアッシリア王國興り、皇紀前九四〇年頃、西曆前十七世紀はギリシアのエーゲ文明時代であつた。皇紀前八九〇年頃、西曆前十六世紀ヘブライ人はパレスチナより埃及に移り、皇紀前六六〇年頃、西曆前十四世紀にはモーゼに率えられて埃及を去つた。皇紀前三五〇年頃、西曆前十一世紀にはヘブライの賢王ソロモンあり、フェニキヤ人の海上活躍は目覺ましく英國を發

見してゐる。皇紀前一一六年、西曆前七七六年にはギリシヤに第一回のオリンピヤ競技開かれ、皇紀前九三年、西曆前七五三年はローマの建國の年であつた。

神武天皇

(皇紀六六〇—七六六)
(西曆前六六〇—五八五)

- 一 日本の初代の天皇を神武天皇と申し上げる。
天皇は天照大神直系四代鸕鷀草葺不合尊の御子で、九州の日向から大和（今日の奈良地方）に御移りになり、御即位式を擧げさせられた。
- 二 神武天皇が九州より瀬戸内海に沿うて大和に移動せられるに當つては、當時の交通上或は地方土豪との御交渉の點等に於て多くの困難に遭遇された。
この移動は、現在の日本人の祖先たる大和民族の九州の地に於ける發展に伴つた最大の移動であつて、天皇の率ゐられた族人の數は相當の數であつたらうと察せらる。移動に際しその途次の先住民族は、折衝して見れば同種異族の者もあり、進んで同種である證據を提示し、喜んで御統制の下に服従する者も多かつた。
- 三 天皇は浪速（今日の大阪）より大和に入らんとせられたが、山が多く、又土豪の強き反抗



神武天皇の御即位

者もあり、進むに人を損することの多きを悟られ、船を以て南廻の遠路を採られ、反抗者の背後に出でられた。其の際金色の鳥が飛び來り、天皇の持たれた御弓の弭に止り、其の光の爲めに反抗者は一様に褶伏した。現在日本に於て最大の武功に對する表彰に明治天皇の御制定なされし金鷄勳章があるが、その金鷄は此の時の金の鳥に由來するものである。

四

かくて、大和に入られた天皇は畝傍山うねびの東南なる樞原かしばらに宮を建てられ、土豪の姫たりし五十鈴媛を立て、皇后とし給ひ、大嘗祭を行はせられ、三種の神器を正殿に奉じ、御即位式を擧げさせられた。

三種の神器を飾られたのは、天照大神に御即位を奉告されるためであつた。御即位の式とは、皇祖天照大神に奉告しお教へを受け給ふ御式である。

天皇御即位の年を日本の紀元元年とする。それは西洋紀元に先立つこと六六〇年で、丁度ギリシアの第三十回のオリンピア祭の年であつた。

五

神武天皇の用ひ給ひし御武器は、主として弓と矢であつたが、鐵の劍も用ひられ、それは十握りもある長いものであつた。

一、紀元節は、神武天皇の御即位を記念する國民的大祭で、毎年二月十一日である。

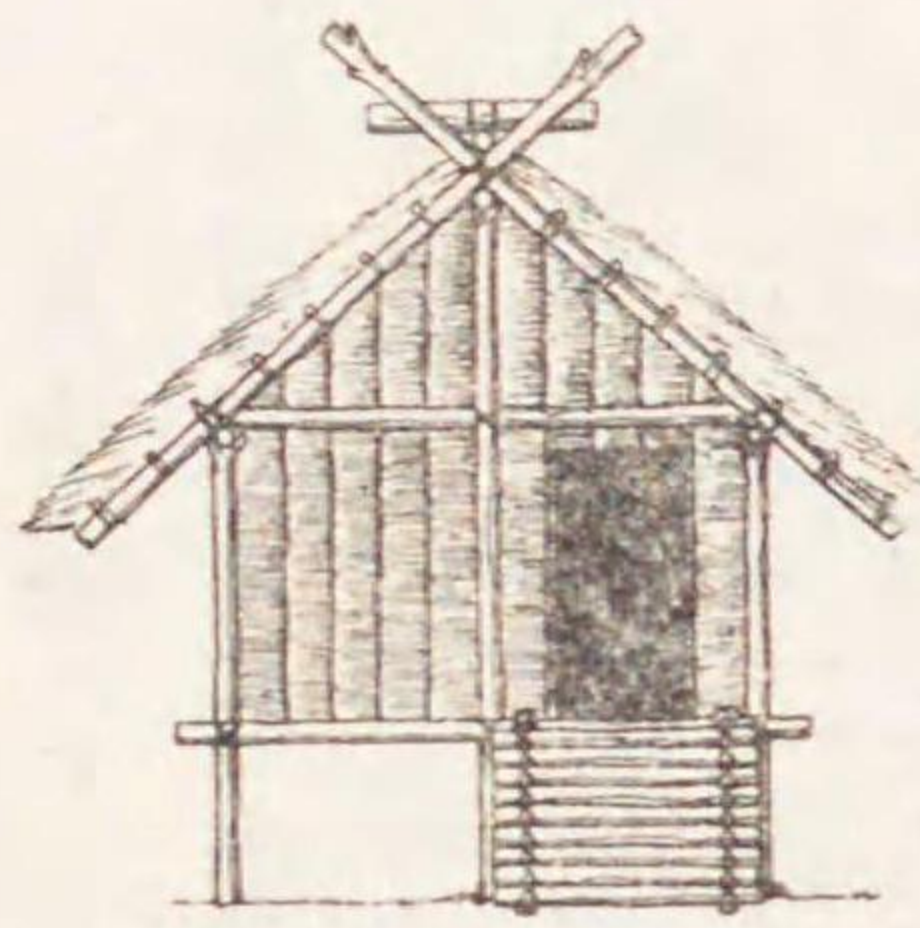
二、天照大神が親しく大嘗祭を行はれて以來現在までこれは續けられて居る。

大嘗祭は、父帝の崩御後、其の皇位を繼承あらせられ、皇祖を祀らせ給ふ大祭であつて、即ち我が國固有の即位式なのである。

三、新嘗祭は新穀の成熟を神に奉じて其の一年の恩を謝する祭である。

丁度ユダヤの刈穂祭の如き一大潔齋日とも見るべきもので國を擧げてのお祭である。

現在新嘗祭は十一月二十三日であつて、北米合衆國のサンキスギーピング祭と相前後して居る。



上古の神宮

四、祀をするには禊と祓が必要とされてある。禊とは身を清めること、祓とは諸々の穢れを除くことである。穢れの身を以ては神の前に立つことが出來ないとされてある。

祓は懺悔の意を含み、救の第一義であつて、祀は政治上の第一義とされてゐる。

五、己の犯した罪に對しては、又己の行爲により起つた凶事に對しては、己の有する一切の物を投げ出して其罪の穢れを祓ふことになつて居る。

祓は單に精神的の悔悟の上にも物の犠牲を必要とされた。

素戔鳴尊が天照大神の大嘗祭を妨げられたことに依つて罪を得られた時、水にて身體を清め、自己の持つて居る總ての物を差出し、最後に涙まで出して以て祓とされた。

祓は自己の持つて居る總てを出すのであつて、物質以外のもので持つて居るものがあれば、其のものも出さねばならぬから、人間の身について居るもので最高の價のあるものは涙である、その涙までも出さねばならぬことになるのである。

斯かる儀式も、畢竟「お母さん」の心からの産物とせねばならぬ。

六、犯罪のことをツミと云ふ。ツミとは悪しきもの穢らはしきものを外に對してツツミ匿くすところから起つた言葉である。

故にツミが犯された場合には、これに祓を科して其の穢れを清め、之れに依つて神の怒りを和らげなければならぬとせられた。

不具、疾病、災厄、等もノリに違つて怒の怒りを買つた結果であると思惟され、ツミに數へられて、祓を科せられた。

祓は刑罰の一つであつた。

神に向ふ心持ちは、我國に於ては、親と子との關係と云ふ根本的のところから出て居る。

七、日本古代の文明は銅と鐵に依つた。銅は日本に多く産するが鐵は少く、出雲の山奥に在る砂鐵と、鹿島、香取神社の在る海濱の砂鐵が使用された。

出雲の砂鐵は深く山奥にあり、砂鐵の在る所には大蛇などが居り、其の大蛇の脊には松葉が固く付き、腹は砂鐵の上を這ふために緒くなつて居た。そういふ大蛇などの居る所を通過せねば砂鐵の在る所には行けなかつた。

素戔鳴尊の天照大神に献上された劔は、斯るところから得られたことから、大蛇の尾から得られたと神話化されたものと思はれる。

六 神武天皇は肇國的活動に御盡力なされ、御在位七十六年、百二十七歳で崩ぜられた。

一、神武天皇の時代に支那に於ては老子が生れ、印度には釋迦が生れてゐる。

二、西歐ではギリシヤ七賢人の時代であつて、バビロニヤのネブカトネザルがユダヤの首府エルサレムを陥れ、住民を殺し其の餘をバビロンに移した時代であつた。

前六世紀

皇紀六一—一六〇 西曆前六〇〇—五〇一

- 一 神武天皇は皇紀七十六年西曆前五八五年崩御せられ、翌年畝傍山東北の御陵に葬られた。空位三年第二代綏靖天皇即位せられ、都を葛城高丘宮に遷さる。天皇の御治世は三十三年に及び、八十四歳を以て崩ぜらる。
- 二 第三代安寧天皇は皇紀百十三年西曆前五四八年即位せられ、都を大和片鹽浮穴宮に遷さる。

御治世は三十六年間で、崩ぜられたのは西曆前五一年である。續いて第四代懿德天皇即位せられ、都を輕地曲峽宮に遷さる。

一、上古に國引と云ふ言葉があつた。

出雲の國は狭小なので、朝鮮の一部を引張つて來て出雲の國を造つたといふ物語りから出てゐる。朝鮮の日本海に面した處に迎日灣がある。元來この處は大きかつたが、日本で引張つて行つたので小さくなつたと朝鮮の古い本にも書いてある。

朝鮮と日本が昔は陸続きであつたとは云ふことが出来なくとも、今日見るよりは更に、或は島をもつて、

朝鮮とは接近して居たことであらう。従つて兩國間に人間の移動は多かつたものと思はれる。

二、上古の日本人の服装は、今日の日本服よりは却つて西洋服に近いものであつたらしい。

天細女命が胸と乳を現はして、猿田彦の神を驚かしたとあるから女は殊に肌を隠すことを禮儀とされ



上古の武裝

てゐたものゝやうだ。

- 三、髪は結ばれ、その結び方は男は二束に頭部の左右に結び、女は幼少の時は長く背後に垂れ、成長の後は其の髪を結び上げたものと考へられる。
- 男女共に櫛は用ひられた。

一、この世紀の間に、支那に於ては戰國時代で諸侯相争ひ、孔子が（西曆前五五一）生れてゐる。

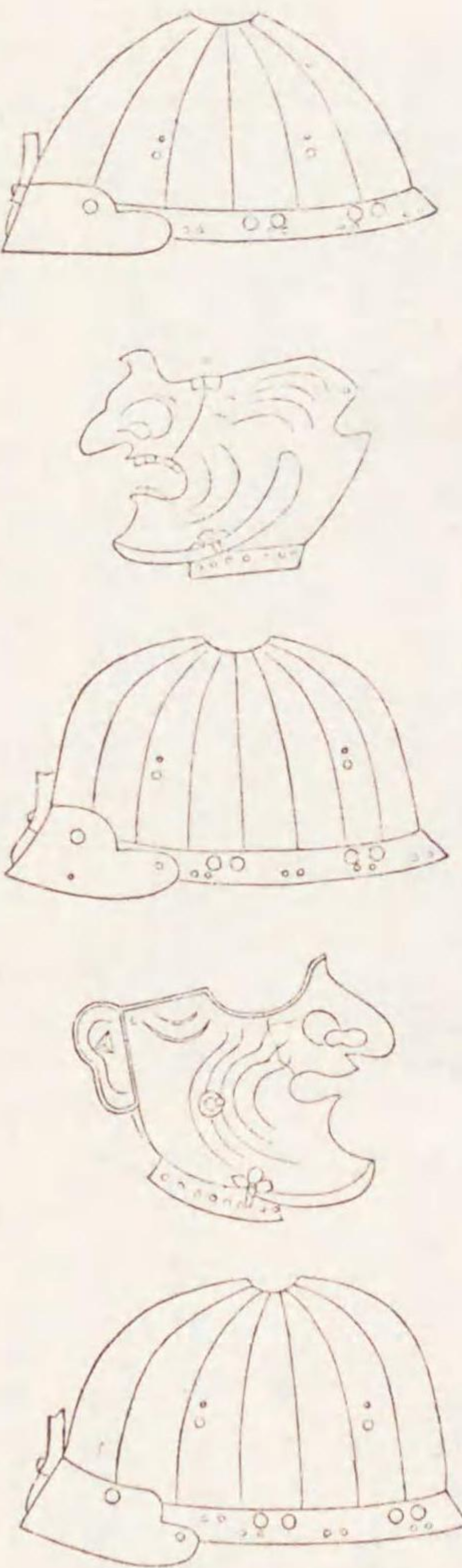
二、西歐ではネブカトネザルが勢力振ひ、ローマでは國王憲法を定め人民に參政權を與へ、印度の釋迦（西曆前五四三年）死し、ローマが共和政となり、ベルシヤ王ダリウスの印度征服等があつた。

前五世紀

皇紀一六一—二六〇 西曆前五〇〇—四〇一

一 懿德天皇は御在位三十四年、皇紀一八四年西曆前四七七年崩ぜられ、翌年葬られた。
 二 空位一年後第五代孝昭天皇が即位せられ、都を掖上池心宮に遷さる。

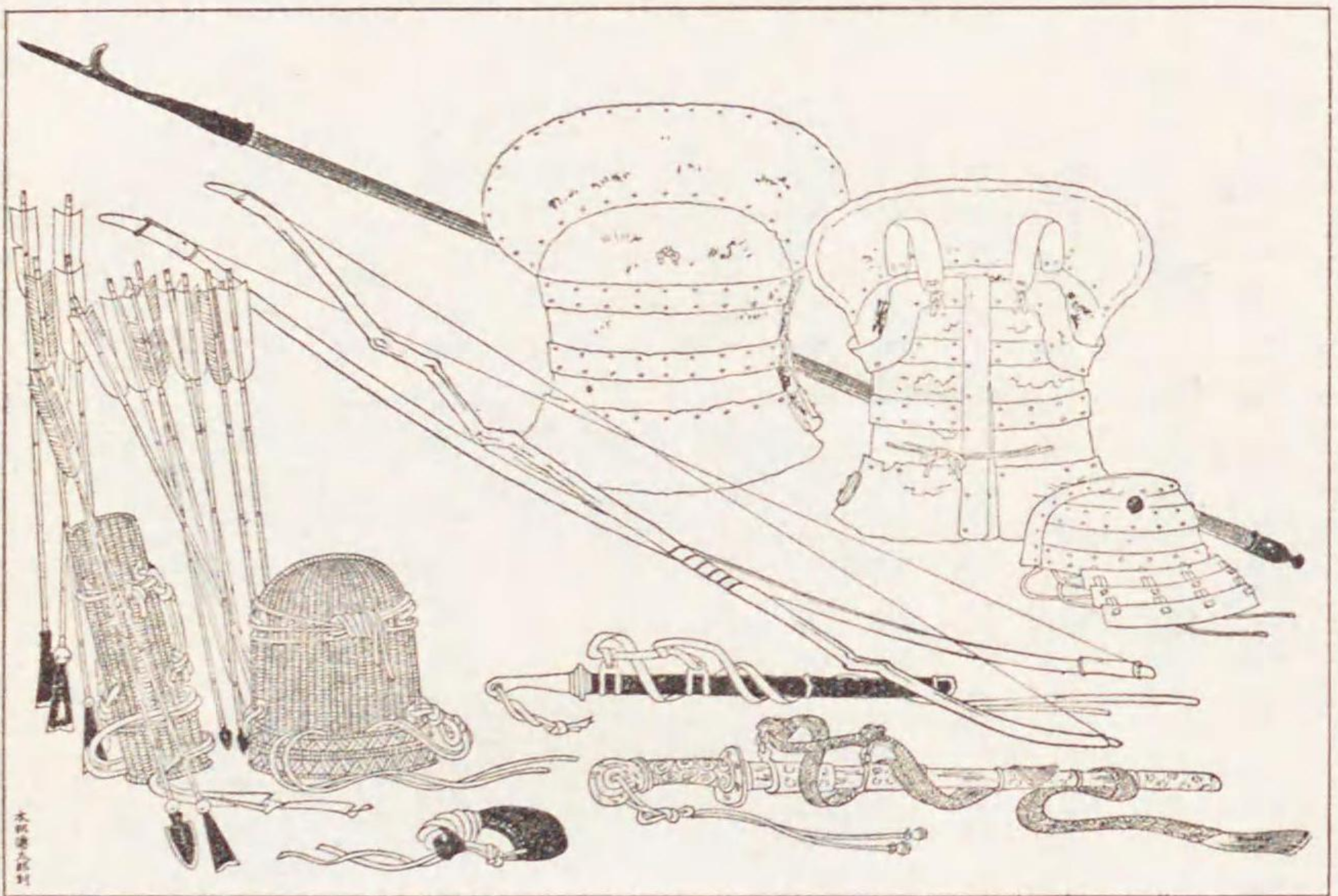
一、人間は毎晩寝る。寝ることは死の稽古である。明朝は起きて新しい元氣を出して働く。寝ると云



上古の冑

ふことは死ぬことで、起きると云ふことは生き返ることである。人間の生命が死んで生れ、生れて死に、死んで又生れると云ふ觀念の上に、我々の生命は永遠に子孫に連續して行くものであると日本人は考へる。故に死んだ先祖をもなほ生きて居る者の様に思つて供物をしたり、祭祀をしたりする。同時に生きて居る人でも死人と同様に、例へば旅立をした後などは蔭膳を据えたりするのである。

二、日本人には古來死といふ觀念がなかつた。死ぬことを日本人は岩に隠れるとか、神去るとか、八十の曲手に隠れるとか云つた。そして子孫が呼ぶと何時でもお母さんでもお父さんでも出て來ると考へた。無くなると云ふ觀念は日本人にはないのである。肉體は腐滅しても靈は永久に生きてゐると考へる。死者に御飯、御酒を供へ



上古の武具と武器

るのもその意味である。

佛教では死は未來への出發である。そうして死後の生活は長いと云うて居る。

キリスト教にも復活といふことがあるが、然しこれには空間がある。日本は天照大神以來、親の日の命が亡くなるとその子が直ぐ日穂の命になるのであつて、空間がない。

三、それ故日本の神社では葬式をしない。佛教が渡來してから日本にも寺が出來たが、其の寺の中には葬式を行はない寺も出來た。現在東京附近にある成田の不動尊は其の一つである。成田不動は祈禱だけの寺である。

一、この世紀、支那では戰國時代が続く。

二、西歐では第一、第二、第三、第四次のペルシヤ戰爭があり、ギリシヤが遂にペルシヤの攻撃を退けソクラテスが（西曆前四七〇）生れ、ローマで（西曆前四五〇）十二銅版の法典が出來、ペロポネサス戰爭でスパルタ、アテネの抗爭が続いた。プラトーンが（西曆前四二九）生れた。

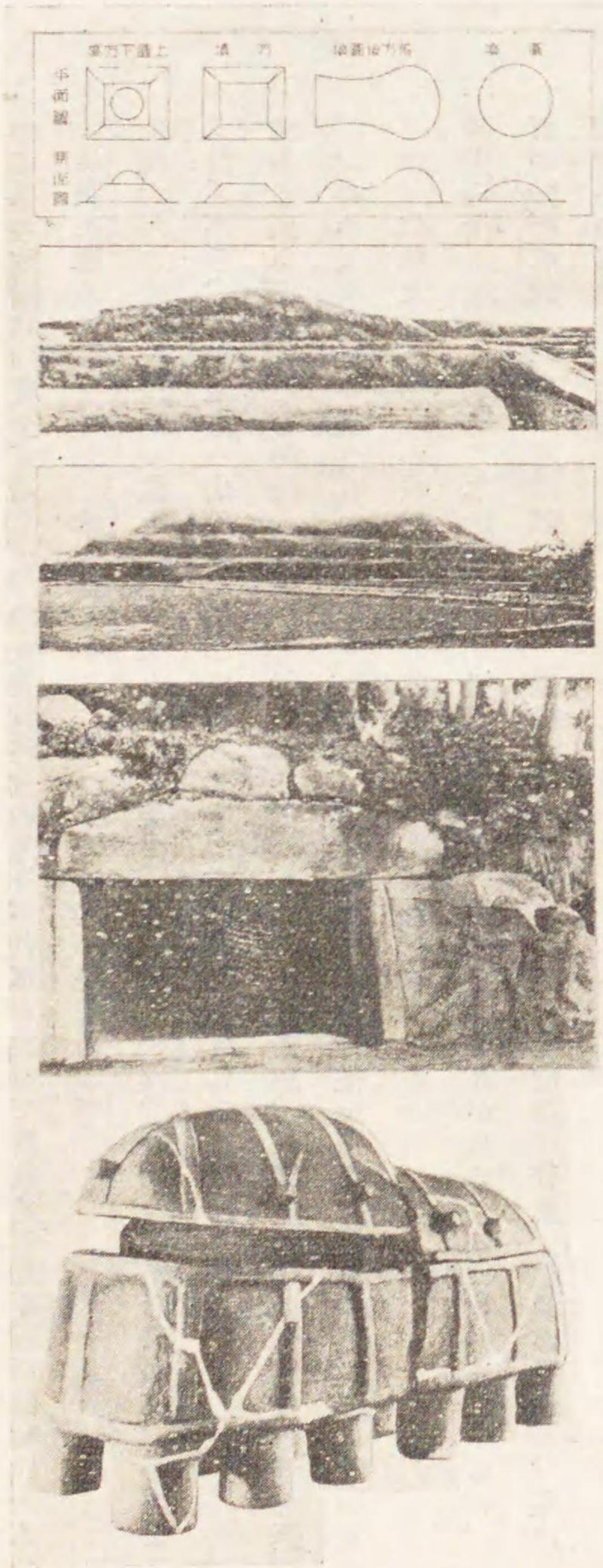
前四世紀

皇紀二六一—三六〇 西曆前四〇〇—三〇一

一 この世紀の初め皇紀二六八年西曆前三九三年に孝昭天皇崩ぜられ、續いて第六代孝安天皇即位せられ、都を室の地秋津島宮に遷された。天皇の御在位期間は百二年、百三十七歳で崩ぜられた。

一、近頃掘出される石器時代、金石器時代の遺蹟に依ると、四千年、五千年前既に我々の祖先は相當な

上古の墳墓



文明を持つて居た。石器時代の人々は貝を食べて居て、未だ穀物を食べることを知らなかつた。従つて其の住居は一定して居らず、恰度遊牧時代の人々が牧草を逐うて移住する如く、石器時代の人々は貝を逐うて移住した。米を食ふやうになつたのは其の後である。

天照大神の時代には既に蠶を飼ひ、米も作つて居た。米を作るには、灌漑の點から云つて、平地よりは、寧ろ、大和地方の山の間に挾つてある盆地の方が便利とされたと思はれる。

二、米から酒を造ることも神代の時代から行はれて居つた。それは十三、四歳の女子の丹精なる者を撰び、口中を清め飯を嚼ましめて、これを醸して造つたのである。糶を用ひて酒を造るやうになつたのは、仁徳天皇の初めの頃、朝鮮から其の醸造法を學んだ後である。

三、神代時代の家屋は總べて木造で、柱、梁、桁、舷木、戸、窓、扉等がある。柱は地中に立てられ、釘の發明が無く、藤、葛の類で結び、屋根は草、茅葺で、床には皮疊、管疊、繩疊が敷かれ、壁は板であつた。

土の壁はずつと後に出來た。家屋の周圍に垣あり、門を設け、門の戸には鍵があつた。便所は川の上に造られた。汚穢を忌みて川に流すのに便利であつたからである。便所を厠かわやと云ふのは此處から來たのであるといはれる。

併し此時代頃には家屋に相當の進歩があつたであらう。掘出される土器に依つても當時粗工業が發達して居た模様である。

一、この世紀に支那では秦が強大となり、六國を相手に覇を制せんとする勢となつた。

二、西歐ではソクラテス刑に處せられて(三九九)死し、アリストテレス(三八四)生れ、テーベのエパミノンダス現れ、マケドニヤの歴山大王(三五六)生れ、諸方の遠征が行はれ、三三二年埃及を征し、アレキサンドリア市を創立し、三二七年印度を征し、三二三年バビロンに死んだ。アリストテレス(三二二)死し、羅馬では水道を(三一)築いた。

前三世紀

皇紀三六一—四六〇 西曆前三〇〇—二〇一

一 孝安天皇は皇紀三七〇年西曆前二九一年崩ぜられ、

第七代孝靈天皇即位せられ、都を黒田鷹戸宮に遷された。

その御在位中皇紀四四二年西曆前二一九年、秦の徐福が三千人の男女を率えて歸化した。朝廷ではこれに大和の國に土地を與へられ、その子孫に秦氏の姓を與へられた。

孝安天皇は皇紀四四六年西曆前二一五年崩ぜられ、

續いて第八代孝元天皇即位され、都を輕の境原宮に遷された。

上古の土器



一、日本では天照大神を太陽として居り、従つて、道德の基礎は太陽を汚さないことにある。陽と火はその光、その熱、その作用から云つて殆んど同じである。そこで日本人は火を神聖視するのである。

二、昔、日の神が御生れになつた。その赤坊を切つた處、その血が周りの木や石に飛び散つた。そこで木と石とを打付けると火が出るのであるといふ傳説もある。

三、血も又陽と同じ言葉で、同様に神聖視され、血が出て汚れることは陽を汚すこととして忌まれた。そして血液は大切にされ、月經の時の血もお産の時の血も大切にされた。喧嘩をして血を出すことも汚すこととして喧しくされた。

日本人は大切にすべきものを大切にしなければ祟りがあると考へるのである。

四、古代には契約をなすに手を握つて成立を證する風習があつた。今日子供の遊戯中に約束の表徴として、指切りと云つて小指と小指を握り合ふことがあるが、それはこの古代の風習を續けたものと思はれる。

手を握ることをチギリ、タニギリと云ひ、手の切れることをタギリと云ふので、契約は手を握るところからチギリと云はれたのである。

一、この世紀に支那では秦の始皇帝が天下を統一し、それが三代で亡びて漢の高祖が天下を統一した。
 二、西歐では羅馬始めて平民より僧侶を(三〇〇)撰ぶ。西曆前二六五年に於けるローマの人口は二九
 二、二二四人となり、ポエニ戦争がローマとカルタゴ間に起り、ハンニバルが現れローマに進入したがザマの會戦で敗れた。

前二世紀

皇紀四六一—五六〇 西曆前二〇〇—一〇一

- 一 孝元天皇は皇紀五〇三年西曆前一五八年崩ぜられ、第九代開化天皇即位せられ、都を春日率川宮に遷さる。

一、家族制度には、個別的家族制度と、綜合的家族制度の二つがある。

綜合的家族制度中には酋長を主とする家族制度があるが、我國の如く國家全體が一つの綜合的家族制度になつて居るのは他に類がない。

二、日本の如く國家全體が一つの綜合的大家族主義の制度の所には皇別、神別の別あり、階級もあり差別もあるが、階級即ち無階級、差別即ち平等、平等即ち差別であつて、崇祖敬神の上から、秩序維持の上から、進歩の上から、便宜的に階級も差別も必要とされて居るだけである。

「我れも亦高皇產靈神の裔なればその中程は兎にも角にも」と云ふ歌は、國民全體が皇室の御先祖と其の血を同じうして居るとの信念を表したものである。

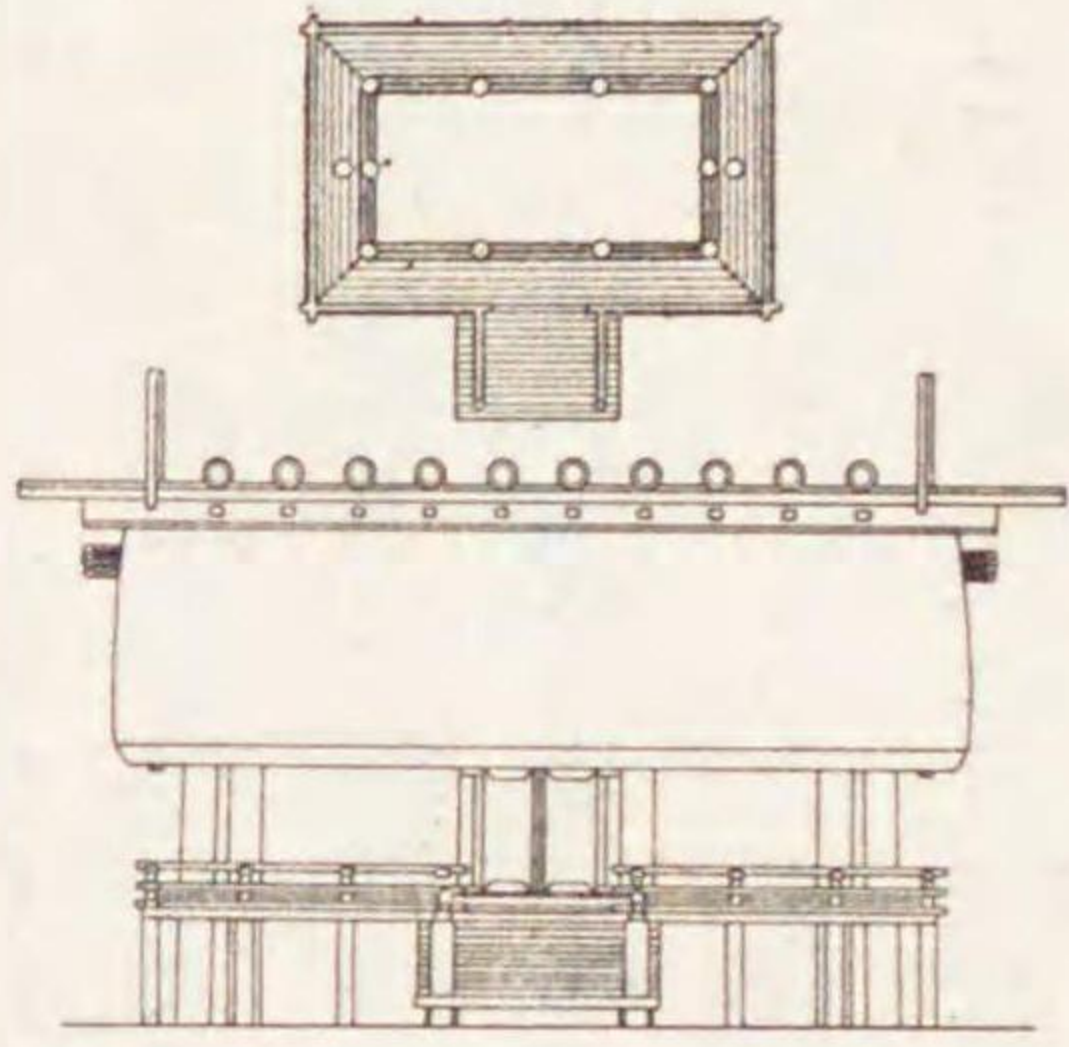
- 一、この間に支那では漢の代が続く。

二、西歐ではハンニバル（一八三）自殺し、ポエニ戦争がローマの勝利となつてカルタゴの全滅を來し、ローマの貴族黨と民黨との抗争が烈しくなり、民黨の首領ケーアス・グラックスが殺された。ジュリアス・シーザーが生れたのは丁度西曆前一〇〇年である。

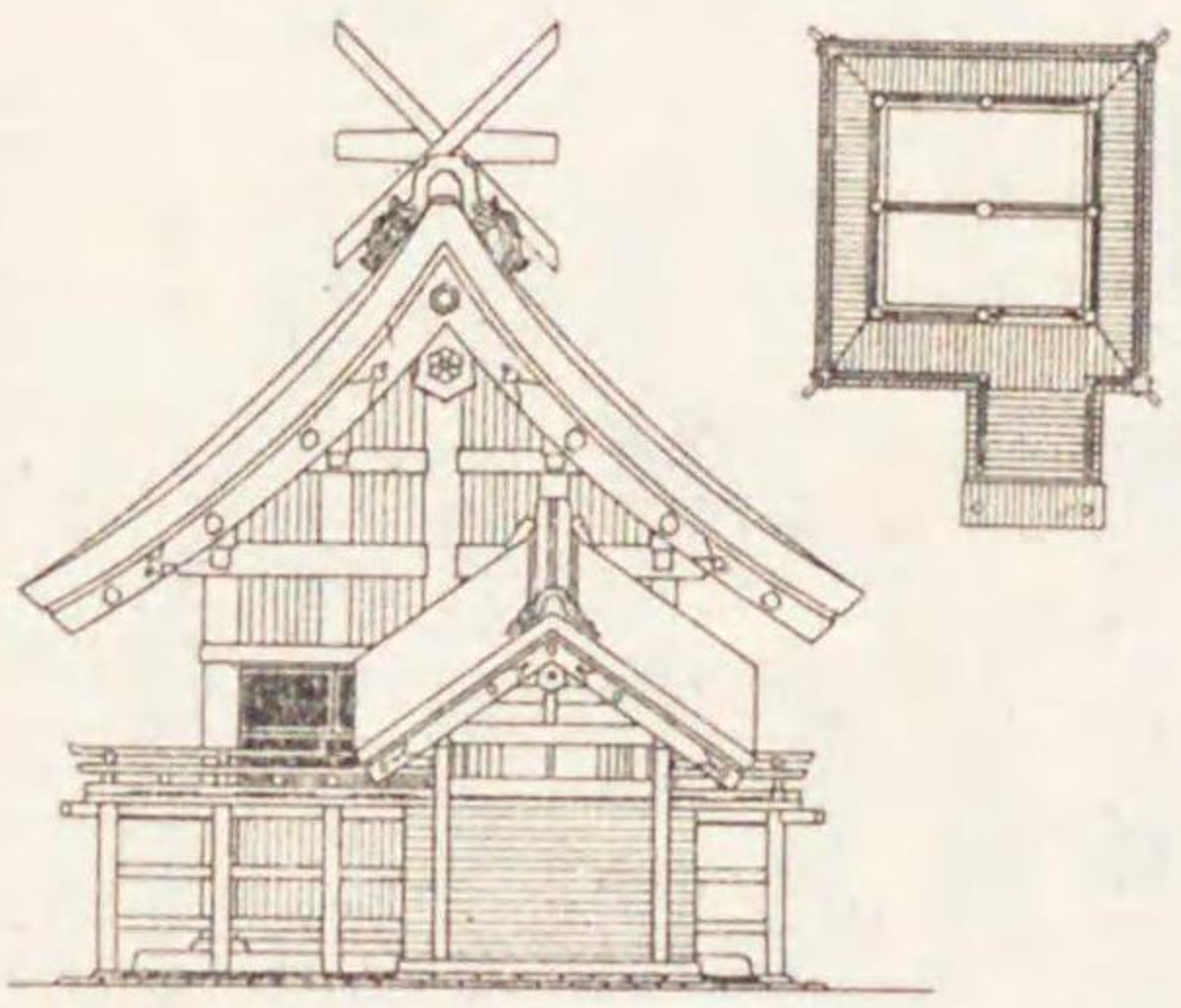
前一世紀

皇紀五六一—六六〇 西曆前一〇〇—一

- 一 皇紀五六四年、西曆前九七年、第十代の崇神天皇即位せられ、都を磯城瑞籬宮に遷さる。崇神天皇の御在位は六八年に達し、皇化はその發展に一劃期を來たした。
- 二 神武天皇以來歴代の天皇は、古代の慣習に依り、大和の地域内に於て次々と新らしい都を定められ乍ら、數百年の間靜かに力を養つて居られた。その間に大和民族は修養も出來、發展の基礎も漸次固まりつゝあつたが、崇神天皇に依つて具體的にその力が發揮されたのである。
- 三 これ迄、日本の政治は凡ゆる古代國家がさうであるやうに、祭事を中心として居た。そして天照大神より相傳へさせられる三種の神器は皇室に安置せられて居たのであるが、社會



皇大神宮



出雲大社

の進歩は政治と祭事との分位を必然的ならしむる程に
發達した。發達とは複雑化とも云へる。
こゝに於て崇神天皇は大和の笠縫邑むらに天照大神を祀り
三種の神器中神鏡と神劍とを模造せられて、之を神璽
と共に宮中に置かれ、天照大神の授けられた神鏡と、
神劍とは笠縫邑に移し奉り、皇女豊鍬入姫命とよすきいりひめをして齋
き祭らしめられた。

四

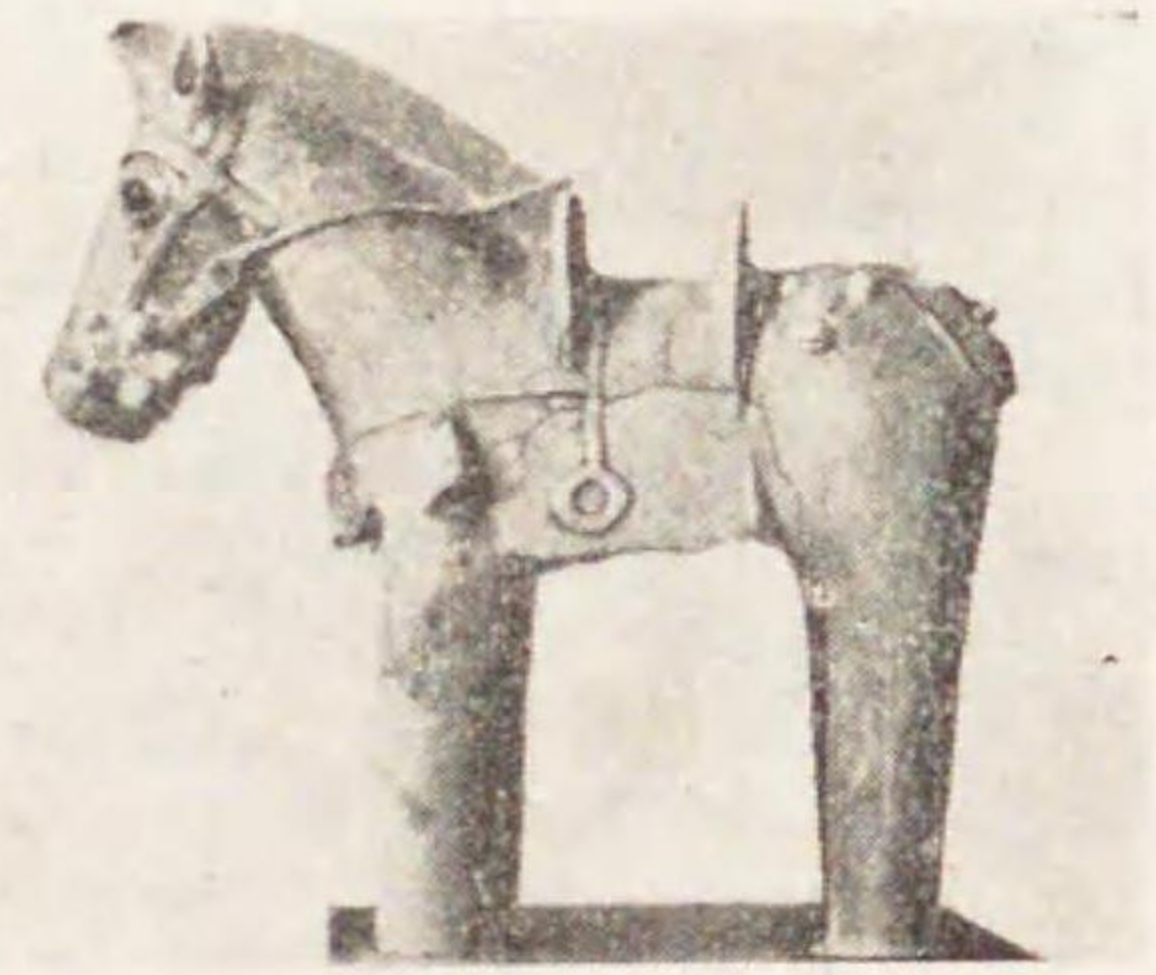
崇神天皇は、更に天津神、國津神の神地と神戸とを定
められ、神道の經濟的基礎を固めさせられた。
天津神とは高天原民族の皇祖を祀つたもので、國津神
とは地方神である。

一、神道とは日本の宗教で汎神教である。

キリスト教、佛教等の外國宗教が、何れも人間自己の救濟
であるに比し、神道は不幸よりの救濟、苦惱よりの解脱は

全く念頭に置かない所の純粹なる祖先崇拜・子孫愛の觀念に源を發する。

日本民族の祖先たる天照大神を初め、その後の日本民族進歩のために貢獻せる人々は何れも神とし
て神社に祀られ、國民の崇敬を受ける。それ故國家としても祀る神あり、同時に又各部落でも部落



埴輪
上は馬、下右は男、左は女

として祀る神あり、殊に各戸がそれぞれその家の神を祀るのは、祖先崇拜と進歩の觀念のみがある
からである。

二、日本人は年の始めとか、或ひは一定の祭日には、身を清め心を清めて彼等の家の神に祈り、部落の神に祈る。祈りは常に子孫の繁榮、國家乃至部落の發展であつて、自己一身の悩みに對する救済を求めるとは全然ない。

祖先に對するこの祈りこそは日本人が絶えず進歩的ならんとし、絶えず犠牲的ならんとする性質を完全に説明するものである。

三、かゝるものとしての神道は、日本の太古より現代に至る迄一貫して、常に日本民族の精神的基調をなして維持されて來た。

諸外國に於ては一の發展的なる宗教が興る場合、それに對して頑強なる反抗が起る。そして併し究極に於てその宗教が勝利を制した場合、その國家はそれ迄の信仰を全く棄て去り、その宗教を支配的たらしめる。キリスト教に於てその最もよき例を我々は見ることが出来る。

四、然し外來の如何なる宗教、文化も、日本の神道及び神道を基調とする生活、文化を根本的に覆し去ることは出来なかつた。それ所か神道及びそれより出發してゐる日本の文化、生活は、外來の宗教文化を盡くその中に包擁し融合せしめ、日本的なるものに變形せしめてしまつたのである。従つて儒教も、佛教も、將又キリスト教も、日本に於ては日本的なる儒教、佛教、キリスト教であり、神道と少しの拮抗も矛盾も持たないのである。

五

崇神天皇は四人の將軍を四方に派遣された、其の時の詔に、民を導くの本は教化（おし、おそむ）く間に

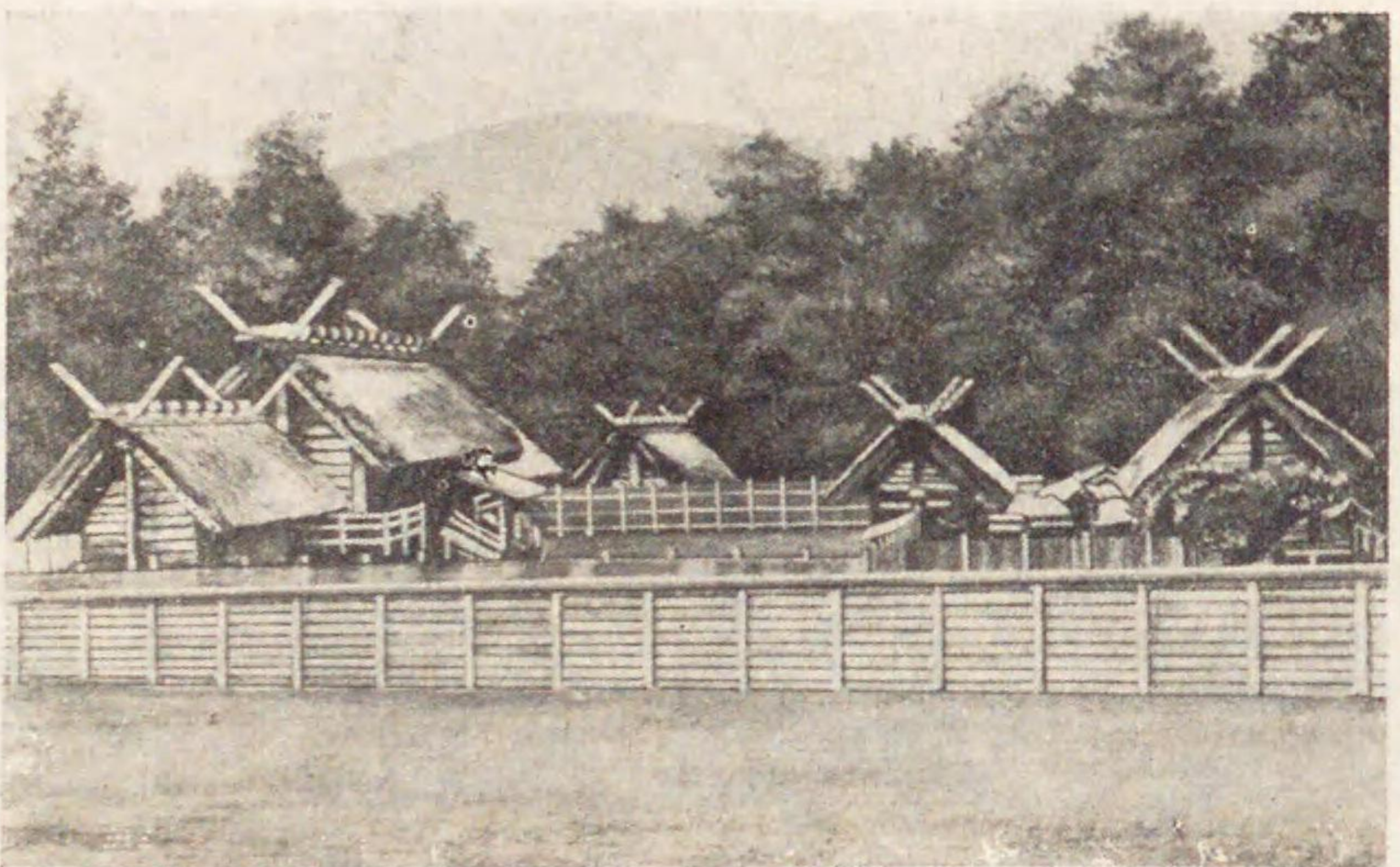
在りと宣ひ、大いに威武を發揚せしめれると共に、人口調査をなし、男には弓矢よりの獲物、女には織物を納めしめ、又諸國に命じて舟を造らしめ交通を便にし、産業を助け、池や溝をつくつて農業を奨められたので、財政は富み、政治の實が甚だ擧つた天皇を肇國（はつくに）天皇（らすめらみこと）と申し上げるのも宜なるかなである。

六

崇神天皇の御即位後六十五年目の皇紀六二八年西曆前三三年に、朝鮮の一部（今の朝鮮慶尙道西南部）に起つた大伽羅國が新羅に攻められて援を我國に請うて來貢した。

七

崇神天皇を繼がれたのは第十一代垂仁天皇で、都を纏向珠城宮に遷さる。



宮 神 大 皇



宮城内の賢所

垂仁天皇は皇紀六三二年より七三〇年、西暦前二八年より紀元後七〇年に至る九九年間御位に在り、百四十歳の御高齢を以て崩せられた。

八

垂仁天皇は御治世二年目に、前帝の御代に救を求めて來貢した朝鮮大伽羅國の請を容れ、鹽乘津彦を遣して之を援助せしめられ、大伽羅國に任那の國號を賜ひ、日本府を置かれた。

九

垂仁天皇は深く神を敬ひ、前帝が笠縫邑の神宮に遷し奉つた三種の神器を伊勢の五十鈴川のほとり(山田)に神宮を造つて其處に遷され、皇女倭姫やまとをして之れに仕へしめ天照大神を御祀りになつた。

この神宮は皇大神宮と申し、又伊勢内宮、或

ひは普通伊勢の大廟と申し、國民的崇拜の中心となつて居る。

一〇

五十鈴川は伊勢灣に近く、伊勢灣は南洋からの暖潮の來る處であつて、大和の山の中の笠縫邑より此の海濱に近い處に大神宮の建てられたのは皇威の一段の發展と云へるのである。

一、三種の神器は日本皇室の御護りであり、日本國民はこの中に建國の精神を汲みとつて尊拜置かないのである。日本人は伊勢の大神宮へ參詣することを以て生涯の目的としてゐる。

二、宮中に賢所がある。賢所は正面に天照大神を祀られ、八咫鏡を置かれ、向つて右側の神殿には天神地祇八百萬の神々を祀られる。左側の皇靈殿には神武天皇以來御歴代の天皇の御靈を祀られ、春秋二季、天皇自ら祭典を行はせらる。春の御祭は春季皇靈祭と申し、秋の御祭は秋季皇靈祭と申される。

三 日本を語る人にして日本の皇位が萬世一系を誇りとするを知らぬ者はあるまい。同じ東洋にしても支那が革命放伐思想を帝位に關して持し、不徳の帝王出づれば之を廢し、代つて君子帝位に即き善政を行ふを天帝の命として疑はず、それ故古來餘りにも激しき帝位の交替あつた事と對比して、日本に於ける天皇と臣民との關係が、一家に於ける家長と家族との血による繋がりと同様で、如何に深く如何に強く支配的であるかを示すものである。

四、一番農業の行はれ易い處は水の關係上山の麓である。山の麓には何時でも山水がある。平地へ行く

と始終水に不自由する。そこで池と云ふものを掘つて置かなくてはならぬ。崇神天皇、垂仁天皇が池を澤山掘られたことは、人口發展上山麓から平地の方へ移住した証據と見ることが出来る。

一一 垂仁天皇は前崇神天皇の御意志を繼がれ、諸國に命じて池や溝をつくらせられたが、其の數は八百餘に達して居る。

一二 日本の相撲の濫觴はこの時代である。即ち天皇の御代、當麻蹠^{たいまのけはや}早なる強力の者がその腕力を誇つたので、天皇は野見宿禰に命じて二人の力を競はしめられた。野見宿禰は一撃の下に當麻蹠早を仆したが、これが相撲の起源となつてゐる。

一三 垂仁天皇は殉死を禁じられた。上來貴い人を葬る時には其の墓側に多くの従者を生き乍ら埋める風習があつたが、天皇は深く之れを哀れみ野見宿禰の建策を容れられ、埴輪^{はにわ}の制をたて、人や馬などの形を土で造り、殉死に代へられた。

一、殉死は靈魂不滅の信仰から起つたものである。即ち肉體は死んでも、靈魂は別の世界で生存すると云ふ觀念から、死者を葬るには、その生前使用したものを共に添えてやり、従者をも附けてやる事が必要と感じられ、殉死の風が起つたのである。

二、アイヌ人の風習では、老婆や娘の死んだ時にはその家を焼く風習がある。それは死後に男なら家を建てる力があるが、老婆や娘にはその力がないから、家を燃やして煙にして之を届けると云ふ考へから來てゐる。

一四 神武天皇即位後五六四年、第十代の崇神天皇に至つて朝廷の組織も全く整充し、内、政權範圍が擴張し、産業も發達し、外、國威海外に延び、朝鮮の一部に助けて獨立國を建設し任那と名を與へ、亞細亞大陸と日本とに政治的關係を生ぜしめ、皇大神宮始め氏神の祭祀を盛にし敬神崇祖の精神を旺盛ならしめたる崇神天皇、垂仁天皇の御功績は古代歴史上特筆さるべきものである。恰かも神武天皇によりて植付けられたる種が天照大神なる「お母さん」の愛の下に五百有餘年の歲月を経て漸く發芽するに至つたものと見るべきである。

一、この世紀支那では漢の武帝が匈奴を伐つて成功し、

二、西歐ではローマのジュリアス・シーザーが(前一〇〇年)生れ、スラとマリウスの抗争がスラの勝利となり、第一次三頭政治が(前六〇)起り、シーザー英國に侵入し、シーザー曆を(前四七)改正し、シーザー(前四四)殺され、第二次三頭政治起り、アントニウス、クレオパトラ自殺して、オクタヴイアヌスの覇業成り、アウグスツスの稱號を得て皇帝となり、ローマの共和政體が(前二七)亡びキリストが(前四)生誕した。

一世紀

皇紀六六一—七六〇 西曆一—一〇〇

一 この世紀は垂仁天皇の引續く御治世に初まる。



上古の服装

天皇の御代に新羅から寶物の獻納があつた。新羅は朝鮮の東南にあつて日本に近い所である。恰度羅馬のネロ皇帝がその母を殺した年（西曆五九年）であつた。

二 天皇は田道間守を外國に遣して橘を求めしめられた。田道が外國よ

り歸つて來たのは出發後十一年目で、既に天皇はその前年崩くなられてゐたことから考へれば、田道が行つたところは相當遠方であつた。柑橘の原産地は印度であるから、或ひは印度まで行つたのではないかと思はれる。

田道は、天皇の御在世中に歸り得なかつたことを深く悲しみ、持ち歸つた橘を御靈前に供へて自殺した。

三 垂仁天皇を繼がれたのは第十二代景行天皇で、天皇は皇紀七三一年より七九〇年西曆七一年より一三〇年に至る六十年間御在位、御齡百四十歳で崩せられた。

天皇御在位中九州に叛亂があつたが、天皇は親しく遠征をされた。神武天皇以來天皇親征の始めである。

又武内宿禰を登用し、大臣、大連の職を定め政治の最高機關をつくり、武内をして北陸及東方諸國を巡回せしめ、遠く蝦夷（東北地方）の調査もせしめられた。

一、この世紀、支那に於ては王莽が漢の王朝を廢して自ら皇帝と稱したが、間もなく漢の一族劉秀に亡ぼされ、劉秀が即位した。即ち後漢の光武帝である。これより後漢の王朝が續く。

二、歐羅巴に於ては、基督が磔殺され、セントマルクの福音書が著れ、セントポーロがアゼンの寺院で説教をし、ネロ皇帝が羅馬を焼き基督教徒を虐殺し、ネロ自身殺される等の事があつた。

二世紀

皇紀七六一—八六〇 西曆一〇一一—二〇〇

一 景行天皇御在位中のことで、皇權擴張、皇威發揚の點から深く日本國民に崇拜されて居るのは日本武尊である。



日本武尊

如く勇武なるを知らず、願くは尊號を奉らむ、今より以後日本武尊と稱し奉るべし」と云つた。これに依つて、日本武尊と呼ばれることになつた。

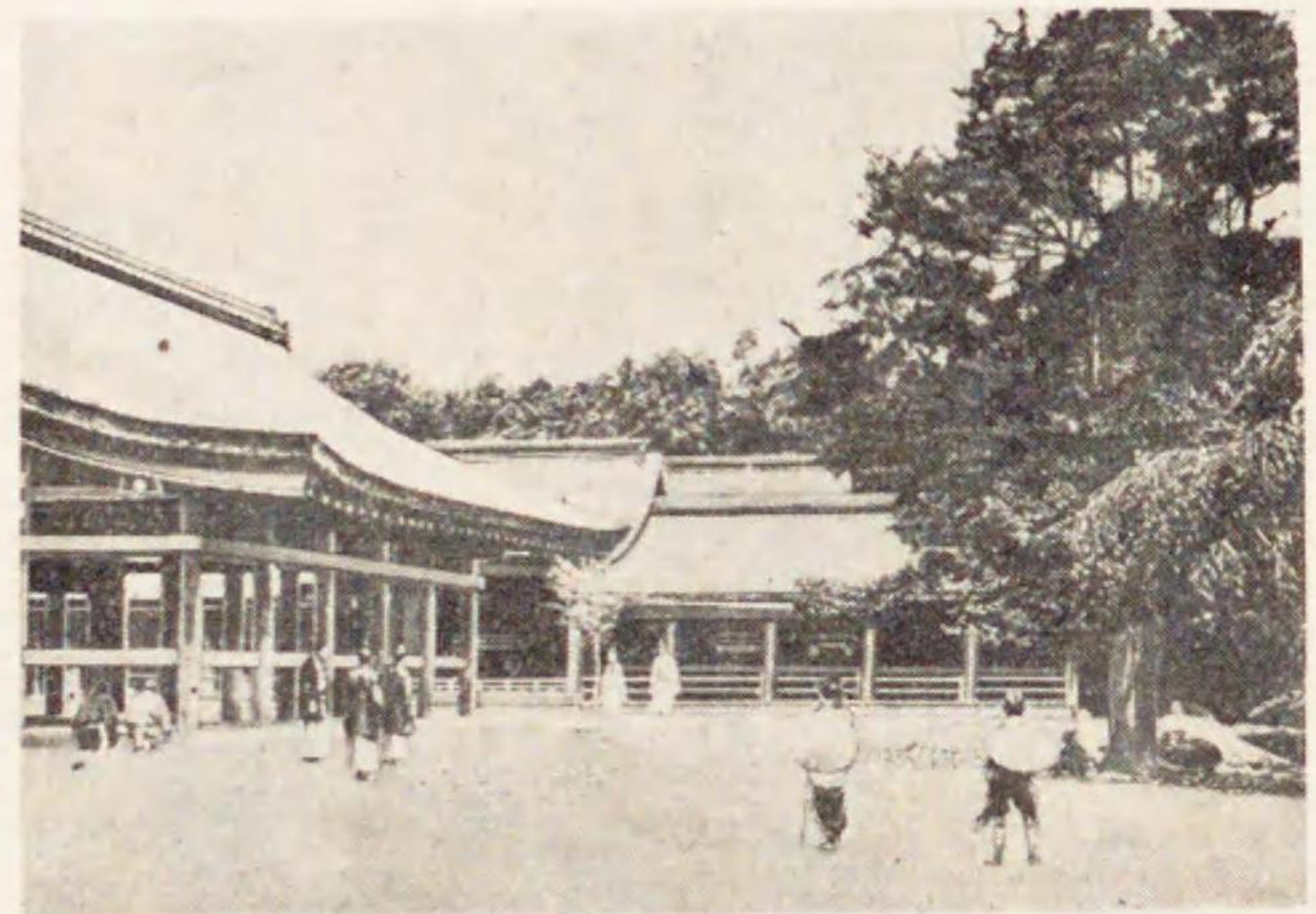
日本武尊は景行天皇の皇子で、初め小碓尊おさすと申した。御年十六の時、九州の南部に據つて居た熊襲が叛いたので、征伐に送られ、女装して短刀を以つて酋長の川上梟帥カウケルを刺された。川上梟帥は「吾れ武力を以て國中にほこる。未だ皇子の

熊襲は今の九州の熊本の南部から鹿兒島の諸地方にかけて住居し屢々朝廷に背いた。

二

日本武尊は其の後東北の蝦夷を征伐せられることになり、その途中伊勢の神宮に參詣され

て、倭姫命から神劍を授けられた。尊が漸次東征されつゝ、今日の静岡市の附近の焼津に進まれた際、賊に欺かれて野火の難に遭はれたが、御叔母より與へられた神劍で草を薙ぎ拂ひ、難を逃れられた。これより天叢雲劍は草薙劍と申されることになつた。



官幣大社熱田神宮

一、日本武尊は熊襲征伐に向はれる時、伊勢大神宮に誓書を送られた。當時御年僅か十六歳であつた。宮守の御叔母倭姫命は守り刀をお授けになり、着てゐられた着物を贈られた。九州では叛將川上梟帥兄弟が家を新築して其の祝に大勢のものと酒を飲んで居た。日本武尊は若い女のお姿になられ、御叔母から貰つて來られた着物を

着て守り刀を懐にして女人達の中に交り兄弟を刺した。其の時餘りお力が強いので、川上は驚いて誰にましますかとたづね、尊が天照大神の子孫なりと御答になられると、實に日本一の強い御方です、

これからは日本武と御名のりなされよと申上げて息が絶えた。

二、蝦夷は今日のアイヌの祖先で東北から北海道により、南は利根川、信濃川の附近迄擴がつて居た。

三、日本武尊の野火の難に遇はれたのは、乙橘姫の歌に

眞嶺刺し相模の小野に燃ゆる火の

火中に立ちて問ひし君はも

とあるに依て、其の地は焼津ではなく、横濱の西に在る平塚の邊り、小野神社のある處だらうとの説もある。

三 尊は更に進んで東京灣の外海を渡り、上總に渡らんとせられた時、浪風俄に起つて御船が將に覆らんとした。妃の乙橘姫は之れを海神の祟りとなし、身を海に投じて尊の御安航を祈られた。爲めに恙なく尊は上總に上陸され、遠く北國に皇威を擴められ、その歸路病を得て伊勢の能褒野で薨ぜられた。

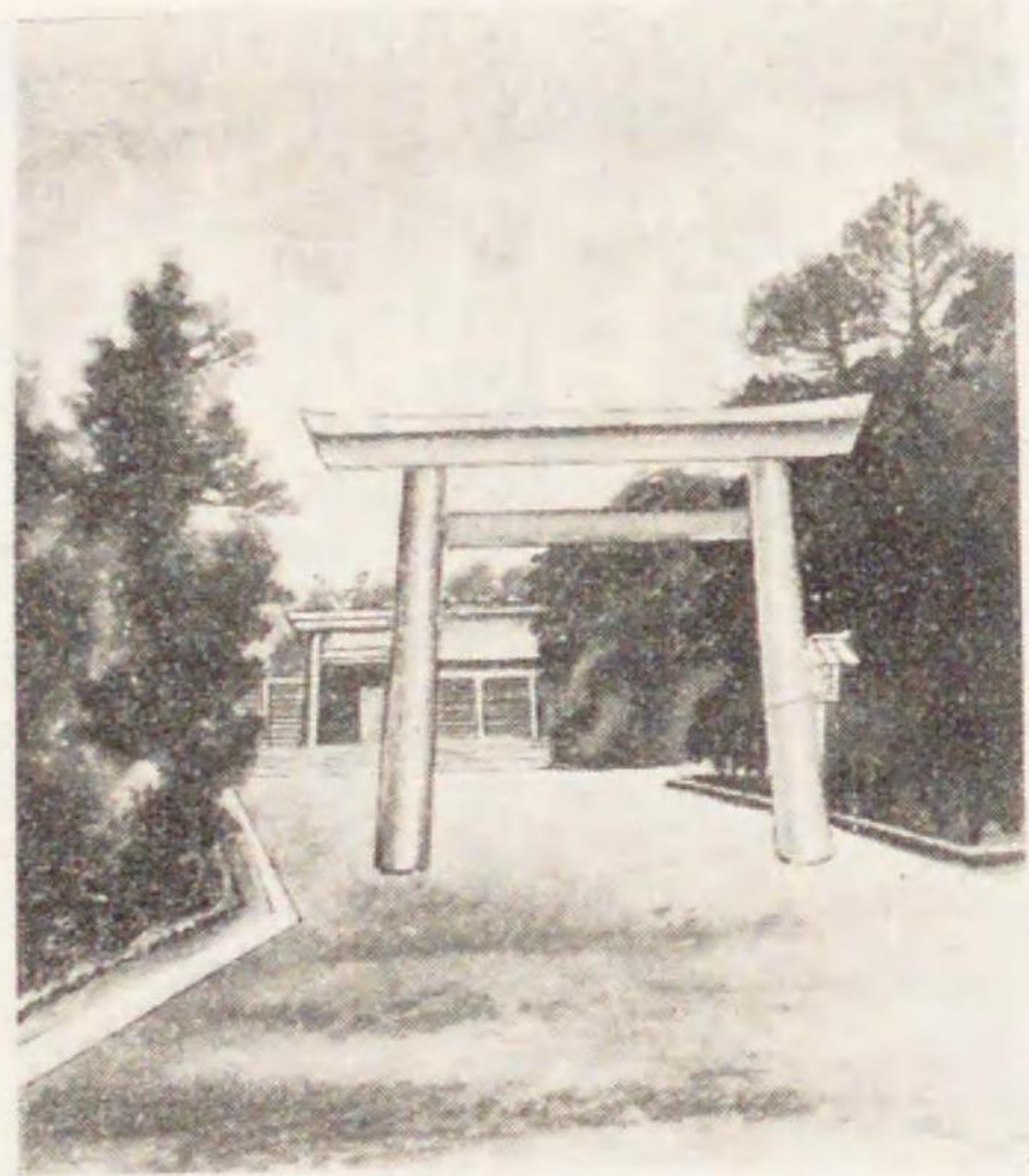
名古屋郊外の熱田神宮は、草薙劍を御神體として日本武尊を御祀りした神宮である。

一、乙橘姫の犠牲的な行爲は、日本婦人の特性を端的に現はしたものである。日本武尊は征戰中、一日も姫を忘れることが出来ず、歸路、現在避暑地として知られて居る輕井澤の近くにある碓氷峠を越えられる時、遙かに海を眺めて、三度「吾妻はや」と嘆じて姫を偲ばれた。これより東京附近一帯を、東と云ふことになつた。

なほ碓氷峠は箱根山中のそれであるとの説もある。

四 景行天皇は日本武尊の薨去を深く悼まれ、尊の平定されたる處を巡幸し、巡撫者を置き治めしめられた。

五 景行天皇に繼がれたのは、第十三代成務天皇で、御在位六十年であつた。



熱田神宮入口

六 成務天皇に繼いだのは第十四代仲哀天皇で、この時熊襲が叛したので天皇は九州に親征され、今日の福岡の香椎宮（官幣大社）に幸して征伐されたが、この世紀の最後の年、陣中で崩ぜられた。

七 熊襲の叛亂が朝鮮に連絡あり、其の連絡を絶たぬ限り叛亂は屢々繰返されるので、連絡を絶たんが爲めに造船と航海の準備を爲し、仲哀天皇が九州に親征されたのである。この御親征が如何に重大であつたかが察せらる。

天皇の御遺志を繼いで、皇后の神功皇后は天皇の喪を秘し、同年親ら舟師を率ゐて新羅に



神功皇后の新羅御上陸

迫られた。新羅忽ち降り、ついで百濟も高麗も風を望んで我が軍に降つたので、朝鮮半島は全く我國に服屬することになり、皇后は内宮家を置いて統治せしめられた。これより熊襲亦永く叛かなくなつた。

一、神功皇后は筑紫の土賊を親征されて之を平げ、熊襲には鴨別かもわけを留めて當らしめ、御身は男装し、舟師を率ゐて新羅に向はれた。その出征に際し、皇后は三軍に令を下された。即ち「金鼓節なく旌旗亂るれば士卒整はず、財を貪りて多欲、私を懐きて内を顧る時は必ず敵の爲に捕虜とならん。小敵たりと侮る勿れ、大敵なりとも

屈する勿れ、則ち奸暴なるは許すことなく、降伏せるものは殺すこと勿れ。勝つ者は必ず賞すべく、走る者は必ず罪あり」と。「勝てば群臣の功、負ければ朕一人の罪」と宣ひ、降るものは殺す勿れと三度も固く戒められた。



神功皇后御木像
男山八幡宮舊藏

二、神功皇后の三韓討伐は、内政の完璧を期せむとする努力を妨害する外敵の排除を計つたのであつて、決して單なる侵略ではない。皇后が全軍に命じて、降服して来る者を殺してならぬと固く命ぜられたのは、この戦争が内政攪亂の黒幕者に對する將來を警めた示威の行動であつたことを證明するものである。

三、神功皇后が新羅を親征せられた時に、新羅王は我が兵を望んで

「豫ねてより東方に神國があつて日本と云ひ、聖王があつて天皇と申すと聞いて居たが、今參つた兵は必ず其の國の神兵であらう。どうして之れに抵抗することが出来ようか」と云うて白旗を立て、降服をした。降服をする場合に白旗を立てることは昔からあつたものと見える。

八 この結果、新羅、高麗、百濟、任那が入貢し、朝鮮から續々人が渡來したが、大和に移住

した朝鮮人に命じて池を掘らしめられたこともあり、百濟の王仁は論語、千字文を獻じ、漢王の裔である阿知使主が十七縣の民を率ゐて歸化し、これより外國文明を取入れることが多くなつたのである。

一、この以前に勿論日本は太古から朝鮮と往來し、朝鮮を介して支那とも交流を行つた。爲めに日本文化に對し支那文化の與へたる影響は勿論偉大なものがあつたが、日本の持つて居る特有文化は其れが爲めに失はれることはなかつた。思想的に見ても支那思想は日本のそれと根本的に異つてゐる。

二、支那では南北を以て基本としてゐるに對し、日本では東西が基本となつてゐる。支那が南北を基本とするのは、北極星を中心とするからである。それは勿論地形に原因するのではあるが、北極星を宇宙の樞軸とする支那は當然、天子の位を其處に置き、群臣は北向きになつて、北極星に向ふ星の如く仕へる、即ち支那では星が中心である。

三、然し日本では、東より出で西に没する太陽が中心であり、天皇の位置は太陽に比せらる。天照大神は太陽によつて表象され、天皇は日の御子、皇太子は日嗣の御子といふ。

四、支那人は星を拜む、印度でも星を拜む、道教でも。支那では英雄豪傑が死ぬと星になると云ふ。然し日本は太陽を崇拜する。同じ東洋人にはあるが、宗教、哲學、教育の基礎が日本では太陽になつてゐる。太陽は一切のものに熱と光を與へる。公明正大なる天地の公道である。これを神ながら

の道と云ふ。神ながらの道とは天照大神の道といふことである。

五、日本に於ては、外來のものは、その善きは採用せられる事勿論であるが、それが爲めに日本固有のものが全面的に彩響されることがなく、従つて日本の文化は、太古より引續き獨自のものであり、その基礎の上に外來のものが附け加へられ、日本的なるものに變形せしめられるだけなのである。

九
神功皇后は垂仁天皇の朝に新羅より歸化せる天日槍命と日本婦人とより成る數代後の子孫であらせらる。

神功皇后の征韓は造船と航海に一進展を來し、此の後の日本に海外活躍者が殖ゑて來た。

一、この世紀に、支那では蔡倫が製紙法を發明し、文化史上劃期的な貢獻をなした。この支那紙は後世サラセン人の手を経て歐洲に傳はり今日の西洋紙の基をなしたのである。又大學が設立されてゐる。

二、西歐では、羅馬のハドリアヌス帝、英國に航し長城を築いた(一二一)。

三世紀

皇紀八六一—九六〇 西曆二〇一—三〇〇

一 この世紀の最初の年に第十五代應仁天皇即位せられ、神功皇后が攝政された。

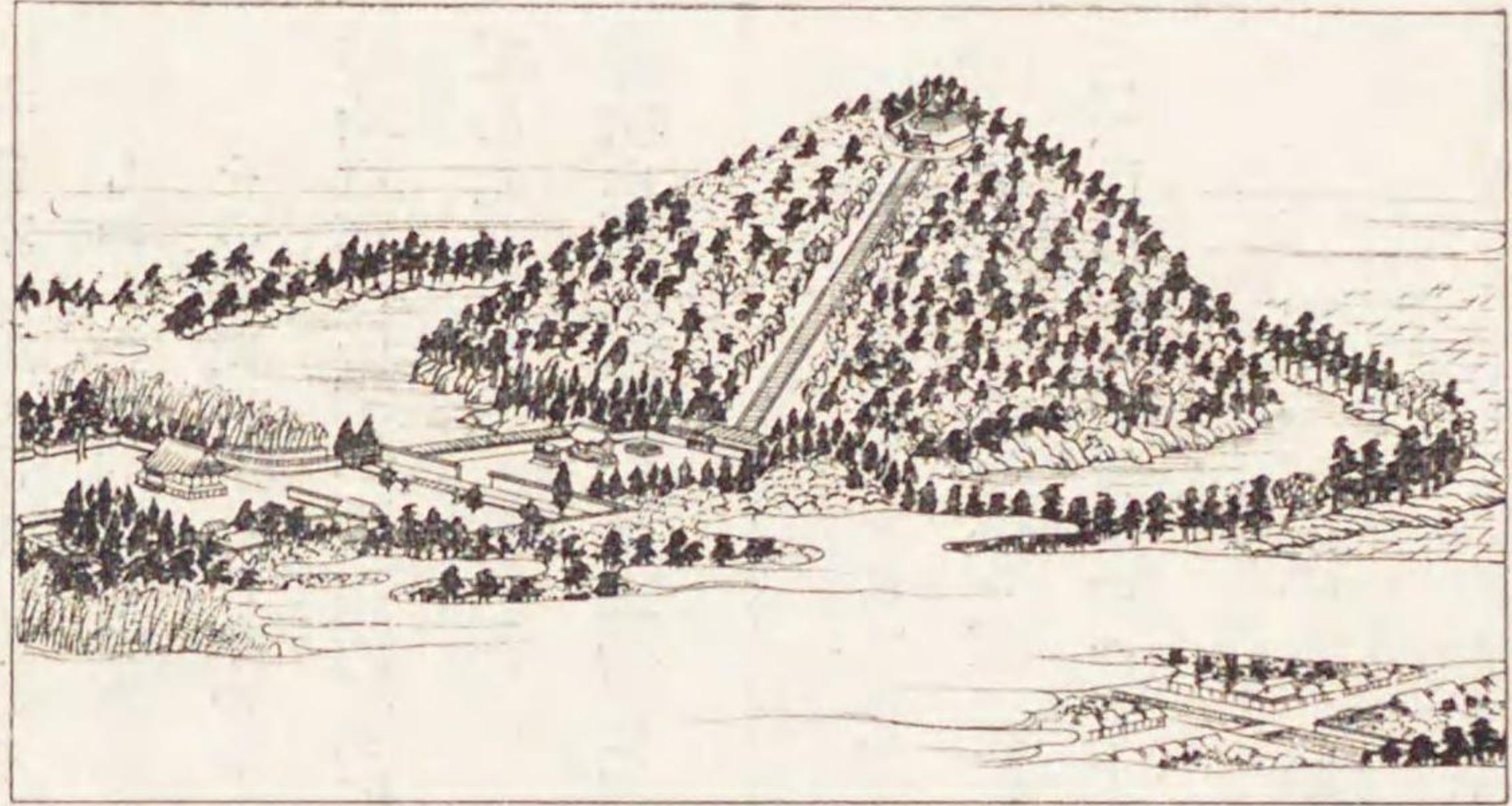
神功皇后の攝政されたのは皇紀八六一年より九二九年、西曆二〇一年より二六九年に至る

六九年間であつた。

二 皇后攝政五年後に新羅入貢した。皇后は葛城襲津彦ヒコを使として送らしめられ、葛城襲津彦は織工を得て歸り、其の工場を置いた。

攝政四十七年に百濟初めて入貢した。新羅その貢を奪つて代つて之れを獻じた。皇后怒り千熊長彦チクマのながひこを問罪使として新羅に送られた。百濟の兵、我が軍に合し、共に新羅を破り、官府を置いてこれを統一する事になつた。これより百濟は年々來貢した。

三 かくて海外に一大發展の跡を遺すと共に、皇后は國內的には國道を改修し、驛路の便を圖り、これ



應仁天皇御陵

による國民生活の改善向上を著しからしめ、百十歳で崩ぜられた。

四

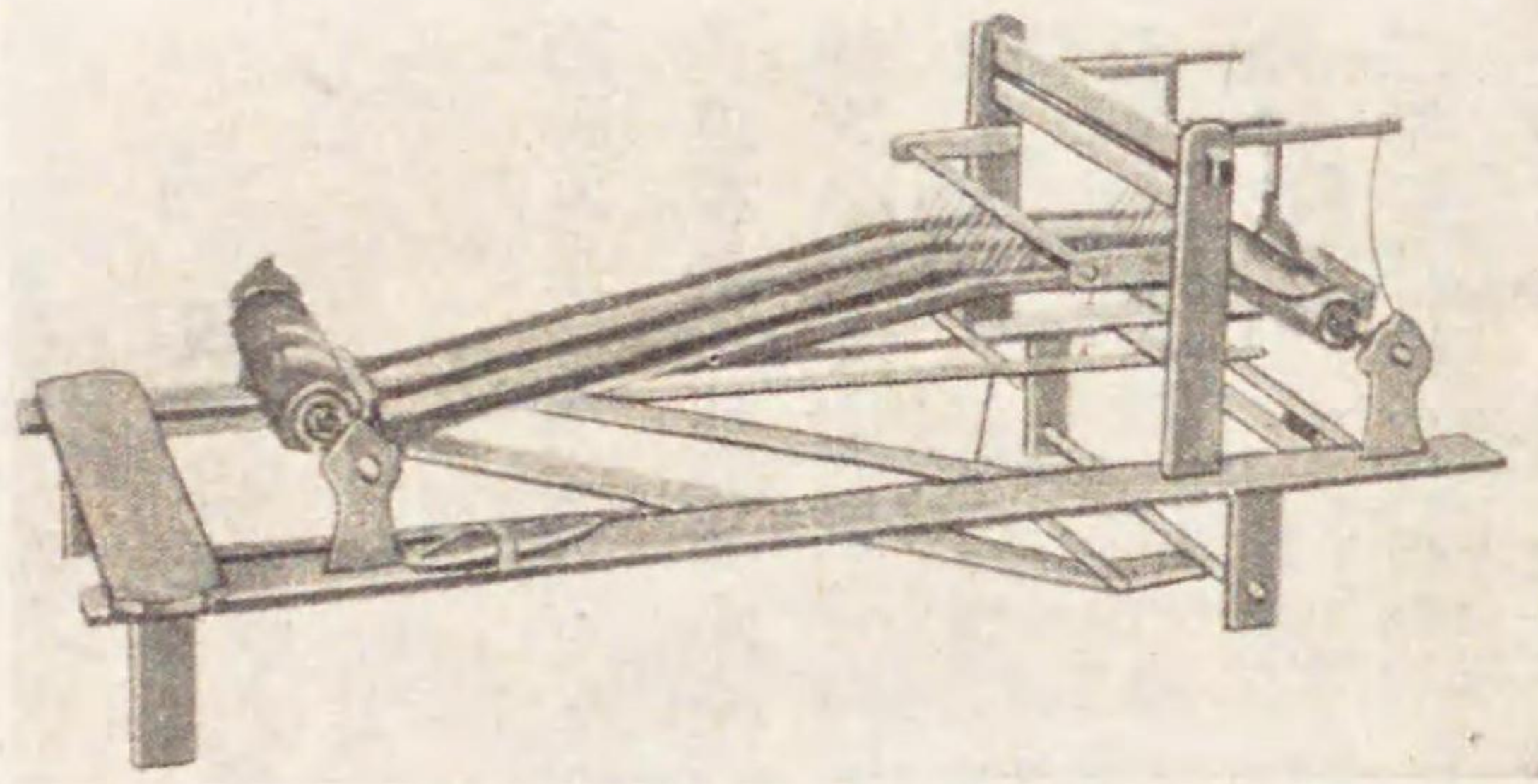
神功皇后崩ぜられた後、應神天皇が政を執られた。應神天皇の御在位はその御生れになつた皇紀八六一年から九七〇年に至る一一〇年間であるが、その中「お母さん」の神功皇后が攝政されたのは六十九年であり、應神天皇の親しく政治を執られたのは、皇紀九三〇年から九七〇年、西曆二七〇年から三一〇年に至る四十一年間であつた。

五 天皇は諸國に命じて海人、山守部を定められた。海事、陸事制の始めである。

又諸國に命じて武器を造らしめられた。官船製造の用材を以て琴も造られた。

琴は板に絲を張つた樂器である。

一、この世紀、支那は三國時代と稱する戰爭時代で、魏の遺操、蜀の劉備、吳の孫權が對立し、諸葛孔明が劉備の軍師として活躍してゐる。魏は後漢を亡ぼした。後魏の司馬昭は蜀を亡ぼし、その子司馬炎は自ら皇



皇大神宮所藏高機

帝になり吳を破つて支那を統一し西晋を開いた。

二、西洋では波斯と羅馬間の戦争が屢々繰り返されてゐる。

四世紀

皇紀九六一—一〇六〇 西曆三〇一—四〇〇

- 一 應神天皇は崩ぜらるゝ前年、第二皇子の菟道稚郎子を立てゝ皇太子とせられた。菟道稚郎子は百濟から來た阿直岐、王仁の二人を師とし、率先して漢學の研究をされ、應神天皇の二十八年、高麗王の來貢使が齎らした表文の無禮なるを見て、之れを破つた程の識見と勇氣とを持つて居られたので、天皇から囑望されたのであらうが、父帝の崩御後、兄弟の順序よりして當然兄君が帝位に即かるべきものとして、帝位を兄の大鷦鷯皇子にお譲りになつた。兄皇子は父帝の御意志に背くことは出來ないと爲し、互に固く譲り合ひ、二年の空位が出來た。

- 二 菟道稚郎子は兄皇子の御心の到底奪ひ難きを思ひ遂ひに自殺された。兄皇子は之れをきいて大いに驚き、悲嘆に暮れられたが、最早如何ともすることが出來ず、御位に即かれた。即ち第十六代仁徳天皇である。

一、兄弟の皇子が互ひに譲り合つて居られた時、大阪の海人が鮮魚を奉らうと思ひ、兄皇子の所に行けば天子は向ふであると弟皇子の方を指し、弟皇子の方へ行けば天皇は向ふであると云はれ、其の魚を持つて兩皇子の間に往還する間に魚は腐敗して了つたと云ふことである。



仁徳天皇御展望

家庭のハラカラ(兄弟)である。

二、兄弟のことを同じお母さんの腹から出たからハラカラと云ふ。家族のことを血カラ、親族のことを家カラと云ふ。力と云ふことは血カラといふことである。カラはヨリで、ヨリは身寄、協力、團結と云ふ意味。かづらが松に絡みつく様に結晶する意味がある。家カラ(家柄) 國カラ(國柄)を重んずることに依つて力が出來る。國力とは國民の協力團結より起るもので、其の原は

- 三 仁徳天皇が位に即かれたのは、應神天皇崩御後三年目の皇紀九百七十三年で、それから千五十九年(西曆三一三年より三九九九年)に至る八十七年間御在位で、崩ぜられた時は御齡百

十歳であつた。

四 朝鮮の服屬以來、難波(大阪)は我國と朝鮮半島との交通の要衝に當つて居たから、天皇は都を難波に遷された。

五 天皇は朝貢の新羅人を役して、大阪に堀を作り、又茨木に田堤を築かしめられ、又更に橋を架け、道を拓き、疏水工事を起して水田を作る等、深く民政に心を用ひられた。

六 天皇は仁慈の御心深く、或る時宮廷の望樓より四方を望まれ、民家より烟起らざるを見て、人民の窮乏を知り、三年間課役を除いて、民生の肥えるのを待たれた。この間宮廷に於ては質素を旨とし、御衣類は弊盡されても少しも顧みられず、三年を経て再び望樓より望めば、烟は隆々として起つたので、民の富は朕の富なりと喜ばれた。御仁徳に感激した人民は、來つて日夜を問はず宮廷の修理に當り、忽ち玉樓をなした。

これこそ日本に於ける皇室と國民との關係を如實に表明するものである。歴代の天皇は仁徳天皇の如き御心を以て絶えず國民の上を御考へになられるのである。

一、日本の家は火が盛んに燃えて繁昌する。一釜に炊いたものを朝に晝に晩に親子兄弟が一緒に食べる。

親子兄弟が一緒に食べるところに家庭の團結力と家庭の楽しみがある。それ故家督相續をすることを火嗣ヒツギと云ふ程、家の中の火は絶やさぬやうに努められるのである。

家のことをへと云ふ。へにイをつけてイへと云ふのであるが、イと云ふ言葉はウと同じく大きいか、美しいとか、良いとか云ふことを示すものであり、へとは竈のことである。即ちイへと大きい竈、美しい竈と云ふことである。

家には必ず竈があるので、家を數へるのは一軒二軒と云はずに、一竈二竈と云ふこともあつた。

一、この時代、支那に於ては西晋が四世五十二年で匈奴の酋長劉聰に滅され、その一族司馬睿が建康(南京)に於て帝位に即いた。即ち東晋の元帝で、これより江北は専ら外民族の蹂躪に委したので所謂五胡十六國の亂闘時代を現出した。

二、西歐では、コンスタンチヌス羅馬帝が第一回、第二回の宗教會議を開き、ラテン文の基督教典作成に着手し(西曆三八三年)、羅馬帝國が東西に二分した(西曆三九五年)。

五 世 紀

皇紀一〇六一—一一六〇 西曆四〇一—五〇〇

一 仁徳天皇の後は第十七代履仲天皇、第十八代反正天皇、第十九代允恭天皇、第二十代安

康天皇の四天皇が順次即位せられた。

履仲天皇の即位されたのは皇紀一〇六〇年で、安康天皇の崩ぜられたのは一一一六年、西暦四〇〇年より四五六年に至る五十六年間であつた。

二 この間に、入墨の風の起つたこと、諸國に史官を置いたこと、藏職を置いて神物と官物の區別をたてたこと、允恭天皇御病ひの時良醫を新羅に徴したこと、流刑の始まつたこと、新羅が樂人八十人を獻じたこと、同じく新羅が國喪を來弔したこと等の事があり、國內は極めて安寧し、進歩の生活が營まれて居た。

三 安康天皇の後に即位されたのは第二十一代雄略天皇である。

皇紀一一一七年より一一三六年、西暦四五七年より四七九年に至る二十三年間御在位で、その期間長からずと雖も、天皇は、御性質勇猛で、政治の改善、産業振興に盡されるところ多かつた。

四 即ち養蠶を奨め、百濟より織工、陶工等を招き、又更に使ひを支那に派遣し、漢織吳織及び裁縫の織工等を招かれた。皇妃にも蠶事を勧めしめられた。

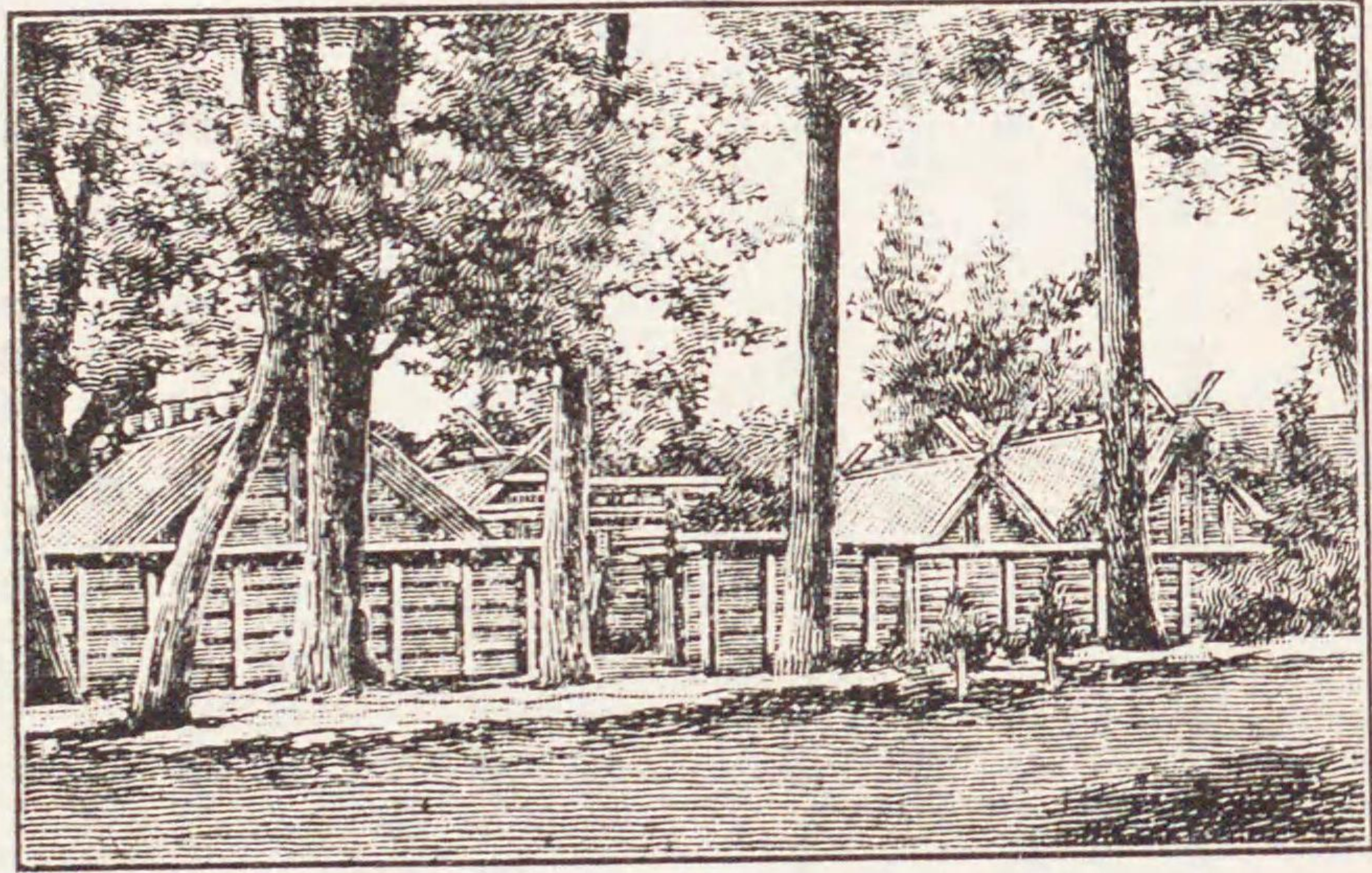
又府縣に詔して藏工、畫工等を奨勵せしめ、絹綿を調貢せしめ、又織物の工人長を立て、

織業を監督せしめられた。

五 天皇は、丹波に祀られてあつた豊受大神を、天照大神を祀られてある伊勢の山田に遷された。これよりは皇大神宮を内宮と稱し、豊受大神を外宮と稱する。豊受大神は衣食の神である。

一、子孫の生命生活の中に、永遠の生命、生活を求める「お母さん」は、精神的進歩と物質的進歩との不可分の上に立たねばならぬ。子孫は精神的と物質的の併行の上のみ、生命と生活を維持する事が出来る。

天照大神は精神的の神、即ち生命の神で、内宮と稱せられて居る。



豊受大神宮

豐受大神は物質的即ち生活の神であつて、外宮と稱せられてある。

内即ち精神と外即ち物質との併行に依つて、子孫の生命、生活が維持されるのである。

精神的及び物質的の併行的活動に依つて永久の進歩を營む子孫の生命、生活の中に、日本人は永遠の生命を求めて居るのである。

六 天皇は官の倉庫を、齋藏、内藏、大藏の三つに區分された。齋藏は上古より存し、神物、官物を共に之れに納めて居たが、履仲天皇の時代に内藏が建てられ、神物と官物とが區別された。雄略天皇は更に産業の發達に鑑み、大藏を定めて内藏を二つに分けられたのである。

七 天皇は朝鮮の附屬地の政治にも注意を拂はれ、百濟王の卒するや、質子として來朝して居た皇子を立て、之に兵器、軍士を賜ひ、護送して王位に即かしめられた。

一、雄略天皇の御遺詔に

「區宇(天下)は一家、義は君臣にして親は父子の如し」

「筋力精神一時に勞竭きぬ、此の如きの事本より身の爲のみに非ず、百姓を安養せんと欲するのみ」とある。

以て如何に民生に肝膽を碎かれたかを拜することが出来る。

二、雄略天皇が或る時吉野山で獵をなされた。その時天皇の御腕に蛇が來て齧した。恰度天皇は弓を持つて射やうとして居られたので困つて居られると、蜻蛉が來て其の蛇を食つてしまつたといふ。

三、雄略天皇の御代にすがると云ふ家來があつた。皇后が養蠶をなさるので、天皇がすがるに向つて、こを集めて來るようにと申された。天皇は蠶を指してこと云はれたのであるが、すがるは子供と誤解し、都を隅なく搜して父無し子を澤山連れて來た。天皇は笑はれて、養蠶をしようと思つたのだ。それはお前にやるから養へ」と申され、すがるが養育した。

これが日本に於ける孤兒院の起源である。

八 雄略天皇に次いで第二十二代清寧天皇、第二十三代顯宗天皇、第二十四代仁賢天皇の三天皇の御治世が続いた。

この世紀の末年に第二十五代武烈天皇即位せられた。

一、この世紀支那に於ては東晋の將軍劉裕が帝位を篡つて宋朝を開き、江北の五胡十六國では後魏が他を亡ぼして統一し、こゝに楊子江を中にして南北朝の對立時代を現出した。唐淵明はこの時代の人である。

二、西歐ではラテン文の聖書が(四〇五)出來上り、第三次宗教會議が開かれ、西羅馬皇帝がゲルマン傭

兵の酋長オドアケルに依つて(四七六)殺され、西羅馬皇帝が滅亡した。この頃ゲルマン民族の大移動が頻りである。

六 世 紀

皇紀一一六一—一二六〇 西曆五〇—一六〇〇

一 武烈天皇から、第二十六代繼體天皇、第二十七代安閑天皇、第二十八代宣化天皇、第二十九代欽明天皇、第三十代敏達天皇、第三十一代用明天皇、第三十二代崇峻天皇の七代の天皇が順次即位された。

二 此の間、高麗より熟皮、梁皮の職工を呼び寄せた。梁人司馬達等は初めて佛像を持つて来たが其時は韓國神として人々之を信じなかつた。次いで百濟王が佛像、經論、幡蓋等を獻納し、佛教信者が出来、佛寺、佛像が始めて造られた。百濟より盤師、造瓦師が歸化し、權衡の制度が出来た。

三 支那歸化人の數はこの頃漸く多くなり、支那人の戸籍を造つたが、七〇五三戸あつた。

佛教の傳來に關聯して當時最も權勢のあつた蘇我氏と物部氏とが對立抗爭した。即ち大臣

の蘇我稻目は佛の禮拜を可とし、大連の物部尾輿は不可として反對した。欽明天皇は佛像を蘇我氏に賜はり試みに禮拜せしめられた。程なく悪疫が流行したので蘇我氏は國神の怒りに觸れたものであるとして、寺を焼き佛像を難波の堀江に投じてしまつた。



子 太 德 聖

稻目の子馬子、尾輿の子守屋は大臣、大連として各々父の志を繼いで争つたが、馬子は遂に守屋を殺し、これより蘇我氏獨り勢力を占めた。

四 朝鮮の附屬地たる新羅、高麗、百濟及び任那は相互に相争ひ、其の都度日本に訴へて來るのでそれを治めてやるなど施政が漸

く難しくなつて來た。日本より送られる官吏中には、任地に於て責任を果さぬ者もあつた。崇峻天皇に繼いで帝位に即かれたのは、初めての女帝、第三十三代の推古天皇であつて、



法隆寺の本堂と五重塔

一、この間に支那では南北朝の對立が隋の文帝によつて統一された。

二、西歐に於ては東羅馬皇帝ユスチヤヌスが賤族より興つて帝位に上り、ユスチヤヌス法



法隆寺全景

六

皇紀一二五三年より一二八八年、西曆五九三年より六二八年まで御在位三十六年御年七十五歳で崩ぜられ、其の間、御即位の年より二十九年間は皇太子の厩戸皇子が攝政された。皇子が薨ぜられたのは一二八一年、御年四十九歳である。

曩に應神天皇の御代神功皇后が攝政されたのと反對に、女帝の下に皇太子が攝政されたのである。

推古天皇は敏達天皇の皇后で、厩戸皇子は用明天皇の皇子であつた。

皇子は聖德太子と申し、聰明で、高麗の歸化僧惠慈を師とし、又百濟の王子阿佐を師とし、廣く學藝に通じ、朝鮮、支那の文物を日本化し、制度を整へ、又大いに佛教を興され、大阪に四天王寺を建て又奈良に法隆寺を建てられた。之は今尙ほ世界最古の木造建築物として内外人の賞讃の中に保存されてある。

聖德太子が篤く佛教を信じ、自ら經典の解釋書を著し、又書を諸人に講義し、佛教を奨勵せられた爲めに、佛教は非常に盛んになつた。

典を發布した。マホメットが(五七〇年)、生れグレゴリー一世が羅馬法王となつた。

七 世 紀

皇紀一二六一—一三六〇 西曆六〇一—七〇〇



法隆寺金堂の壁畫

この世紀の初め聖德太子は引續き諸種の改革を行はせられ、冠位十二階を定めて臣下の身分を明らかにされ、次いで憲法十七條を作つて施政方針を示された。又曆を作つて之を天下に分たれ、國史を編纂された。聖德太子の十七條の憲法は、政治と云ふよりも寧ろ道德的訓戒であつて、左にその著しい點を列擧すれば

一、一般人の踐むべき道德的訓戒を諭し、當時の朝臣閥族間の政治上の軋轢に依る不和を戒められた

二、外國との交際上宗教及び禮儀を尊重すべきこと

三、官吏は綱紀肅正たるべきこと

四、我が國體の本義に則り、君臣の分、大義名分について強く説かれ

五、萬機公論に決すべき君民統治の思想を述べて行政上の心得を説かれたのである。

一、上代の法律はノリなるが故に皆不文法であつた。

成文法は聖德太子の十七條憲法を以て始めとする。その以前に書契を採用したが、法令は支配者の言葉を書いたものだけであつた。

播磨國揖保郡に大法山と云ふ處がある。それは應神天皇が大法を述べさせられた處である。

ノリは規範で、上代の法律とも云ふべきであつて法律、宗教、道德の總べての規範が包含されて居る。

ノリはノブ(伸)ノビル(延)ノベル(述)ノリト(祝詞)等と源語同じく、胸中の思想を外部へ延べ擴めると云ふ意味である。

ツカサは政治と云ふ意味であつて、常に塚即ち小高い處に登つて人民に法令を口宣したところから起つた。

二

聖徳太子は直接支那と交通を開かん爲めに小野妹子を隋に遣はされた。其の時の國書に「日出處天皇致書日没處皇帝」と記し、全く對等の禮を以て國交を始められた。これより支那との直接の交通行はれ、後隋が亡びて唐の世となるや、舒明天皇の朝初めて遣唐使を

派遣され、我が學生僧侶の彼地に留學する者多く、佛教を研究し、制度文物を視察して歸朝し、大陸文明が我國に傳つた。



法隆寺金堂の壁書

一、聖徳太子は通譯官が獨占して居た外交の權を朝廷に納め、歸化人の通譯官等に委せず、小野妹子の如き皇別の名家を用ひ遣隋使に任じられた。

二、遣唐使の航路は最初は大坂から出發し、博多に寄航し朝鮮半島を経て渤海灣に入り、山東省に上陸着して陸路を唐の國都長安に到つたが、後には博多より直ちに南に向ひ、楊子江河口に入り長安にいた。

三

聖徳太子により佛教は興隆し、従つて建築、繪畫等が發達し、紙、墨等の製法も盛になり、

日本文化は大きな進歩を遂げた。

四

聖徳太子は早く薨ぜられ、推古天皇に繼いで御位に即かれた第三十四代舒明天皇は御在位十三年、舒明天皇を繼がれた第三十五代皇極天皇は女帝で御在位三年であつた。



鈴

五 此の皇紀一二八九年より一三〇四年、西曆六二九年より六四四年に至る間に、朝鮮よりは朝貢屢々あり、百濟の王子が質となつて來て居たこともあつた。支那では遣隋使が歸る時に對馬迄送つて來た。宮中に於て佛教を誦せしられたこともあつた。



驛

六 これより前、氏族制度は漸く紊亂し、氏の長が私有の土地、人民を擁して國政に參與し、人材登用の道を塞ぎ横暴な振舞多くなり、殊に最後に蘇我、物部の兩氏が大臣、大連と

して對立し、その佛教を日本に許可する、許可せぬの論争によつて激發された對立抗爭が、前述の如く結局蘇我氏の勝利に歸し物部氏が滅亡するや、蘇我氏獨り權勢を恣まゝにした。

馬子の子、蝦夷、その子入鹿は僭上の振舞多かつた。

七 第三十六代孝徳天皇即位せらるゝや、藤原鎌足は中大兄皇子と相謀り、蘇我氏を滅ぼし、

従前の弊害を一掃し政治上の大改革を斷行した。即ち大化の改新である。

一、上古の社會體制は氏を基礎にして出来て居た。我が國民は祖先崇拜の念が強く、同一の祖先から出た血族的團體を氏と云ふた。氏には定まれて職業があつて之れを世襲し、ウヂノカミ氏上があつて氏全體を統べ、家職をもつて朝廷に仕へた。

二、朝廷は氏にをみ臣、むらじあたいびと連、直、ひたびと首等の姓を賜ひ、その尊卑を區別された。臣、連は最も貴く、臣は皇別(歴代皇胤の子孫)に、連は神別(建國當初に功勞あつた諸神の子孫)に賜つた。臣、連の中で大政に參與するものを大臣、大連と云つた。

三、成務天皇の御代、武内宿彌が大臣になつて以後、其の子孫蘇我、へなり平郡、葛城の三氏が大臣家となつた。

仲哀天皇の御代、大伴武持大連となり、雄略天皇の御代、物部氏も大連となり、以來大伴、物部二氏が大連となつた。

大臣家の平郡、葛城二氏は早く亡び、蘇我氏獨り残つた。

大連家の大伴氏は大伴金村が對韓政策に失敗してより衰へ、物部氏は佛教傳來の時蘇我氏と争ふて

亡ぼされたので、政治に參與するものは蘇我氏獨りとなり朝政を獨裁し不臣の振舞が多かつた。

四、氏族政治は世襲であり、人材登用の途が塞がれ、蘇我氏の如く他の氏族を亡ぼし、其の土地人民をも併有するので經濟上の勢力も増し、遂に政權を恣にし、皇室が總べて土地人民を支配すると云ふ政治上の本體に背く。

聖徳太子もこの弊を打破しようとして種々企てられたが果されなかつた。孝徳天皇の御代、蘇我蝦夷、入鹿が中大兄皇子により誅に伏し、氏族政治の弊は除かれた。

八 中大兄皇子は皇太子として孝徳天皇を輔け、初めて年號を建て大化元年と稱し、その二年

改新の詔を宣べて改革に着手され、

戸籍を調べて租庸調の税法を確立し、土地、人民は原則として全部公有とし、その土地の賣買を禁じ、國民生活の安定を計り、驛馬、傳馬を置き、道路交通の改善に盡し、官吏の等級を定め、八省百官を置いて政治の中央集權を強固にした。

九 土地公有制度の上に、班田の法を定めて男女とも一定の土地を與へられ、これに對して税

法を課したことは、中央集權の強化に役立つこと大きかつた。

かく國內政治に大改革を加へると同時に、對外的にも積極的に乗り出された。

朝鮮の新羅、任那、百濟は引續き來貢し、これ等に對する宗主權を維持すると共に、大陸支那との交通は一層の繁きを加へ遣唐使も派遣された。

一〇 この時代から古代の集團的社會體制が、完全な國家機構を整備して來たことは注意さるべきで、この大化改新は實に日本にとつて大きな政治上の改革である。

一、大化の改新は、その後の鎌倉幕府の創立、明治の維新と共に、我國の政治に最も大きな變化を與へた三大政變の一つとされる。

この改革に於ては、氏族政治の弊害に鑑み、蘇我氏の滅亡を機會に氏族政治を廢し、氏族の私有した土地人民を沒收し、公地公民として中央集權政治を確立した。明治維新に於て、徳川幕府の滅亡を機會に武家政治を廢し、版籍奉還により諸侯の私有した土地人民を朝廷に收め中央集權を確立したのも之と軌を一にする。

二、大化の改新は中央集權政治の確立を目的として、

(一) 皇族及び諸豪族の私有せし土地人民を悉く朝廷に收めて公地公民とした。

(二) 公地公民制になつたので、新たに戸籍を作り、班田收授法を定め、人毎に口分田を給與し、男は六歳になれば二反、女はその三分の二を與へられ、死ねば官に收めることにした。

(三) 税制を整へ、租、庸、調の三制をたてた。租は田地の收穫中より稻を納めること。庸とは或

る一定期間無償で力役に從事すること、又はその力役の代りに米、布を代用すること。調とは織物その他土地の産物を納めることである。

(四) 中央政府と地方との密接な連絡を計り、官命を速かに傳達せしめるため、驛馬、傳馬の制を設けた。

(五) 官制を改め、中央に八省百官を置き、地方統治のための國造、縣主を廢し、新たに國司、郡司を代置し、人材を登用することにした。

一一 孝徳天皇の次の第三十七代齋明天皇(女帝)は皇極天皇が重祚せられたのであつて、日本に於ける天皇重祚の最初である。

この御代に、朝鮮の百濟、高麗は唐に攻められ、援助を我國に求めて來た。

天皇は救援のため親しく九州の地に赴かれ、阿部比羅夫は海軍を率ゐて朝鮮へ急行した。然し間もなく天皇は崩せられ、二代の間皇太子として政治を輔佐された中大兄皇子が茲に御位を繼がれた。第三十八代天智天皇と申し上げる。

一二 天智天皇は齋明天皇の後を受けられ、百濟、高麗の救援に努力せられたが、百濟はその内訌のため遂に唐に滅ぼされ、高麗も亦滅亡し、こゝに日本は朝鮮に於ける神功皇后、或ひ

は更に溯つて神代以來の朝鮮に對する指導權を喪失した。

一三 天智天皇は二代の天皇の皇太子として銳意改革の事に當られ、又即位後の初めは、専ら朝鮮問題の指揮に當られたが、その事止んで間もなく崩せられた。

一、天智天皇の御治績

(一)、朝鮮半島を放棄して専ら内政に力を注がれたこと。

(二)、都を京都の附近琵琶湖の岸近江の大津宮に移されたこと。

(三)、西邊の國防を嚴重にし、唐の襲來に備へる爲めに博多の海岸に沿ふて水城を築くと共に唐との國交を修められたこと。

(四)、京都に大學を興し、諸國に國學を興し、歴史、儒、法律數學を教へ、官吏養成を目的とたされこと。

水城とは上陸したる外敵を不意に水の力にて溺死或は海中に流出せしむる堤防より成る大きな土木工事である。

(五)、人口調査をされたこと。

(六)、律令を造られたこと。

一四 次の第三十九代弘文天皇は御在位七月にして崩せられ、第四十代天武天皇即位せらる。

一五 天武天皇は天智天皇の改革の御志を繼がれて、又改革に邁進せられ、朝政、法律等の不備の點を補正し、國學を全國に置いて國民教育の普及を計る一方、軍備の擴充に留意せられた。又朝廷の歴史を編纂せしめられた。

草薙劍を熱田神宮に移されたのも此の時代であつた。

一六 次の第四十一代持統天皇は天武天皇の皇后として天皇を輔佐せられてゐたが、前帝崩御の後即位せられた女帝である。次いで第四十二代文武天皇が即位せられた。

一、この世紀には支那に於ては唐の高祖が隋を亡ぼし、太宗が切りに朝鮮へ攻略し、高宗から中宗の代となる。

二、西歌にては専らサラセン人活躍の時代で、フランク王國では宰相ペピンが實權を握つた。

八 世紀

皇紀一三六一—一四六〇 西曆七〇一—八〇〇

一 持統天皇を繼がれた文武天皇は皇紀一三五七年より一三六七年、西曆六九七年より七〇七

年まで御在位で、藤原不比等らに命じて律令を選定せしめられ、之を天下に頒した。即ち大寶律令と呼ばれる。律とは刑法であり、令とは行政上の體制を規定したものである。この法制は中大兄皇子が孝徳天皇の皇太子として發布したものを受け継ぎ、六十年間の年月の後に初めて集大成して發布されたものである。即ち大化改新は、この大寶律令の公布によつて、初めて完成されたと見るべきである。この大寶律令は、その後永く日本の法制の基本となり、時代と共に修正附加されて残つて行つた。

一、文武天皇の御即位の宣明に「明るき清き直き誠の心たれ」と仰せられてゐる。

明るき、清き、直き、誠の心とは、太陽を説明したものであつて、太陽の説明は天照大神の説明と云ふことになり、明るき、清きは、太陽の光を云ひ、直きは太陽の光線の直下を云ひ、誠の心とは太陽の光と熱とを云ふのである。日本は飽まで太陽中心の國である。

二 一旦滅亡した百濟、高麗は又興り、朝貢し、又一旦我國に叛いて唐に結んだ新羅も朝貢し、同時にこれ等の民族で日本に歸化する者は大化以來非常に多かつた。

三 又唐との往來も依然として繁く、佛教及び儒教は日本に於て益々隆盛になつた。この佛教の最も勢力を占めたのが、文武天皇を繼がれた元明天皇の奈良に都を移され、それより六



吉祥天の繪

表繪は奈良藥師寺の吉祥天の繪である。藥師寺は天武天皇の八年、皇紀一三四〇年西曆六八〇年建立されたもので、この繪も奈良朝時代の作品とされてある。吉祥天は辨才天とも稱し、毘沙門天の妻をいふ。もと娑羅門教の神であつたが、佛教内に入つて福德を掌る女神となつた。像は天衣、寶冠を著け左手に如意珠を持つ。

代の光仁天皇に至る六十餘年間の所謂奈良朝時代に於てである。

四 元明天皇の時太安麿は古事記を作つた。曩に天武天皇の時修史の事が行はれ、それから累代の天皇修史を命ぜられ、遂にこの時に於て出来上つたのである。これが日本最古の歴史であり、遠く神代に於ける建國から筆を起したもので、その中から汲みとられる歴史的材料は、その後に出來た日本書紀と共に貴重な文獻として、日本歴史に缺くべからざる價値を有してゐる。

五 この古事記は主として皇室を中心とする歴史であるが、これと共に諸國に令して地方の歴史、産物、地形等を書いて奉らしめた。これを風土記と云ふ。現在残つてゐるのが二、三に過ぎぬことは甚だ遺憾とすべきである。

六 次の元正天皇は、從來代の變る度に皇居の變つた慣習を打破して、前帝の皇居に居られた。蓋し從來までの慣習に従へば、皇居は簡素たらざるを得ず、今や絢爛たる唐文物を輸入し、而して唐との對等な交際の持續する以上、皇居も壯麗にせざるを得ず、これが皇居を變ぜぬ原因の一となつてゐる。

一、一代毎に遷都したのは、上代死を忌む風から、天皇崩ずれば新都を營んだのと、夫婦別居の古風か



東大寺大佛殿

ら皇子は生母の家にあり、其處が皇居とせられたためであつて、當時は政治經濟の規模が小さく、皇城を移すことも極めて簡便であつたからである。元明天皇の御代、都を平城即ち奈良の地に奠められたが、唐の長安の都制に倣つたもので、東西四十町、南北四十五町の大きな規模の永久的のものであつた。

三、奈良朝時代には佛教が隆盛で朝廷の崇佛篤く、寺院、塔の建立、佛像の彫刻或は祈禱、修補の爲めに費用が嵩み、國家の財政に大きな影響を與へ

僧侶が政治に關係するようになり、政治の綱紀が紊れ、勢力争ひが起り、政治上極めて弊害が大きいため、光仁天皇は大に政治の改革を行はれたが、都を奈良より他に遷すにあらざる限りは僧侶の爲めに政治改革は出来ないとして、これが遂に後に桓武天皇の平安遷都の動機となつたのである。

七

元正天皇の養老時代に大寶律令を改正し補修した。これを養老律令と云ふ。

更に舍人親王とねりに命じて歴史を編ませしめた。これが古事記と並稱される日本書紀である。

一、この養老律令は大寶律令の完成者藤原不比等の修正であるが、大寶律令は傳つて居ないので、養老律令が實際は只大寶律令を改修したに過ぎないから、養老律令のことを大寶律令と云うて居る。律は刑罰の標準を定めたもので今の刑法の様なものである。令は行政上必要な種々の規則で、官制、法制、田制、税制、學制等のものである。大寶令は皇室を中心とする中央集權政治を行ふ上に基礎となり、我が王朝時代を通じて政治の基準となつた。

武家時代にも官制名稱には律令制の名稱が用ひられた。明治維新後、内閣官制制定まで行はれた。

八 次の聖武天皇は最も佛教に歸依深く、光明皇后と共に諸國に國分寺を建て、又奈良の東大寺を建て大佛を建立された。

この天皇の御代に滿洲人の黑龍江以南に建設した渤海國が初めて入貢した。天皇は之に物を賜ひ、以來渤海は事あれば我國に入貢するに到つた。

この頃我國の學制は大いに進歩し既に大學は出來てゐたが、天皇はその充實を計られ、又施藥院、養老院等の社會事業も起された。

一、光明子は藤原不比等の第三女で、容貌美麗なのでかく名づけられたと云はれる。

聖武天皇の皇后となつたのであるが、諸臣の女にして皇后の尊位に陞つたのは空前である。

二、皇后元より博愛仁慈、夙に佛教を崇信し、興福寺の西金堂を建て、天皇に勵めて東大寺、國分寺等を創建し、悲田、施藥の二院を置き下は天下の餓恙を恤んだ。これ我國に於ける赤十字の起源である。

三、東大寺成るに及んで皇后は浴室を造つて貴賤を浴せしたが、その後皇后は親ら千人の垢を落さうと云ふ誓願あり、その千人目に癩を患ふ者あつたが頂より腫に至るまで膿を吸ひ出してやるに及び、忽然大光明を發して我は阿閼佛也と言ふや姿が見えなくなつた。皇后は驚喜無量、その地に阿閼寺を建てたと云ふのである。

四、大佛は初め聖武天皇が江州信樂に居られた時に計畫されたが容易に出來なかつた。其後都を奈良に移されたが、大佛建立のことに關し、



東大寺の大佛

「聖武天皇は神の御裔である。それが外國の神であるところの佛像を造るから出來ぬのだ。」の非難を受けられた。そうして非常な經費を要することであるから、伊勢の神宮に橘諸兄を御遣しになつて神意を伺はせられた。

二、聖武天皇は其後更に宇佐八幡宮に使を遣はされた。奈良の附近に春日神社と云ふ立派な神社があるのに、遠い宇佐の八幡宮に何を立てられたのは、恐らく九州に早く佛教が傳つて居り、宇佐八幡宮と佛教との間に或る連絡があつたからであらう。

三、聖武天皇の詔を受けた宇佐八幡宮の彌宣大神朝臣杜女は神體を奉じて、皇紀一四〇五年西曆七四五年十一月十八日宇佐を出發して十二月十九日に奈良に來た。これは八幡神が一切の天神地祇を率ゐて天皇の大願を成就せしめらると云ふ託宣があつたからである。

そうして奈良の大佛が出來た。大神彌宣が東大寺の大佛を拜した時には、聖武天皇が威儀を調整へて大佛を御禮拜になられた。そのお手傳をして呉れた神も袂き奉つたのが手向山八幡宮である。

九

孝謙天皇の時、唐との交通盛になり唐僧鑑眞は畫師を從へ歸化した。

淳仁天皇の後孝謙天皇（女帝）重祚して稱徳天皇と申し上げる。天皇佛教を信するの餘り僧道鏡を重用し、道鏡は不遜の振舞あつたが、和氣清麿の忠節により挫折した。

一、僧の道鏡は天位を窺つた不臣者と書かれてあるが、天位を窺つたのではなく、僧侶の身分であり乍ら女帝より太政大臣禪師に任せられ、又法王ともなり政治に參與し、道鏡の意が恣に行はれるので、道鏡を朝廷より放逐するため起つた事件と思はれるのである。

二、當時は佛教は朝廷の保護に依つて興り、寺塔の建立も大法會への費用も朝廷の寄進に依り、朝廷の歳入の大部分は道鏡が一人で使用すると云つてもよいので、佛教を信すれば未來が善くなるにしても、道鏡の様に歳入の大部分を寺院に使はれたのでは現在の生活が脅かされるので、未來よりも現在の生活を考へねばならない様なことになつたので、佛教と政治とは混同すべきものでないと云ふ議論が、當時大に喧しかつたであらうと思はれる。

三、大佛を造るのでも、又天皇が大佛を參拜されるにも、神宮の應援を得た程であるから、道鏡の横暴に對しての反抗力の強かつたことも諒解されるのである。

四、所謂道鏡事件の發生當時、道鏡は相當の老年であつて、子供もなかつた。日本臣民たる彼がその様な大それた望みも起す様な理由はなかつたらうと思ひたい。

彼には弟もあつて相當な地位に居つたが、それに兵馬の權を與へるやうなこともせず、宇佐八幡に伺ひさせたと云ふ以外には、何等道鏡が天位を窺うたと見るべき事實の記載もない。

五、若しあんな様な大罪を犯したとするならば、彼に對する處罰は、既に天皇も更つた際であるから、もつと嚴重であつて然るべきに、下野藥師寺別當に移されたに過ぎないことに徴しても、著者は日本臣民中には、その様な大それたる望みを抱く者は、過去にも又未來にも斷じて一人も無いと信ずる

點からして、道鏡もさうであつたと信じた。

六、道鏡は重祚女帝の第一年に太政大臣禪師となり、次年に法王になつたので、必然的に強い反對者が起り、思ふ様に政治が出来ないので、後の世になつて臣下が攝政又は關白になつた様に、執政の地位にありたいと云ふ位の野心は持つたかも知れぬ。そうして宇佐八幡に伺ひをすることになつたと見るべきであると思ふ。

七、又一面、皇紀一二五三年、西曆五九三年始めての女帝推古天皇の即位以來百六十七年間に、皇極天皇、皇極天皇、持統天皇、元明天皇、元正天皇、孝謙天皇、稱徳天皇と八代の女帝が即位されたので、佛教興隆の當時にとつては女帝も問題にされ、和氣清麿の様な賢明なる忠臣に依つて、道鏡を朝廷から放逐することも出来た。そうして又女性が天皇になるのを止めることに爲し得たと見ることも出来るのである。

この事件以來皇紀二二九〇年西曆一六三〇年、徳川家光の時代に女帝明正天皇の即位される迄一〇三二年間、女帝の御即位がなかつたことも考慮して見たい。

一〇 次の光仁天皇を経て、桓武天皇(皇紀 一四四二—一四六五 西曆七八二—八〇五)は都を京都に奠められた。以來、京都は明治維新の結果東京奠都のあるまで、引續き皇居の所在地となつた。



奈良朝時代の風俗

一、奈良朝時代は佛教の隆盛と史誌の編纂とにより特色づけられる。

二、聖徳太子により日本精神に立脚しての佛教隆盛の端緒を開かれてより、佛教は漸次隆盛になりつゝあつたが、奈良朝時代に於てそれは佛像、寺院の建立となつて具體化した。建築と藝術は長足の進歩を遂げた。奈良の東大寺に於て丈七メートルに及ぶ驚嘆すべき巨大な大佛を見るが、これはこの時代に製作されたのである。その外に全国的に佛像が建立された。寺院も豪華な建築様式で陸續として建立された。唐へ渡り佛教を研究して來る者も多かつた。之等の研究生は佛教のみならず他の百般の文化をも齎らした。この當時の文

化の粹を集めて藏してゐるのは奈良の正倉院である。千歳の古の美術工藝が今日その儘残存して居るのは稀有の事柄に屬する。

三、かゝる佛教の隆盛も、然し乍ら決して神道の精神を抹殺することは出来ない。神道は神道として日本人はこれを基礎のものとして保存する。かゝる傾向は佛教隆盛の半面に於ける古代の史的研究の隆昌となつて現はれてゐる。即ち佛教といふ假令日本に來て日本的なるものに變色されたとは云へ、云はば外來の宗教である佛教の隆盛は、それによる日本的なるものゝ衰微を必然的ならしめると考へられるかも知れぬ。然し外來のものが盛になればなる程、日本的なるものは尙ほ一層盛になる。それは對立的な抗爭的な兩者の隆盛でなくて、併立的な共存的な兩者の隆盛なのである。こゝに日本と日本人との特色を見ることが出来る。

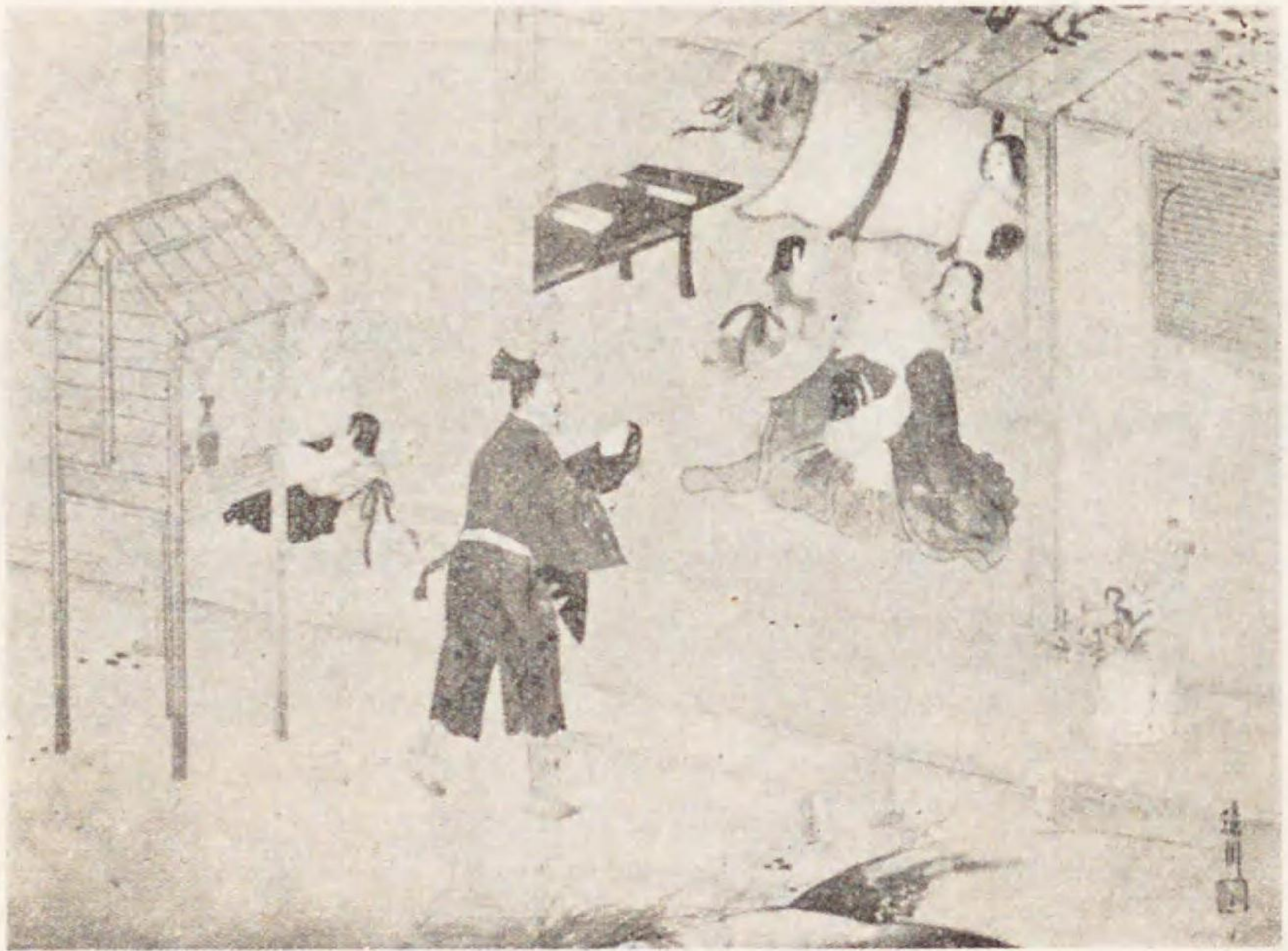
四、奈良朝時代に印度の佛僧佛哲と婆羅門僧正が來た。佛哲は眞珠取りに出て難船し、支那に行く婆羅門僧正に救はれ、共に支那に文珠と呼ぶ高僧が居ると聞き、其れを尋ねて行つたら、文珠は日本に居ると聞かされ、兩人は東大寺の留學生理鏡の斡旋で遣唐大使の船に乗つて日本に來た。その船には左大臣の吉備眞備、唯識宗の玄昉僧正、日本戒律の第一祖となつた道璿和尚、大學頭の小野篁と東大寺の留學生理鏡及び雇教師の支那人等一緒であつて、大阪にて行基菩薩に迎へられ奈良に落付いた。

佛哲は音樂 舞樂の教師となり 五十音の完成にも佛哲が與つて力ありと云はれる程日本文化に貢

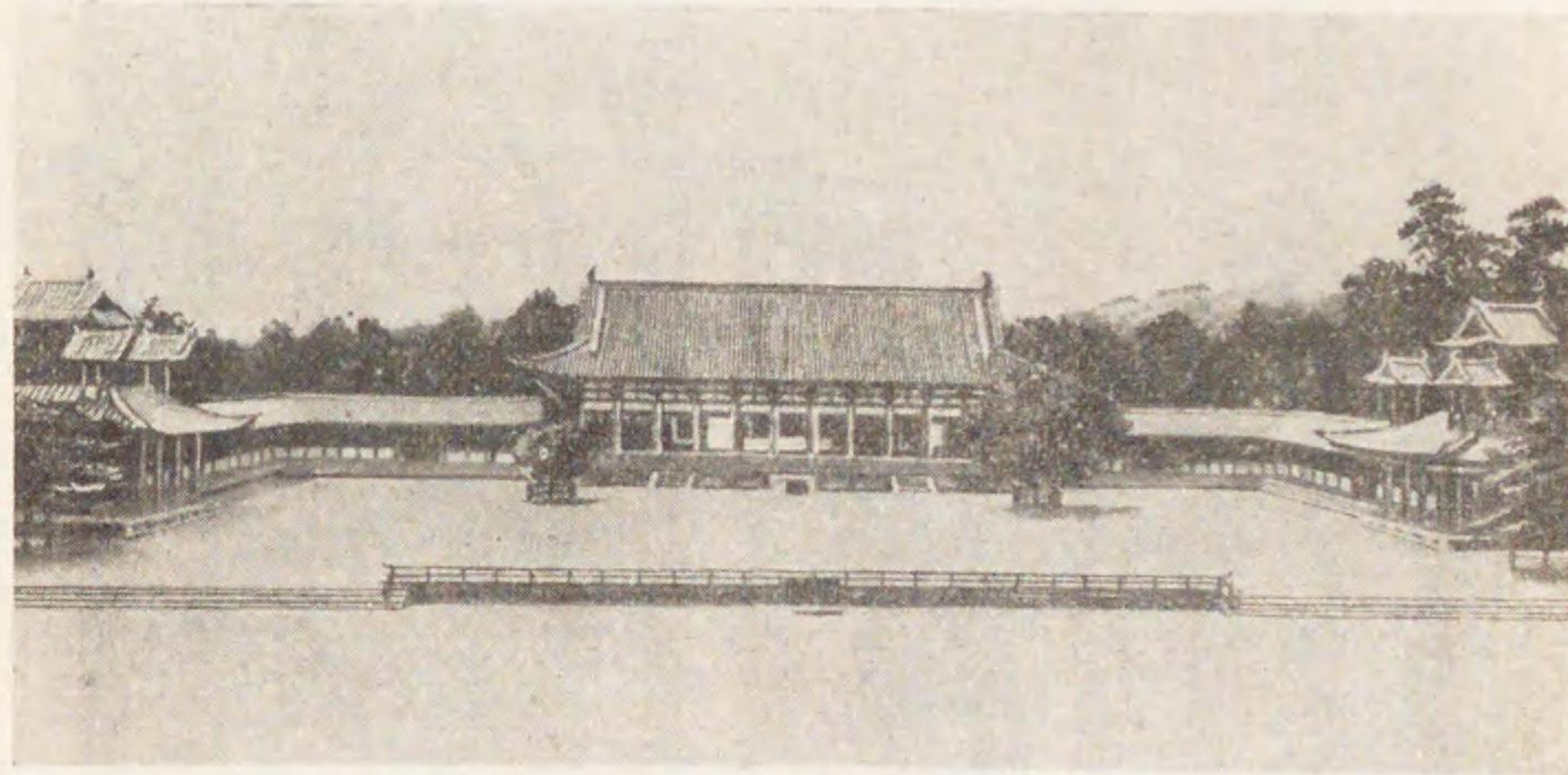
獻した。

印度語のカバラは瓦となり、アプタはあばた、イカラは煉瓦、カサは花柳病、ハタは旗、サイコロはサイコロの言葉になつて居る處を見ると、當時日本は遠く印度からも文化をとり入れたものである。

五、「古事記」はこの時代に編纂された日本に於ける現存ある最古の史書である。太古から口傳により日本人はその祖先からの出來事を語り傳へて來た。漢字の輸入されてよりは、文字によつて著すことになつたが、古いものは消滅する傾向があつたので、この時代、太古からの出來事の臆になるのを恐れ、命じて作らしたのが古事記である。



法均尼捨兒を養育す



平安京大極殿

それは神道精神を以て貫かれた老大なものである。建國の由来に關する神話は、壯嚴の中にもよく日本人の特色を示してゐる。その中から我々は歴史的事實を分析解明するのである。

六、和氣清麿の姉廣虫は法均尼と云ひ、慈悲の心深く饑饉の時捨子を拾ひ上げて養育した。

一一 桓武天皇は神武天皇以來の歴代天皇の謚を定められた。

天皇は大に政治を改革し、國運を發展せしめんと思召され、奈良を去り、初め都を長岡に移され、次いで京都に移されたのであるが、規模宏壯で、唐制に倣つた完備したものであつた。京都の位置は全國を治める上に又外國との交通の上からも他よりは便利であつて、人心を一新し、政治改革をなし、文武の官制も全く整備し八省

百官が政治を分掌し、中央集權は天智天皇によつて強固に確立されたが、桓武天皇は愈々それに強固性を加へられ、皇威大に發展し唐との交通も盛んになつた。



桓武天皇

一、平野神社は桓武天皇が平安京を開かれた時に此の平安京へ持つて來られた神であるとせられて居る。桓武天皇の御母方の家は百濟の王の末孫である。百濟の聖明王は日本へ佛教を欽明天皇の時に送られた王である。

は豪族の土地兼併を制するためでもあつたが、六歳以上になると耕すべき田が與へられることにな

つたのである。班田法は支那にもあつたが、支那は十五歳乃至十八歳以上とされてあるに、我國のは六歳の子供から其特典を有す。日本は昔から母の念願たる子供第一主義である。

一一 東北の蝦夷は、これより以前から屢々反抗したが、天皇は坂上田村麿を征夷大將軍に任命して之を殆んど掃滅した。天皇による内政の功業は甚だ擧がり、以來平安朝時代として、貴族が武士の勃興によつて、その榮華を奪はれる迄、長く泰平を謳歌し得る基礎が置かれた。

日本佛教の最古の一たる天台宗が僧最澄により初められたのはこの天皇の御代である。

一、田村麿は漢より歸化せし阿知使主アチオミの子孫で、延暦中從五位下に叙せられ、近衛將監となり近衛少將に進み越後守を兼ねて居つた處を選拔されたのである。後に中納言に任せられ中衛大將を兼ねるに至つた。薨去後厚く京都に葬られ、神社に祀られた。

一、この世紀、支那に於ては、唐の中宗から睿宗を経て玄宗皇帝位にあり、唐文化の最盛期を現出し、三藏法師は天竺より佛典を持參して歸り、楊貴妃がその美貌を天下に謳はれ、安祿山は漸く重用せられ、契丹を破つて益々その信望を蒐め、遂に皇帝の末年叛を起して顔真卿と戦つて之を破り、玄宗歿して肅宗即位するや、安祿山は遂に京師を陥れ、楊貴妃を誅し、翌年その子安慶緒に殺された。

次いで代宗から德宗に到り、初めて宦官制度を設けた。

二、西歐に於ては、サラセン人が西班牙を征服し、一方フランクに迫つたサラセン人をチャールス、マルテルが撃破し、その孫ペピンは遂に自らフランク國王となりカロリン王朝を開いた。その子は有名なチャールス大帝で、この時フランク國の版圖は歐洲の大半に互つた。西曆八〇六年には大帝はその領土を三分し三子に分與してゐる。

九 世 紀

皇紀一四六一—一五六〇 西曆八〇一—九〇〇

一 桓武天皇に次いだ第五十一代平城天皇（一四六六—一四六九）の時、僧空海により眞言宗が起された。

第五十二代嵯峨天皇の御代、諸國に茶を植ゑしめらる。

菅原清公は文章院といふ學校を起したが、之が日本に於ける私立學校の最初のものであつた。この後貴族が私立學校を建てる者多かつた。

一、奈良朝時代に於ける佛教は支那傳來のまゝとも見られるものであつたが、最澄、空海の二名僧出で

日本的新宗教を興した。即ち最澄は桓武天皇の御代、比叡山に延暦寺を建てたが、後入唐し、歸

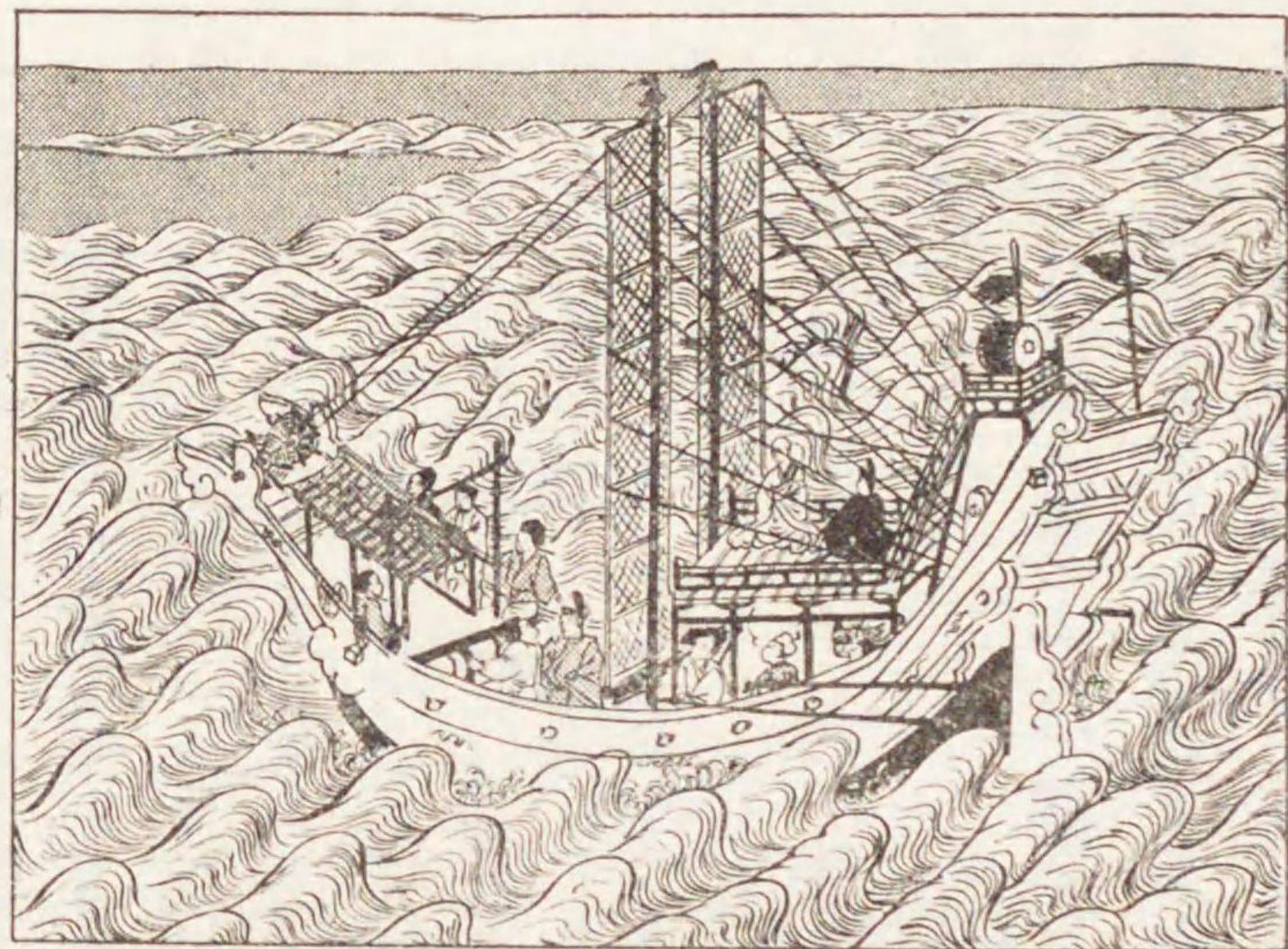
つて天台宗を傳へ、傳教大師と諡せられてゐる。

又空海は、最澄と同年唐に留學し、平城天皇の御代歸朝して眞言宗を傳へ、高野山に金剛峯寺を建てた。空海は學識深く諸國を巡歴し布教の傍ら民利に盡すこと多く、弘法大師として今も親しまれてゐる。

二

第五十三代淳和天皇の時、檢非違使廳を置いたが、これは専ら警察の役を果した。續いて第五十四代仁明天皇、第五十五代文德天皇の二代を経て、第五十三代清和天皇即位さる。

清和天皇、御幼少であつたので、藤原良房は攝政となつた。これ人臣にして攝政にな



唐 渡 の 海 空

つた最初の例である。

一、藤原冬嗣の娘順子が仁明天皇の女御となり、文德天皇の御母となつて以來、藤原氏は朝廷の外戚となつて尊貴の地位を占め、藤原良房は文德天皇の御代、人臣にして始めて太政大臣の榮位につき、今又人臣にして始めての攝政となつた。

三 第五十七代陽成天皇を経て、第五十八代光孝天皇の時代、藤原基經は關白となる。これ關白の最初で、以來藤原氏は攝政を止めれば關白となるの例となつた。關白とは獻策のことであり、つまり政治上の實權に與ることである。

四 次いで即位せられた第五十九代宇多天皇は英邁にましまし、一月一日四方拜の式を初めて行はせられ、菅原道眞を重用して藤原氏の專横を抑えられた。

一、菅原氏は野見宿彌の後で代々儒を以て朝廷に仕へた。道眞も歴史、詩文に通じ宇多天皇に重用せられ、醍醐天皇の御代には右大臣に任ぜられた。時に藤原時平は左大臣であつたが道眞の信望を嫉視し、讒を構へて陥れ太宰權帥として筑紫(今の九州、福岡縣)に遷させた。道眞は配所にあつて深く謹慎し、一夜月明に恩賜の御衣を捧持し餘香を拜して君恩を謝した話は有名である。配所で死んだが後本官に復せられ、後世天滿天神に祀つて學問の神とされた。

二、子孫の生命生活の中に永遠の生命を求めて居る母の國たる日本には、死んでから本官に復せられ、又死んだ人にも出世の出来ることを教へられてゐる。

日本に於ける親孝行は生きて居る親に對してのみならず、死んだ親への孝行も含まれてゐる。先祖を恥かしめぬと云ふことがそれである。

三、子孫の住むこの世を良くするための活動をした人が、在世中は認められず、何百年の後に其の功勞を認められて天皇から贈位をされ、又新たに神に祀られることもある。かゝる神社にも、後日又格式を昇ぼすこともある。

一、この世紀、支那では唐が漸次衰滅に近づいて行く。韓愈が出で、禪宗の黃檗禪師が死んだ。
二、西歐ではフランクのチャールス大帝の子ルイ死し、その三子領土を争ひ、ロタールは伊太利を、ルイは獨逸を、チャールスは佛蘭西を領することになった。ルーリックがノヴゴロドにロシアの基を開いた。英國ではアルフレッド大王がデン人破つた。サラセン人の勢力は漸く衰へ、代つてノルマン人が、英、佛の海岸を侵掠し、ノルウェー人はグリーンランド(八九〇)を發見した。

十世紀

皇紀一五六一—一六六〇 西曆九〇一—一〇〇〇

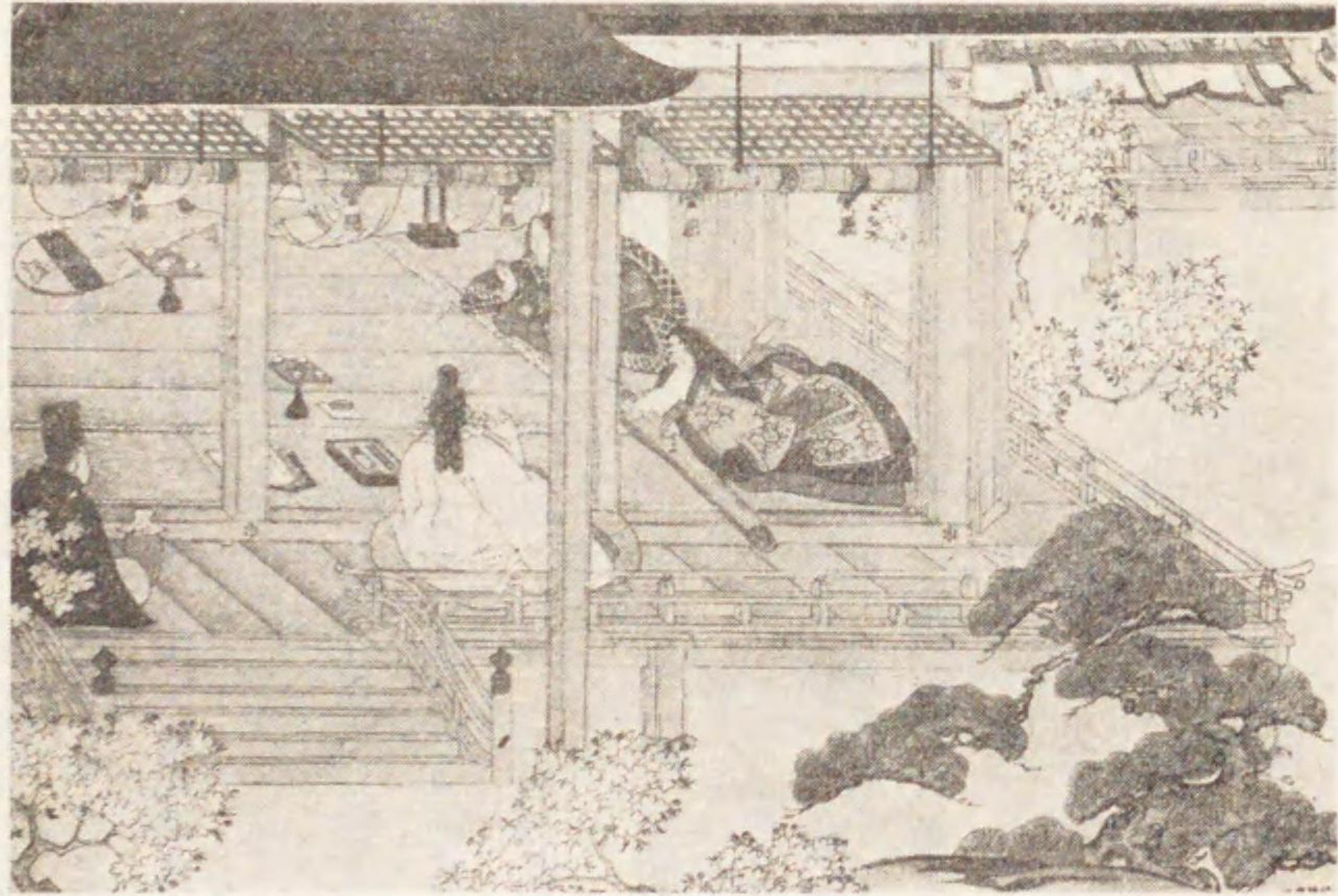
一 第六十代醍醐天皇の御代、紀貫之が古今集を編んだ。勅撰歌集は萬葉集を以て嚆矢として以來、隨時編纂されることになった。又諸國風土記を作らしめらる。

この時代渤海國は契丹の爲めに滅びたが、その滅びる迄渤海は常に我國に入貢し親を結んでゐた。渤海は滿洲人の國家である。

一、渤海とは上代は親しかつた。日本の文法と朝鮮、滿洲の文法は同じである、例へば日本は「我は汝を愛す」とあれば朝鮮、滿洲もさうであるが、支那では「我は愛す汝を」である。
日本、朝鮮、滿洲は支那の立俗に對して座俗である。

二 第六十一代朱雀天皇の御代平將門叛し、平貞盛之を討つて以來、平氏が武力を以て位置を占めるに到つた。平氏と並んで源氏も經基から次第に武を以て地位を築いた。

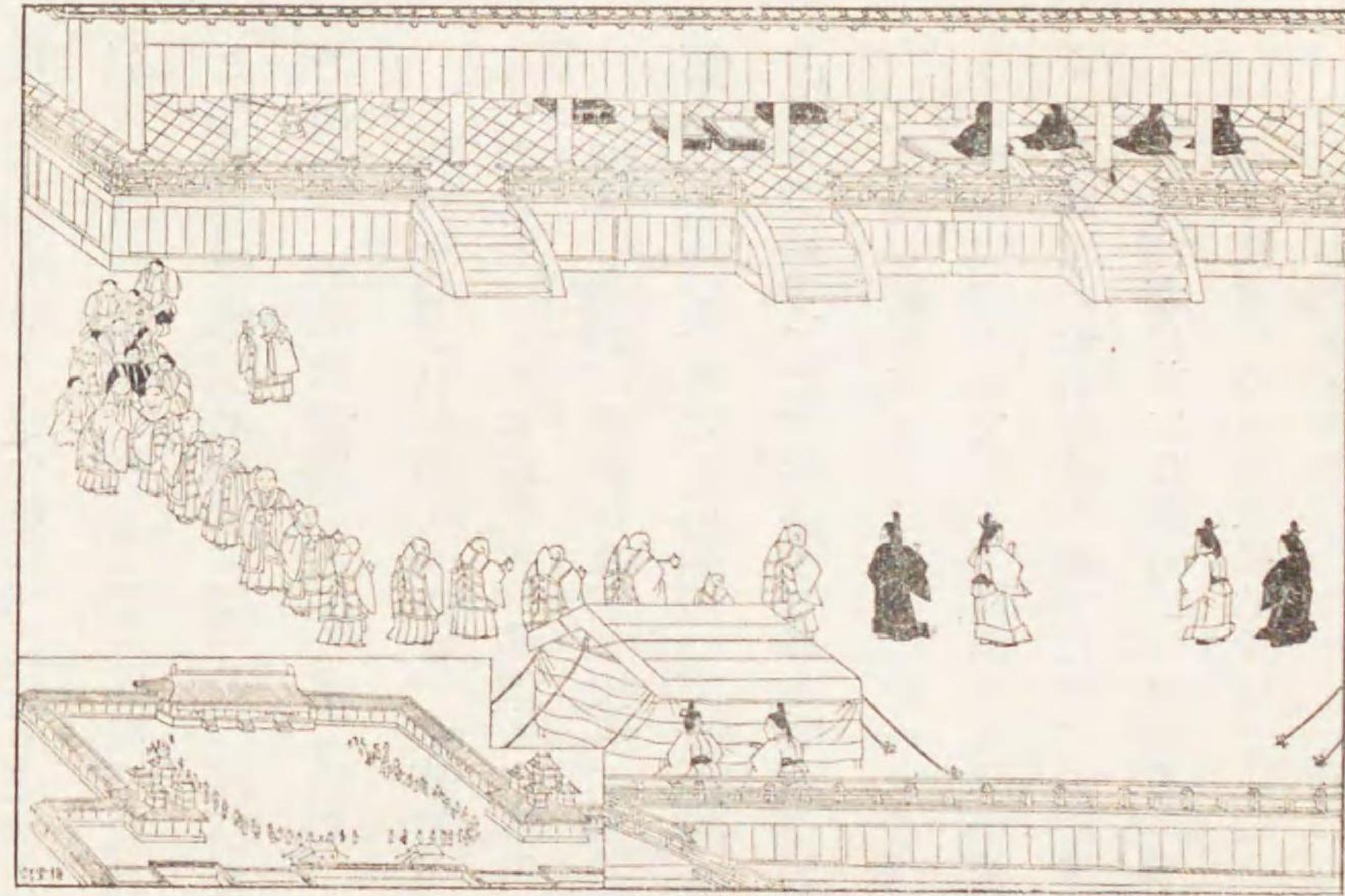
一、地方を統治するのに國司を置いたのは大化の頃からである。之等の國司には任期があり、任期満てば交代するのである。所が平安朝中期以後には任期満ちても任地に留まり、歸らぬ者が多くなつた。藤原氏が榮華を極め地方に對する監督が充分でなくなると共に、國司として地方に留まることは、その地方に於て政治的にも經濟的にも、殆んど絶對的な權力を得ることになった。それは中央に歸つて藤原氏の下に服從的生活を送るより如何に魅力的であつたらう。彼等は長く地方に留まることにより土地を開拓して老大な土地を占有し、侮る可からざる地方勢力となつた。



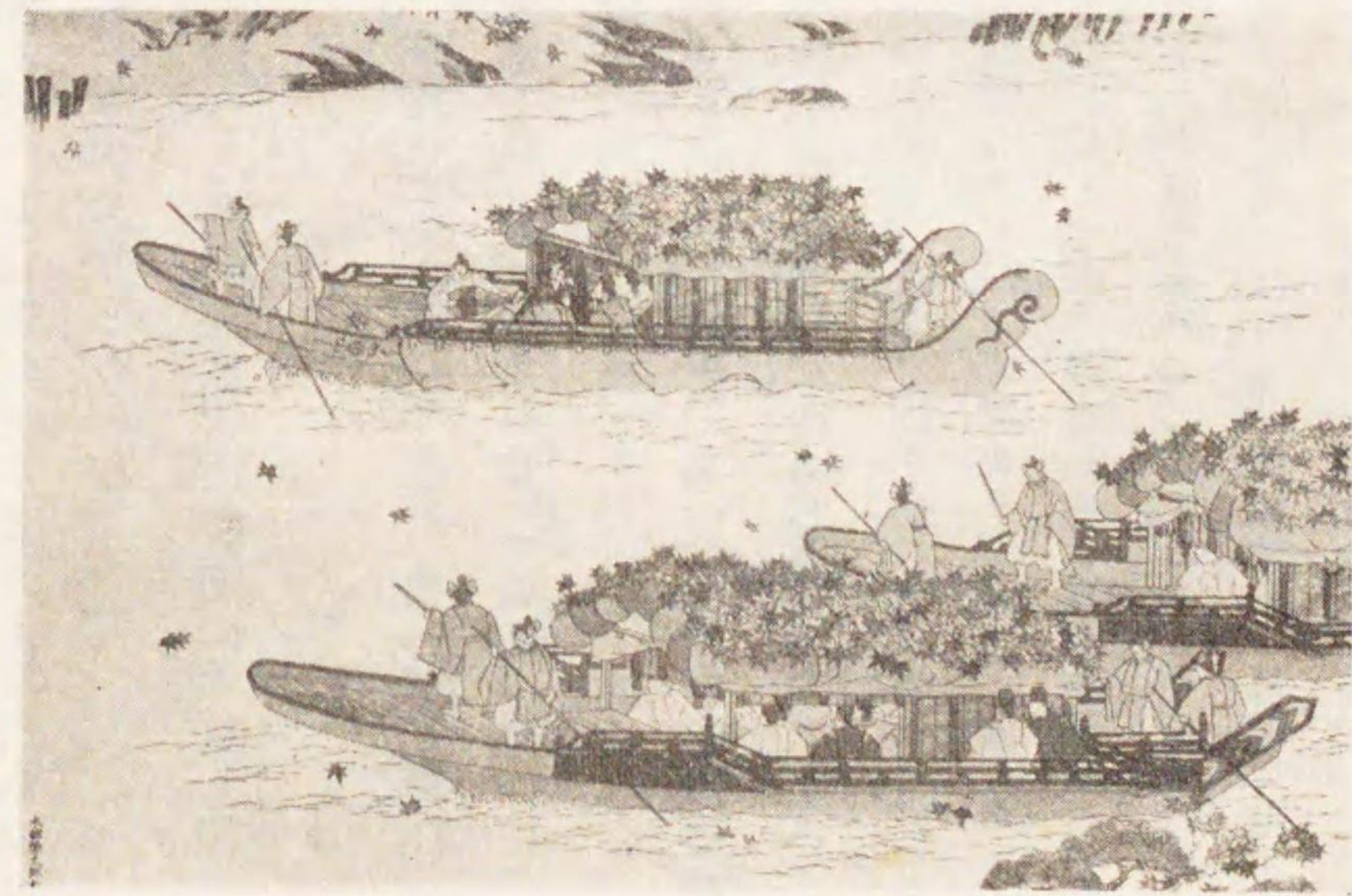
貴族の歌樂遊興

二、この頃莊園と稱する私有の土地があつた。原則的に全國の土地の公有を完成した大化以後、功勞あつた者、或は土地開墾者に對し一定の土地を與へたのであつた。之等の與へられたる土地は一代限りの領有、二代乃至三代までの領有といふ風に種類あり、期限滿てば返還すべき事になつてゐた。然るに後には返還することなく、その上中央の威令が地方に徹底しなくなると共に、國司を初めとし、地方的に勢力ある者は争つて未開拓地を開拓し自己の私有財産とし、かゝる土地の耕作或は分貸による使役人、小作人との間に主從的な關係をさへ樹立して行くのである。

三、かゝる状態は中央の地方に關する威壓を一層無力ならしめる。そして中央の威壓が無力化すれば、地方に於ける之等の土地所有者乃至



神官僧侶の節會參列



貴族の船遊び

彼等への從屬者は自己と自己の財産との擁護のために自力に依存しなければならなくなる。こゝに彼等は自らを武裝するに到つた。彼等は家の子、郎黨を私兵となし地方に隠然強大なる勢力をつくり、從來大寶令に基ける國民皆兵制度は破れて私兵制度が發達し、武家の政權獲得、武家政治の起源が茲に胚胎した。

四、武士の中でも源平兩氏は相並んで擡頭して來た。後中央に於て藤原氏一門の間に勢力争ひが起るや、彼等は武力を持つ源平兩氏を各々その味方に引き入れた。之は源平兩氏をして中央政治に参加する機會を與へたのである。そして藤原氏が没落すると共に源平兩氏はその對立を激化し乍ら政治の最前面に出て來るのである。

三 次の第六十二代村上天皇、第六十三代冷泉天皇、第六十四代圓融天皇、第六十五代花山天皇、第六十六代一條天皇と歴代、藤原氏の權力争も強く、貴族は政治を忘れ、専ら遊奢に耽つたが、その反面、風俗文化は著しく進歩した。

一、この世紀の間、唐は勢力全く失墜し、その末期の争亂時代を経て宋が建國した。この頃契丹は頻りに支那に入寇して惱ました。

二、西歐に於ては英國のエドワード王がケンブリッジ大學を興し、東フランク王國にオットー大帝由て神聖ローマ皇帝(九六二)となり、ユーグ・カペー、佛蘭西に王朝を開き、キリスト教がロシアに布

教された。

十一世紀

皇紀一六六一—一七六〇 西曆一〇〇一—一一〇〇

一 第六十七代三條天皇、第六十八代後一條天皇、第六十九代後朱雀天皇、第七十代後冷泉天皇の御代、引續き藤原氏は權勢を専らにした。

二 藤原氏の一門は貴族として政治の要衝に立ち、平和な生活は文學藝術の發達を促して短歌は全盛になつた。

一、短歌が僅か三十一の文字の中に天地自然、人間界の萬象を描き盡すといふことは寧ろ驚異に價する。それにも拘はず日本人はよく之を爲し得る。長い傳統がこの技法を獲得せしめた。短歌ばかりではない。後には更に簡單になつて俳句に於ては僅か十七文字を以て雄渾の極致を、微妙の至極を映じ得ることさへ出來た。

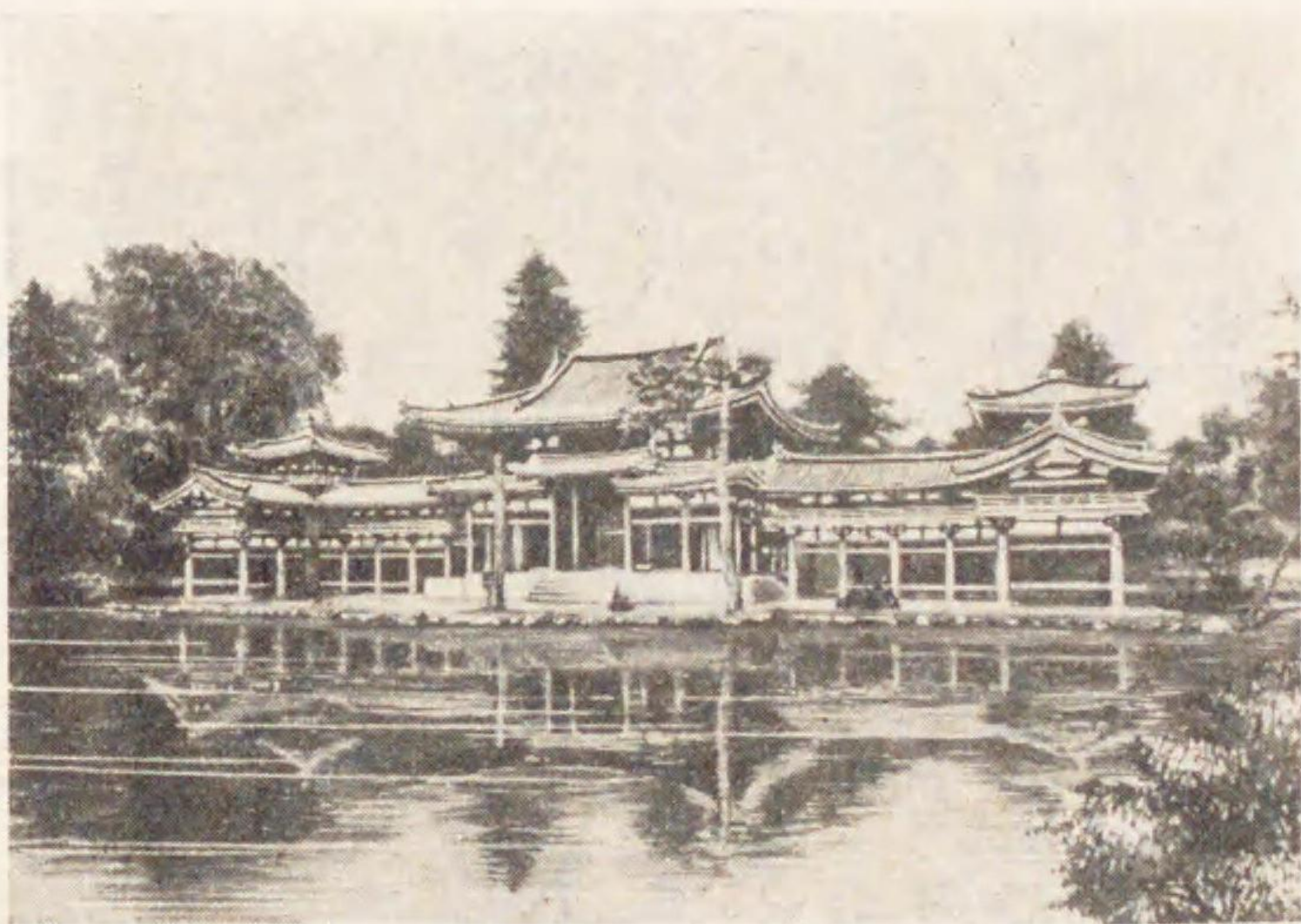
二、短歌は神代に於て素戔嗚尊が出雲を平定し稻田媛を娶り宮殿を造られ、
「八雲たつ出雲八重垣つまこめに八重垣つくるそのやへ垣を」

と歌はれたるを以て始めとなし、以來喜びにつけ悲しみにつけ歌つたものである。

三、藤原道長は後一條天皇の御代法成寺を造り、頼通は後冷泉天皇の御代宇治の平等院を造つた。共に壯麗を極め、平等院の一部である鳳凰堂は今尙残つてゐる。

三 この時代に唐の詩も盛んであつた。然しこれと並んでより一層この日本本來の文學が盛になり、女流作家が輩出した。朝廷の命により數種の歌集も編輯された。

一、古事記、日本書紀と並んで、源氏物語、枕草紙の二書が普く知られて居る。この著名な二つの文學書はこの平安朝後期の作品である。前者は紫式部、後者は清小納言といふ何れも宮廷に仕へる女官の著作である。そしてその性質から云ふならば、前者は香氣高い小説であり、後者又文學價值に於てこれに優劣なき隨筆である。



平等院鳳凰堂



貴族の邸宅

この二つの勞作及びこれと前後して叢出した多くの紀行文は、何れも日本文字を使用しての著作である。

二、短歌の隆盛と云ひ、かゝる日本的なる文藝の興隆は、佛教乃至唐制文物の輸入による日本古有の文化のより一層發展的な發現と見る事が妥當である。

四 後冷泉天皇の御代に東北地方の豪族安部頼時が叛した。

源頼義は子の義家と共に討伐した。此戦は連歌の風流を以て聞えてゐる。

義家は頼時の子貞任を追ひ歌を詠



任赴の司國

んだのに、速座に應へて貞任が、同じ歌の前半を作つたので、義家はその場は見逃したが、かゝる風流こそ日本武士の情味を示す一端であらう

一、義家は貞任を追ひ

「衣の袖はほころびにけり」

と歌つたに對し、貞任が

「年を經し絲の亂れの悲しきに」

と前半の句を詠んで應へたのである。

二、連歌は一首の歌を上下の兩句に分けて兩人にて合作するのである。又多數の連歌を連續して詠じたものを、その韻數に依つて五十韻連歌、百韻連歌と稱する。日本武尊が甲斐酒折宮にて「にひばり筑波を過ぎて幾夜

かねつる」と上の句を讀み給ひし時、御火燒の老人が「かどなべて夜には九夜日には十日を」と下の句を連ねたものが、我國の連歌の起源だといはれてゐる。

五

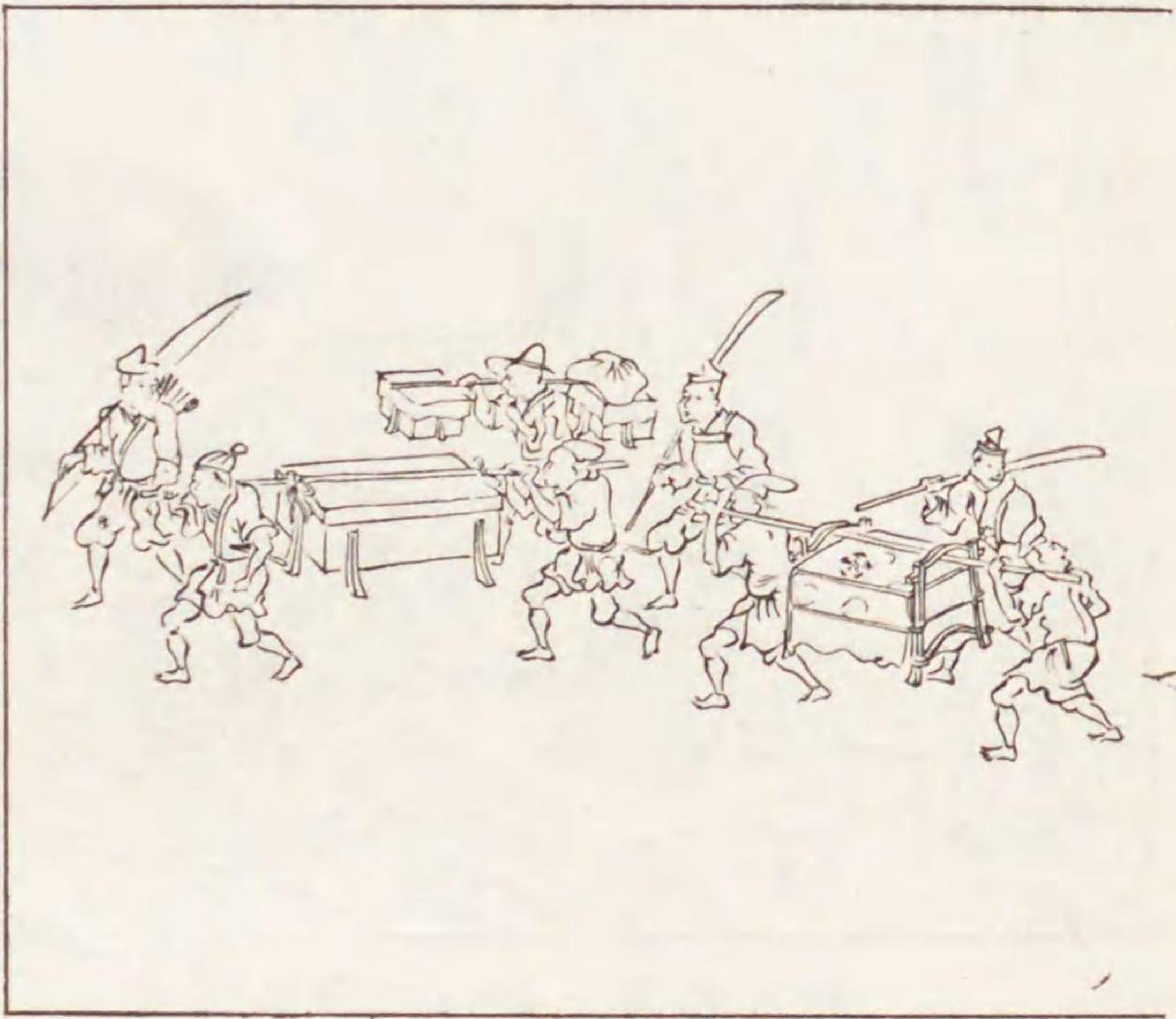
第七十一代後三條天皇は、英斷よく藤原氏の專政を排し、攝政、關白を止めて御親政せられた。

御親政遊ばされても、藤原氏の餘威は猶盛んで、その莊園も思ふに任せられず、御旨に違ふこと多いので、在位五年で位を白河天皇に譲られ、

院中で政を聽き、以て藤原氏を抑へんとされたが程なく崩ぜられた。

六

第七十二代白河天皇は、後三條天皇の御志を繼ぎ藤原氏の專横を抑へるために、位を第七



任赴の司國



僧兵神輿を昇いて強訴に赴く

十二代堀川天皇に譲られてから院政を始
められ、四十餘年間院中政治が行はれ
た。

一、院政とは皇位を譲られた上皇又は法皇が、
院中で實際御政治を遊ばされることで、政
令の出る所を院廳と云ひ、その吏を院司と
云ふ。後には院の警護の武士も置き、朝廷
では百官が皆恒例の節會、敘任等の儀式を
舉ぐるの外は用がなく、政治の實權は全く
院中に歸した。

院政は我が國政治の變體であつて、政治上
の種々の弊害を醸したが、藤原氏を抑へる
ために始められたことである。

七

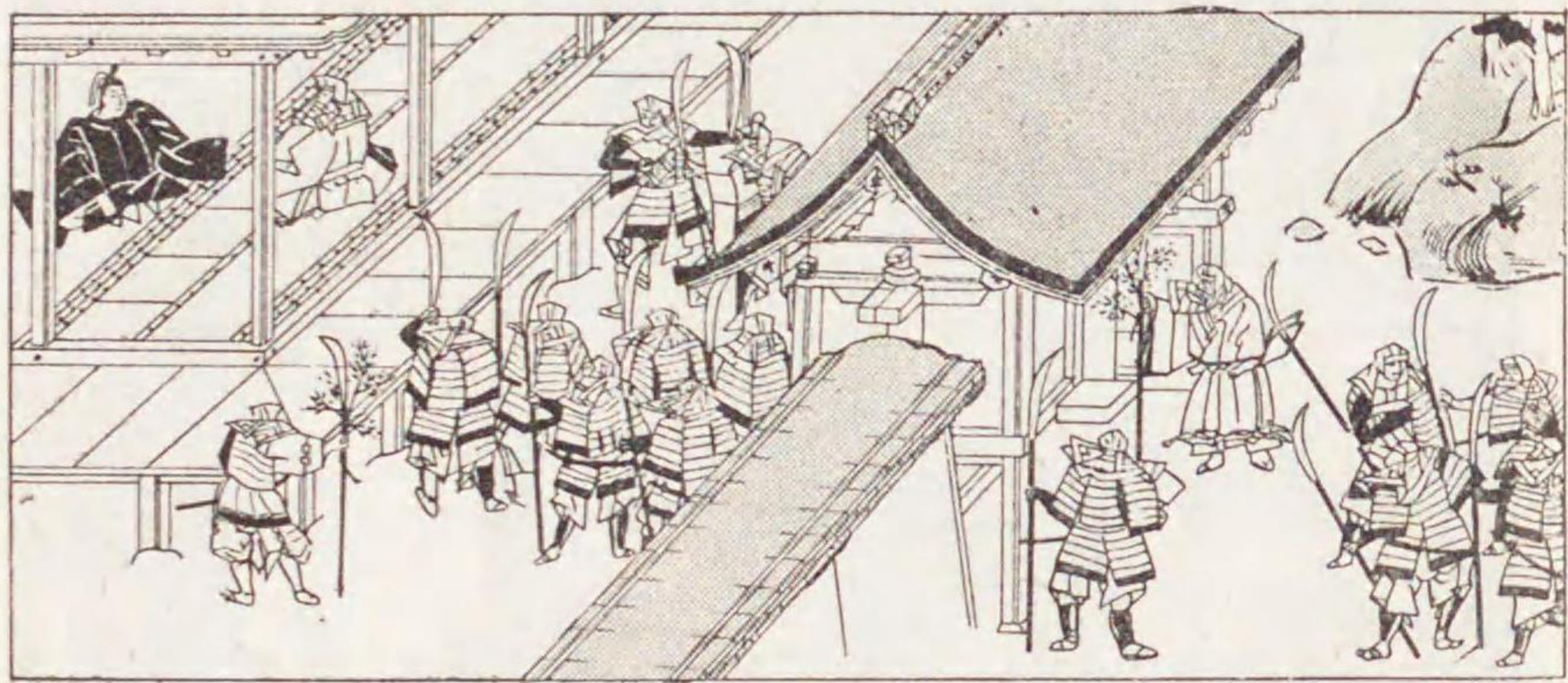
白河上皇は厚く佛教を信じられ、盛んに
佛像を造り又大法會を營み、土地を寄進

されたので、佛教は一層興隆した。

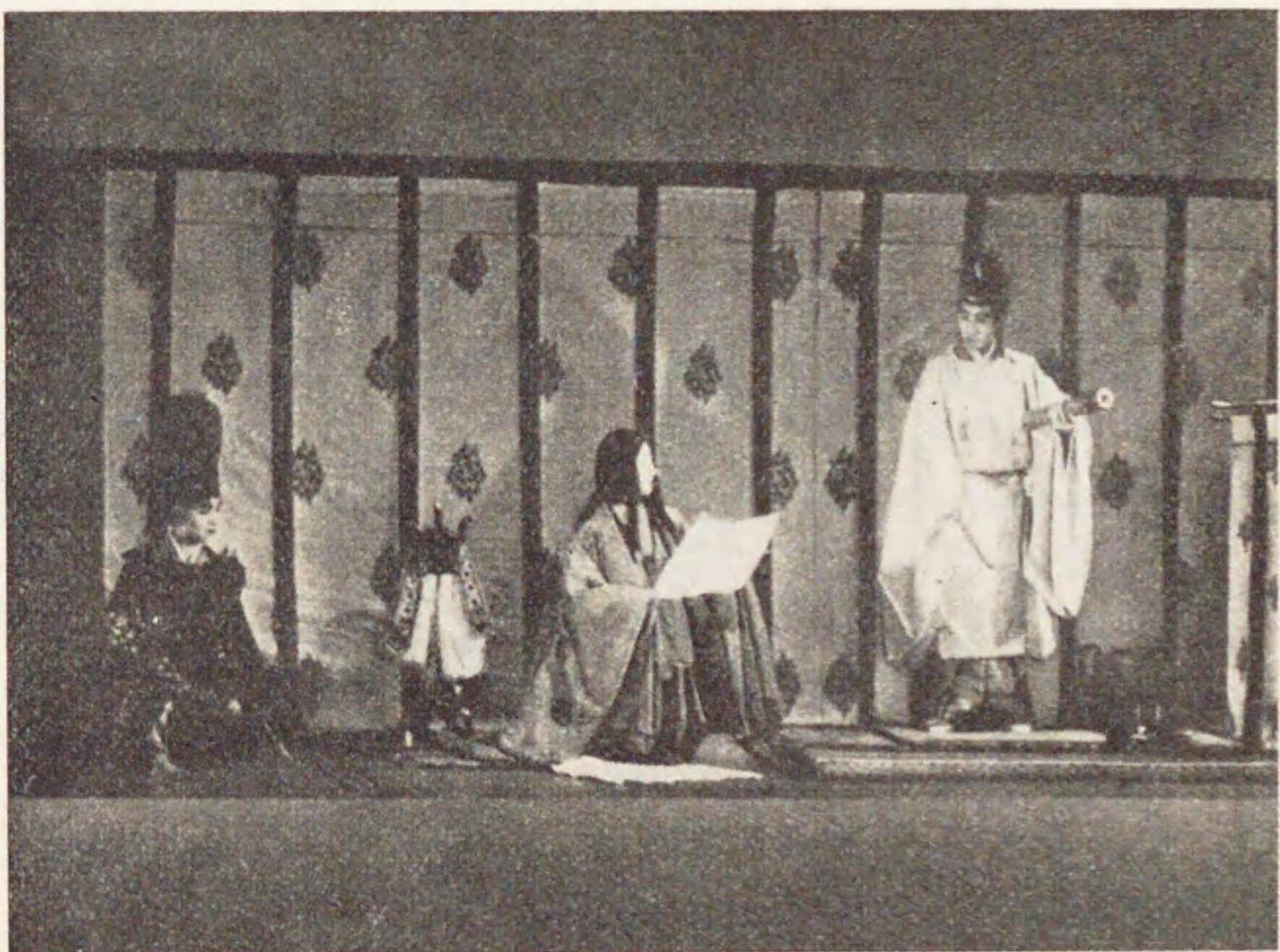
一、人民中には納税を免れるために、土地を寺院に寄進する
者もあつて、寺院の莊園は廣大となつた。其莊園を自衛
する必要から無賴漢を雇つて武藝を習はせ僧兵にした。
僧兵は増長して、不平があれば隊をなして朝廷に強訴し
た。強訴の時は、興福寺の僧兵は春日神社の神木、延暦
寺の僧兵は日吉神社の神輿をかついで騒ぎ、治安を紊す
ので、朝廷では源平の武士をして之れが鎮撫に當らしめ
られたが、これも武士が勢力を占める一つの原因である。

一、この世紀、支那に入寇する契丹は宋の歴代皇帝を益々悩
ました。王安石出で新法を布き、司馬光は資治通鑑を完
成した。

二、西歐に於ては英國に丁抹王朝開かれ、やがてウイリアム
征服王の英國侵入あり、ギリシア教會とラテン教會の分
離あり、法王グレゴリー七世と佛蘭西國王ヘンリー四世



僧兵の強訴



平安朝時代の風俗

との有名な對立あり、法王ウルバン二世クレルモンに會議を開き聖地恢復のため十字軍を起すことを宣告し、第一次十字軍が成功を収めた。

十二世紀

皇紀一七六一—一八六〇

西曆一一〇一—一二〇〇

一 第七十四代鳥羽天皇から第七十五代崇徳天皇第七十六代近衛天皇を経て、第七十七代後白河天皇の御代に崇徳上皇亂を作し、源爲義、平忠正等之に與し、天皇は源義朝、平清盛等をして之を討たしめ、爲義、忠正等を誅した。保元の亂と云ふ。

第七十八代二條天皇の御代、平清盛は源義朝を滅し、源氏は一時没落し、平氏獨り榮えた。之の亂を平治の亂といふ。

保元、平治の兩亂は、何れも藤原氏の一門葛藤に源、平兩氏が武力を以て參加したものであつた。

一、藤原氏は他氏を排斥する時は一族一致して之れに當つたが、一度他氏を抑へて了ふと同族間で攝政關白、其他の高位高官を争ひ、父子、兄弟、叔姪の間に争をなした。

家族制度を基本とする我が國民道德上誠に苦々しいことであつた。

二、後三條天皇が藤原氏を抑へ御親政遊されるに至つて、藤原氏の權勢は大いに衰へ、白河天皇が院政を始められるに及んで、その政治上の實權は殆んど失はれるに至つたが、源平武士が擡頭するに及んでは殘有勢力も全く失墜した。

二 第七十九代六條天皇の時、平清盛は太政大臣となり、武人として初めて政權を握つた。平氏の一門悉く高官に列し、その莊園も廣大且つ多數で横暴の振舞多かつた。

一、清盛は兵庫港（神戸港）を治め、宋との貿易を盛んにしてその文化の輸入を計り、又安藝の音戸、瀬戸を掘つて瀬戸内海航路の便を計り、寺社の領を沒收して僧侶の横暴を抑へ、宋代の歴史經濟に關係した太平御覽といふ書を取り寄せて朝廷に奉るなどの美舉もあつた。



平治の亂

一〇四

二、平氏の全盛は源氏の再興により忽ち覆されたが、その原因は平氏が藤原氏の榮華を眞似て中央にのみ集り、地方に對する武力的經濟的支配權を忘却し、不臣非道の所業をなして人心を失つたためである。

三、清盛が後白河法皇を幽した時に其子重盛は泣いて「神は非禮を受けられない」と父清盛を諫めた。清盛も重盛の面前には愼まざるを得なかつたが、重盛

の早世は清盛に横暴の自由を與へた。

三

第八十代高倉天皇の御代、諸方に散つた源氏の一門は起つて平氏討伐の白旗を擧げた。先づ源賴政が以仁王を奉じて擧兵し、これは失敗したが、續いて源賴朝、義仲擧兵し、第八十一代安德天皇の御代、義仲は北陸を平定して京都に入つた。



平治の亂

平氏は西に逃れた。次いで第八十二代後鳥羽天皇の時、賴朝は先に京に入つた義仲が亂暴を働いたので、弟の義經に命じて之を討ち、更に義經は西に逃れた平氏を追撃し、平氏は壇浦で一家一門海底に身を沈めて滅びた。

一、池禪尼は平忠度の後妻、清盛の繼母である。平治の亂で源賴朝は東國に奔らんとしたが、途中平宗清に捕へられて六波羅に送られた。宗清は流石に哀れと思ひ、池禪尼に賴朝が禪尼の亡兒家盛に似てゐると語つた。禪尼は深く心を動かされて直ぐに平重盛を呼び寄せ、清盛に賴朝の命乞をさせた。清盛は患を後に遺すことを恐れて此の乞を聞かなかつた。

禪尼は重盛に向つて「死せる我が子の倂に似たりと聞くより、いつしか彼子のこと思はれて、はたと胸ふさがり、湯水も快く飲まれねば、自ら久しかるべしとも覺えず。あはれ尼が命を生かさんと思召さば、賴朝を助け給へかし」と打歎いたので、重盛再び清盛を説いた。清盛も終に賴朝の死を宥して、伊豆の蛭島に流すことにしたのである。

後その賴朝の爲めに清盛は亡ぼされた。

二、常磐御前は源義朝の妻で、賴朝、範賴、義經の三子を生んだ。義朝が平治の亂に敗死するや、常磐は範賴、義經の二兒を伴うて身を潜めたが、清盛は常磐の母を捕へてその行方を糾問した。常磐は母の苦難を看過することが出来ず、自訴して出て「母はもとより科なき身にて侍れば、御釋し候ふべし。子供の命を助け給はむとも申し候はず、一樹の下に住み、同じ流れを渡るも此世一つのことならず、あはれ高きも卑しきも親の子を思ふ習ひ皆さこそ侍らめ。妾この子どもを失ひては、甲斐なき命片時も堪へてあるべきとも覺え侍らねば、先づ妾を失はせ給ひて後、子どもをば兎も角も御計ひ候へ」と泣く泣く清盛に訴へた。

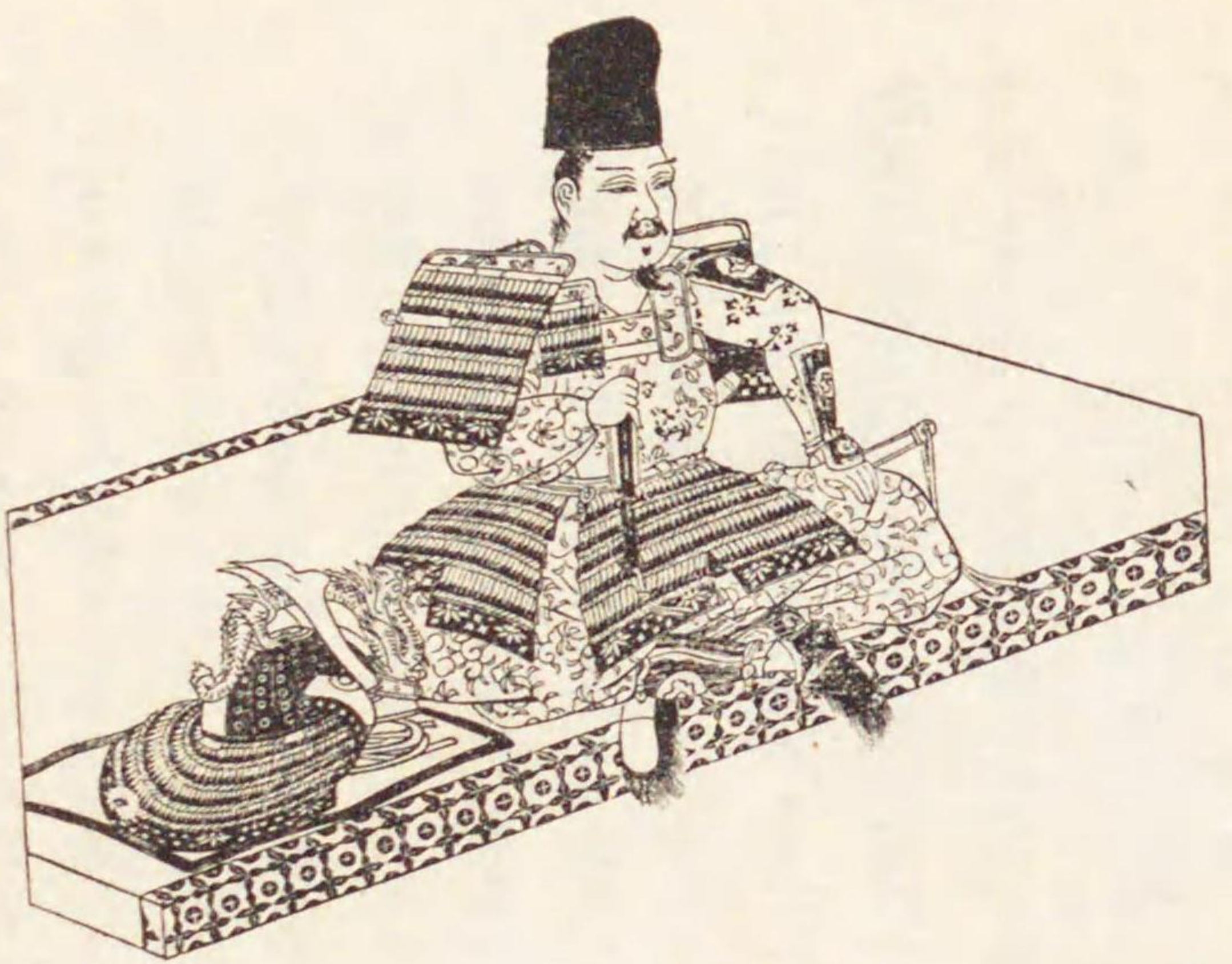


表繪は待賢門の戦ひの繪である。平治の亂（皇紀一八一九年、西曆一五九年）に、内裏に陣せる源義朝の軍を平氏三千餘騎を以て攻め、平重盛は五百騎を率ゐて待賢門に迫り、源義朝と一騎討を試みたが敗退した。この時の兵士の武具、武器を見るに美麗で、實用的よりは寧ろ美術的のものと云ふべきである。かゝる美術的な武裝を着け、多くの従者達の面前で大將同志が華々しく一騎討をする戦争も亦残酷性のないむしろ優美なもので、美術的戦争とも云ふべきであらう。

後三年の役、源義家と安倍貞任が戦争中連歌を詠み合つたことなどは風流的戦争とも云ふべきである。（本文九八頁、一〇三頁、一九三頁参照）

美術的武裝

清盛は之を憐み、且つその容色を愛して二兒の死を宥さうと思つた。一族の者達は皆これに反対したのであるが、已に頼朝を許してあるのだから、その弟に當る此等の幼兒を許すのは當然だと云つて、二兒を殺さず許した。



源 頼 朝

四 源頼朝は鎌倉に幕府を開いた。頼朝から三代を経て北條氏に権力移り、それが衰亡する迄百五十年間は鎌倉は政治の中心として

殷盛となり、それ迄殆んど文化的に開拓されなかつた東國は、武士的な特殊な文化を創造することになつた。

此の鎌倉幕府は日本三大政變の一つとされる武家政治の基本となつたもので、それより明治の初年迄の間、僅か數十年を除くの外は武家政治を續かしむる程の基礎的のものとなつた。

五 鎌倉幕府の組織は大體大寶律令に準じ、職員は中央も地方も全部武士を以て任命し、中央には公家出身も任命し、其の政治は極めて簡便にした。

- 一、中央に武士の取締りをする侍所と、一般政務を司る政所、裁判司法を司る問注所を置き、侍所の長官には和田義盛、政所の長官には公家の大江廣元、問注所の長官には公家の三善康信を任じた。
- 二、地方は一般地方と特別地方とに分ち、一般地方には諸國に守護を置いて國內の軍事警察を司らしめ、頼朝の家人をして之に當らしめた。又全國の公領莊園に地頭を置き、土地を管理し納米の取り立てを爲し、又守護の命を受けて警察のことも行はしめ、頼朝の家人を以て之に當らしめた。
- 特別地方の皇居の所在地たる京都には、京都守護を置いて守護し奉つた。奥州には奥州奉行、九州には鎮西奉行を置いた。

三、この制度は武家政治の根本とも云ふべきで、後長く模範となつた。

六 頼朝は藤原氏、平家が文弱に流れて滅亡したのに鑑みて、大いに東北武士の強健なる風俗習慣を重んじ、質素儉約を奨め、盛んに武士道を奨励し、皇室尊崇、神佛崇拜の國民思想を尊重し、武士をして大義名分尊王の精神を知らしむることに努め、又廢れたる社寺の復興修理を爲さしめ、信仰を深からしめた。

一、頼朝が京都を離れ幕府を東國の鎌倉に開くことが出来たのは理由がある。東國は源氏の祖先以來縁

故が深かつた。鎌倉に在る鶴ヶ岡八幡宮は源頼義が東北征伐の折建てたものである。

二、頼義、義家が東北兵亂の鎮定を爲した際、東北武士との密接なる關係が出来、武將としての尊敬を受け、後三年の役に藤原氏が義家の武功を憚つて恩賞を與へず、義家が自分の財産を割いて將士の功を犒つたことは、いたく東北武士をして其の恩誼に感激せしめ、固い主従關係をつくらしむるに至つた。

三、かゝる因縁の外に、頼朝の妻となつた政子の實家の北條家の援助も大きかつた。殊に政子は意志の強い婦人で内助の功が多かつた。

鎌倉は軍事的見地から見ても要害堅固で武家政治の適地とされた。

四、頼朝が京都に據らなかつたのは、公家出身の行政家大江廣元の説に依つたと云はれるが、京都の生活は武士をして公卿化せしめ、武士の本質たる質實剛健の氣を失はしむるからである。

五、幕府と稱するのは武士の政廳である。外國の封建時代には國王も一個の封建領主であつて、その他に封建領主が多數存在した。然し國王の下に於て、かゝる多數封建領主を統轄する一の政治的な機關は存在しなかつた。

日本に於ては天皇が京都に在し、そして別な個所に於て、封建領主の統轄機關として、幕府が存在し實際に政治を行つた。これは武士の政治が絶對的で、この間の天皇はあつてなきが如き感じを與へるかも知れぬ。然し天皇に對する忠節は決して變へられずに残つてゐるのである。天皇は幕府の

又上に立つ地位に在し、神聖犯す可からずとして國民の崇敬を受けてゐる。

六、幕府は天皇の下に全國の封建領主に命令する。封建制度が完備したのは江戸幕府であるが、この時に於ては徳川氏の下に全國に大小約二百五十の領主があり、封土内に於ける絶體勢力を保有し、領主の下に封土の大小により多少の家臣を持ち、家臣は又自分の家臣を持ち、西歐に見る如き縦の服従關係が確立した。そして家臣は、それ／＼自己の主人に對し忠節を盡すのであるが、然し國民として、天皇に對する忠節はあらゆるものゝ上に、その地位を置いたのである。幕府も亦常に朝廷に對し御命令を仰いだ。

この關係は西歐に於ける封建政治が、總てのものをその封建的領土内に押し包んで、國王の名は存しても、一封建領主内の人民がその忠節をその領主までに止め、國王の存在を知らなかつたことは全く趣を異にする。

七、武家は自分の尊崇して居る神様を持つて歩いた。

平氏は嚴島の辨財天を、源氏は八幡宮をかつき廻つた。

平氏が勢力を占めると在來の神社を辨財天に、源氏が勢力を占めると八幡宮に改號するもの多かつた。平家の時代は長くなかつたから辨財天に化することは餘り出来なかつたが、源氏は長かつたら他の神社を澤山八幡神社に變へた。

八、頼朝の時代、曾我兄弟が十八年間の苦心の後に親の仇を討つたことは美談となつてゐる。

七 土御門天皇の時頼朝は死んだ。時に西曆一一九九年である。

一、この世紀に支那では女眞族が金の國を興し滿洲の地に蟠つた。金は宋に入寇し、宋は都を南に移さざるを得なくなり、南京に都した。これより南宋と稱した。

その後も金は絶えず入寇しては宋を惱ました。

二、西歐ではナイト・テムプラー義團始る。ゴチック建築の風は教會を中心として大いに盛であり、英人アイルランド征服を始めた。第二次十字軍の遠征效なくして歸り、第三回の遠征があつた。

十三世紀

皇紀一八六一—一九六〇 西曆一二〇一—三〇〇

一 源頼朝薨するや、子頼家二代將軍となつた。頼朝の妻政子の父北條時政は執權として實權を掌握した。

三代將軍は實朝であるが、頼家の子公曉の爲めに殺され、公曉は北條時政の子義時に殺されて源氏の血統絶えた。茲に於て、頼朝の遠縁に當る年僅か三歳の藤原頼經を京都から迎

へて將軍となし、義時が執權となつた。

一、頼朝は組織確立に急いだ爲め猜疑の心を起し、一族の範頼、義經等を殺し、源氏の兩翼を討ち孤立となつた。

ために頼朝の死後、間もなく源氏は滅亡し、鎌倉幕府の實權は、妻政子の實家北條氏が執權として掌握することになり、北條氏は十四代も続くことになつた。

執權職は將軍輔佐の重職で北條氏が世襲獨占したのである。

二 土御門天皇から第八十四代順德天皇を経て第八十五代仲恭天皇の時、後鳥羽上皇は政權恢復を志されて、兵を起したが成功に到らなかつた。これを承久の變といふ。

一、我國に於ては大嘗祭が行はれて初めて天子の御即位が確定する。大嘗祭は天照大神以來繼續してゐる御儀式で、所謂即位式は大化以後唐の文物輸入の時代、支那の式を模倣したものである。依つて即位式を挙げられても大嘗祭を終らねば未だ眞の天皇とは申されず、半帝と申された。

承久の亂の仲恭天皇は半帝と申された。

二、我國の即位の御儀式である大嘗祭は、實に壯嚴で、先づ悠紀國主紀國を選定され、宮を造り、四方には注連を張り、大禮使が遣され、土地を淨め、耕作には人格者を嚴選し、齋戒沐浴し、淨き着物を着け、神歌を唱ひ音樂を奏しつゝ、神聖なる儀式の下に和氣霽々、神國にある氣持で耕作に従事

する。

かくして作られた食物を、御即位式のために造られた悠紀、主基の兩殿よりなる大嘗宮殿に天皇御一人にて入殿され、天皇御自身皇祖の御靈に捧げられ、數時間御祖先と對坐の後召上られ、その餘を臣下に賜ふのである。

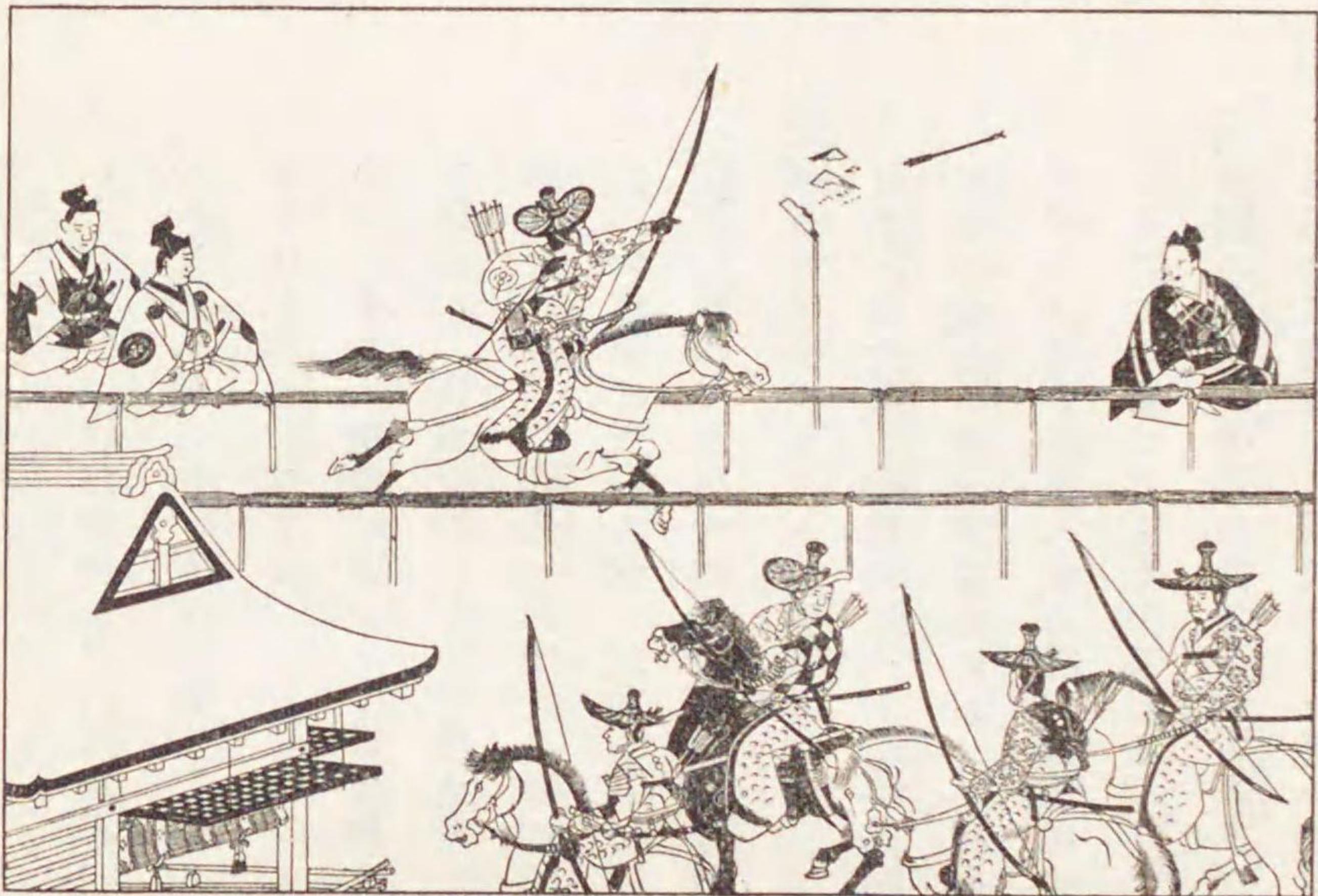
三、悠紀、主基の兩殿は昔のまゝの建物であり、敷物も、用器も昔のまゝである。天皇は褌を爲され祓を爲され、鎮魂を遊ばし、午後九時から三時間悠紀殿に、午前二時から三時間主基殿に御一人にて對坐なされ、御祖先に對座なされるのである。極めて神聖壯嚴な御儀式である。

四、此の大嘗祭は天照大神の以前から行はれ、神武天皇に依り天皇即位式とされたのであつて、この大嘗祭に依つて天照大神が天皇の御身體に傳はることになるのであるから、天皇は即ち天照大神の御延長であらせらるゝのである。

五、日本の御大典の御儀式は「生産の神國化」「分配の神國化」の表徴であるとも申すべきである。

生産分配は生活の基礎であり、子孫の生命生活の依つて成る所以であるから、日本の「お母さん」は子孫の生産が神國にある様な協力的のものであり、又子孫の分配も神國にある様な協力的のものであることを祈つて居るのである。

六、外國の皇帝は選舉に依るものもあり、宗教關係者により又は僧侶により王冠を授けられるものもある。又即位に當つては犠牲の牛を焼いて食し祝典を歡ぶ。日本の即位式とはその神聖壯嚴さに於て全く



馬 鎗 流

相異なる。これ肇國の基礎、精神の相異なるがためである。

三 第八十六代後堀川天皇の御代、義時卒し、泰時執權となり、武家の法律として貞永式目を發布した。頼朝以来の風俗習慣を基とし、東國武士の生活状態を標準とし、五十一ヶ條より成り、後世武家政治の基礎となつた。

一、貞永式目は北條泰時が三善康連と議して貞永元年に制定したもので、全文僅かに五十ヶ條に過ぎないが、頼朝以来の慣例に基き道徳的精神を織込み、武家政治を規律し武士道を定めたもので、後世武家法制の基本となり、徳川家康はこれを手本にして、徳川幕府の基礎を定めたのである。

四

第八十七代四條天皇から第八十八代後嵯峨天皇、第八十九代後深草天皇、第九十代龜山天皇、第九十一代後宇多天皇、第九十二代伏見天皇、第九十三代後伏見天皇の諸代の間に、北條泰時、經時、時頼、時宗、政時が順次に執權になつた。

一、執權北條泰時死し、孫經時が職を継ぎ、居ること四年にして、病の故に弟時頼に譲つた。時頼は泰時と併び稱せられる程の名執權であつたが、彼の人となりは、その母松下禪尼の感化に負ふところが多いと云はれる。禪尼が障子の切り張りをした話は有名である。

徒然草に、松下禪尼が或る時、子の相模守時頼を招くことがあつた。その時禪尼は障子の破れを自分で切り張りしたので、恰度來合せた尼の兄の城介義景がそれを見て、私が誰かにやらせませうと云ふと、尼は自分の方が上手だと云つてなほ續けた。義景が、切り張りは醜い故全部張り代へた方が宜いと云ふと、尼は、自分もそうは思ふのだが、今日は時頼が来るので儉約の手本を示すため、態とかうしてゐるのだと答へたといふことが書かれてある。この母にしてこの子ありと云ふべきであらう。

五

鎌倉時代に佛教には新宗派が多く現れた。

平安朝時代に天台、眞言の二宗起つてゐたが、この時代に、源空により淨土宗、親鸞により淨土眞宗、日蓮により日蓮宗、一遍により時宗が起された。特に禪宗は武士の間に大い

に歓迎された。

一、武士は宗教心が強い。それは戦争による彼等の頼りない運命に對する當然の結果である。西歐に於てもキリスト教は中世武士の間に支配的に擴まり、彼等はその擁護のため數回の出兵をエルサレム迄十字軍の名の下に行つてゐる。

二、禪宗は専ら枯淡を旨としてゐる。精神修養が主である。

當時武士は文弱を侮蔑し、遊技は武技であり流鏑馬、馬追ひ、卷狩等に没頭し、質素簡易な生活を尊んだ。恥を知るを以て最上の美德となし、怯懦を却け、君主のために死を辭せぬことは、西歐の騎士道に於ても同じように見られる所である。かゝる武士の志向に合致する禪宗は當然武士の歓迎を受けた。



冶 鍛 刀

三、鎌倉武士の創造した文化は、従つて佛教、殊に禪宗の影響を多分に有する非常に簡素な實質剛健なものであつた。即ち建築に於ては平安朝時代の寢殿造りの驕奢から、書院造りの簡素に移り、庭園も逍遙に適する風雅から、修養に適する自然の素材に移つた。

鎌倉はかくて武士的な文化を創造して行つたが、一方京都は平安朝からの文化をそのまま受け繼いで、こゝに二つの對照的な文化の流れが起つたのである。北條氏の後を承けて、足利氏が京都に幕府を開いてからは、この二流は合一して調和するに到る。

四、奈良朝時代に本地垂迹説が起つた。それは印度の佛が日本へ權りに現はれたものが神である。即ち印度の大日如來が日本へ姿を現はして天照大神となり、印度の藥師如來が姿を現はして日吉神となり、印度の觀音菩薩が姿を現はして下加茂の玉依姫となり春日神になつたと考へた。

五、此の本地垂迹説が、平安朝の末から鎌倉の初め頃になると、今度はそれに反對するところの反本地垂迹説が出た。即ち印度の佛が日本に來たのでなく、日本の神が印度に行つたのだ。それは日本の年代を調べて見ると能く解る。

瓊々杵尊は三十八萬八千五百三十三年天下を治めて居られた。彥火々出見尊は六十三萬三千八百九十三年天下を治めて居られた。それから鷓鴣尊不合尊は八十三萬數千年天下を執つて居られた。さうすると天孫降臨以來神武天皇までが大體百八十九萬年からになる。ところが印度の佛は五千年か六千年の歴史しかないから、日本の神が印度に行つて佛になつたと考へるべきであると主張するの

である。この年月は北畠親房が書いた年月を基礎にして居る。

六、武士の興起と共に優秀な武器製作者が現れた。鎌倉時代粟田口吉光、岡崎正宗、郷吉弘等の名工が出で、日本刀は精巧を極めた。

六

第九十代龜山天皇の皇紀一九三四年西曆一二七四年、元兵數萬大舉して九州の地に襲ひ來た。然し我が勇敢なる武士はよくこの慄悍なる蒙古兵を撃滅することが出來た。

續いて後宇多天皇の皇紀一九四一年西曆一二八一年、元兵十四萬餘再び襲ひ來つた。この時龜山上皇はこの國難を憂へ給ひ、伊勢の神宮に身を以てこの國難に當らん事を祈られたが、一夜大風俄に起り、元の兵船盡く覆没し、我が軍この機を逸せず奮戦したので、元は潰滅し、生きて故國に歸つた者僅か三人に過ぎなかつた。この後元は又我が國を窺はうとはしなかつた。

一、鎌倉時代に於ける最大の事件は元の侵寇であらう。日本國民はこれを最大の國難の一として小兒も知つてゐる。そしてその時起つた奇蹟的暴風を神風と稱し、日本が神の國である事を信ずるのである。

これより先、支那では蒙古より起つた成吉思汗が精悍なる兵力を以て四方を席捲してゐたが、その孫忽必烈（元の世祖）は全く支那を統一し、遠く西歐の地まで侵略すると共に、東方に於ては朝鮮

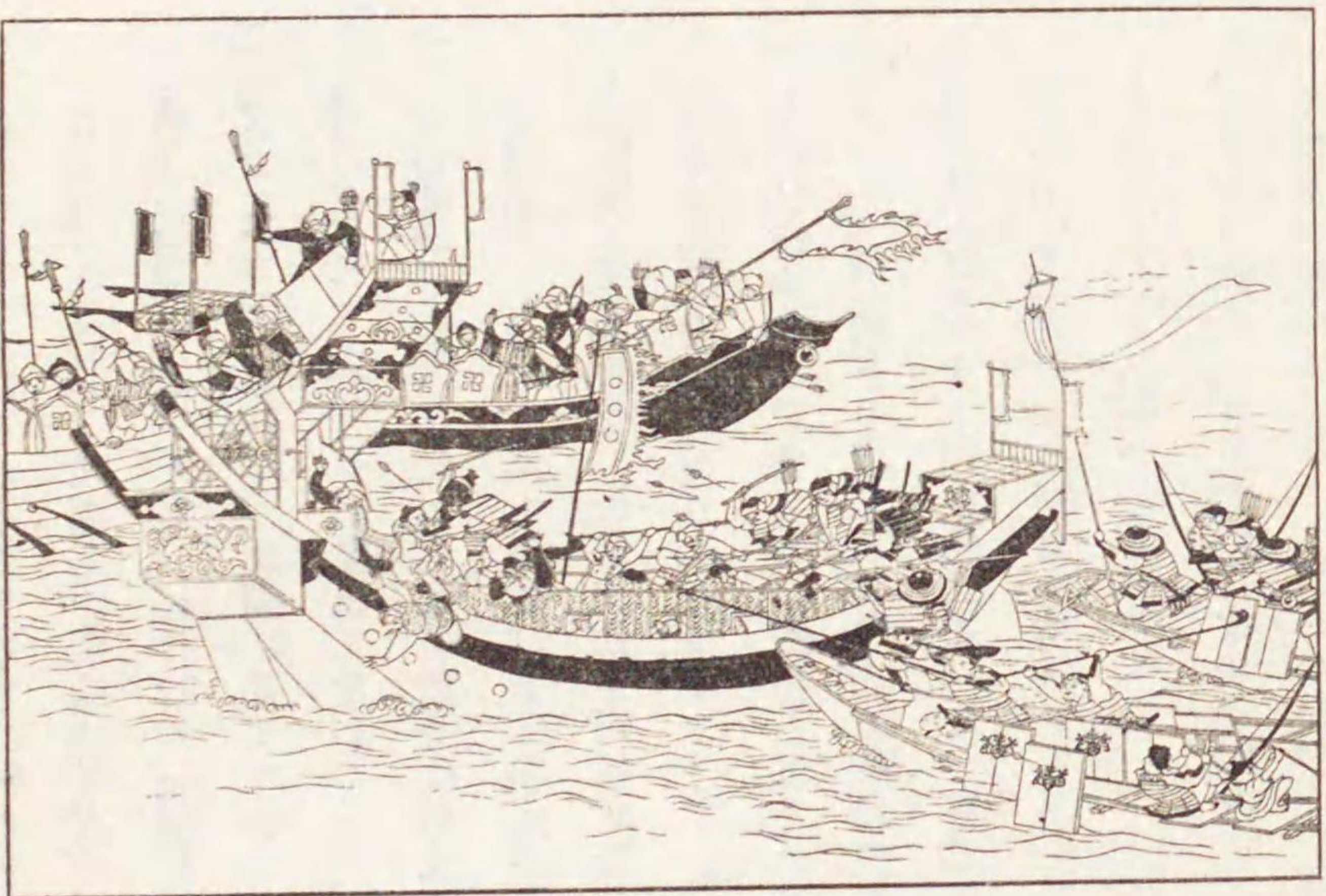
を降し觸手を日本に延べた。

そして、我國に對して通商と戦争の何れを選ぶかと、無禮なる言辭を以て修交を強いた。國體を知らざるこの元の態度に對しては、國民一同憤激し、幕府の北條時宗は斷乎として之を却け、使者を追ひ返へし、神劍を以て之に當らんと國是を確立した。

二、朝廷から元に與へんとせし返牒案に、我國は神國であつて力を以て争ふことは出來ぬとの意味が書いてあつた。

同じことは應永の末に、明が朝鮮と聯合して我國を收めんとするとの噂が立つた頃にも、足利幕府では、我國は神國であるから力を以て争ふことは出來ないと將軍足利義持が明の使に云ふてやつた。

三、この國難に當つて、日本は全く舉國一致して之



元寇

に向つた。女はその家の又はその村の神に祈り、男は各々武器を以て馳せ参じ、天智天皇の築かれた水城を修理し、又要塞の築造に日夜の別なく働いた。後明治時代に入つてからロシアとの戦争は第二の國難であつたが、この時も全國を擧げて一の精神に統一されて之に對した。即ち祖先から傳はつて、一度も外敵の蹂躪に委せた事なき祖國は、神の造つた國であるが故に、神の加護があり、神に祈つて、神と共に敵患を除かんとする精神である。

この精神に統一されるが故に戦士は勇敢であり、戦士の後に控へる者は、戦士をして充分にその力を發揮せしむべく協力する。上は朝廷から、下は一樵夫に到る迄、かゝる精神に完全に統一される。是れ祖先を悲しましむるが如き國辱は斷じて受けない、又子孫から非難されるが如き國辱は斷じて造らないと定めてあるからである。

四、日本人は家柄を尊重する。家柄とはその家の祖先以來の歴史的所産たる品格である。家柄とは「家カラ」で、家を中心として、代々の家族が積み重ねて來た品格なのである。

五、日本人は又大きく國家的に云へば、同じかゝる家族制度の觀念の上に國柄を尊重する。國柄とは、その國家成立以來の歴史的所産たる品格である。天照大神以來神の國「母の心持」の國としての歴史的所産たる品格である。

六、日本人は祖先より引繼いだ家柄、國柄を子孫に引繼ぐために、家柄、國柄に一層の光彩を添加せんと努力する。

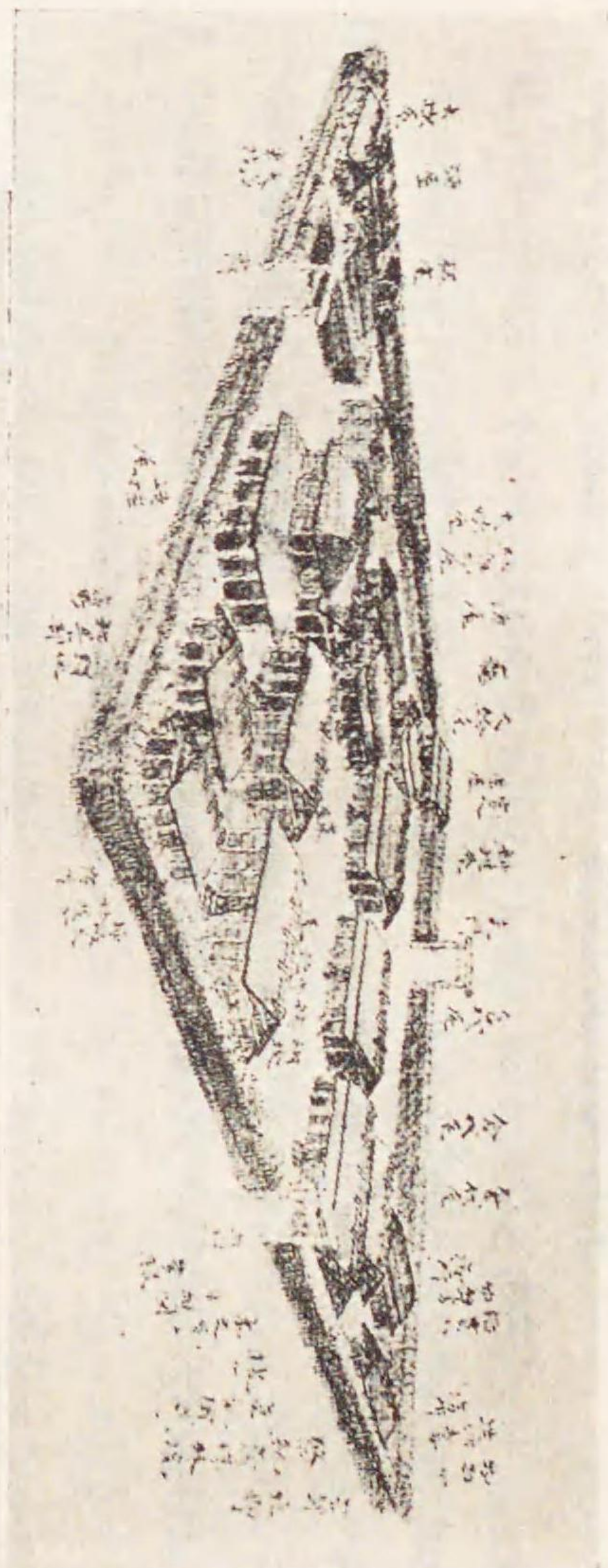
家柄には家族が相寄り、國柄には國民が相寄り、努力する。それは家柄、國柄の歴史的所産の上に更に彼の又は彼等の努力を重ねて行くことである。この努力と協力とは日本人が家族として、國民として、自分自身の存在は認め乍らも、同時に又自分自身を太古の祖先から父母に到る迄の全部の祖先が彼の中に在り、而して彼の子からの未來永劫の子孫の中に、彼は彼の全部の祖先と共に傳はつて行く連鎖の中の一環と考へる觀念から、當然なものとして應諾するのである。

これが「お母さん」の創つた日本國民の心の奥にある感情である。

六、伊太利人マルコ・ポーロは支那に來て元の世祖に仕へたが、歸國後東洋見聞記を著した。其の中に我が日本國を黄金國として紹介したので歐人の東洋遠征の志を刺戟し、コロンバスの西方探検は我が日本に來る爲めであつたと謂はれる。

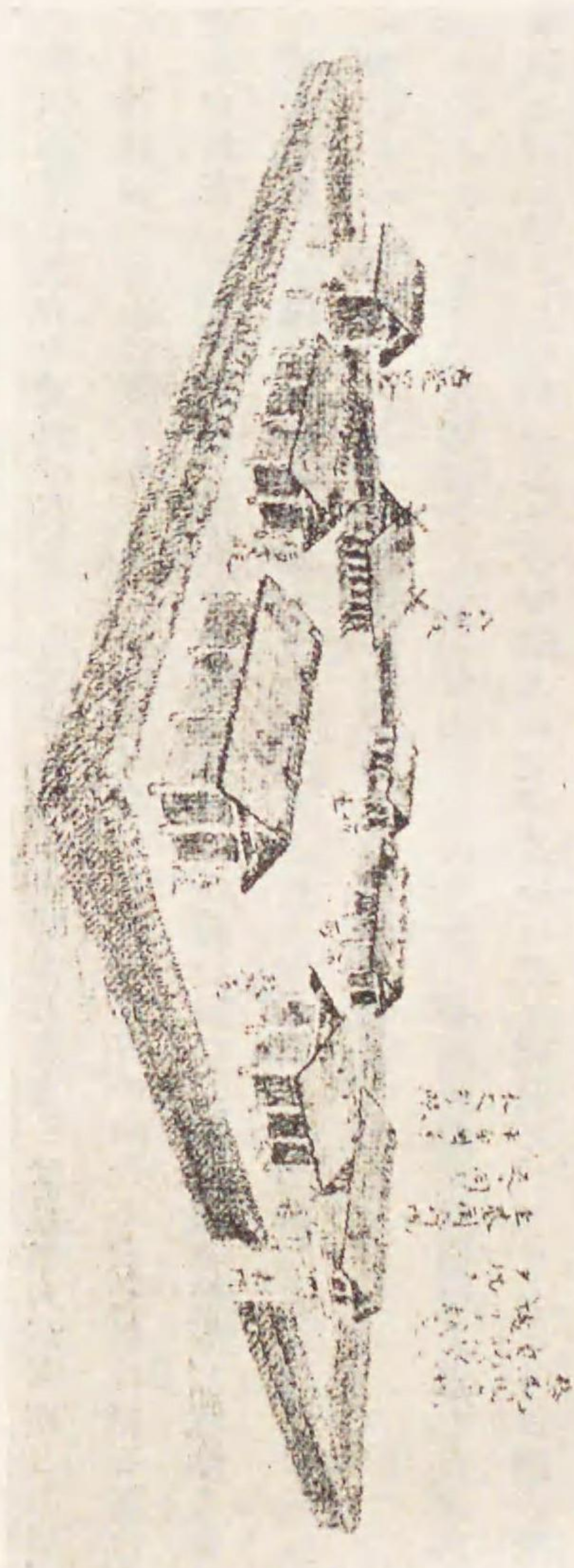
一、この時代の支那は蒙古民族興り金を討ち、忽必烈は大擧して宋を襲ひ之を亡ぼし、餘力を驅つて日本をも併呑せんとして失敗したのは上記の通りである。宋の忠臣文天祥が出たのはこの時である。

二、西歐では巴里大學の基礎成り、モハメットが基督教徒と闘つて破れ、英國ジョン王、國民の要求により大憲章（一二一五）を發布し、第四、五、六、七の十字軍が起され、その結果、東西智識の交流が起り、やがてルネサンスの原因となり、マルコ・ポーロは元に仕へ、オットマンが土耳其帝國を建て、ユダヤ人が英國から放逐せられ、英國國會が開設された。

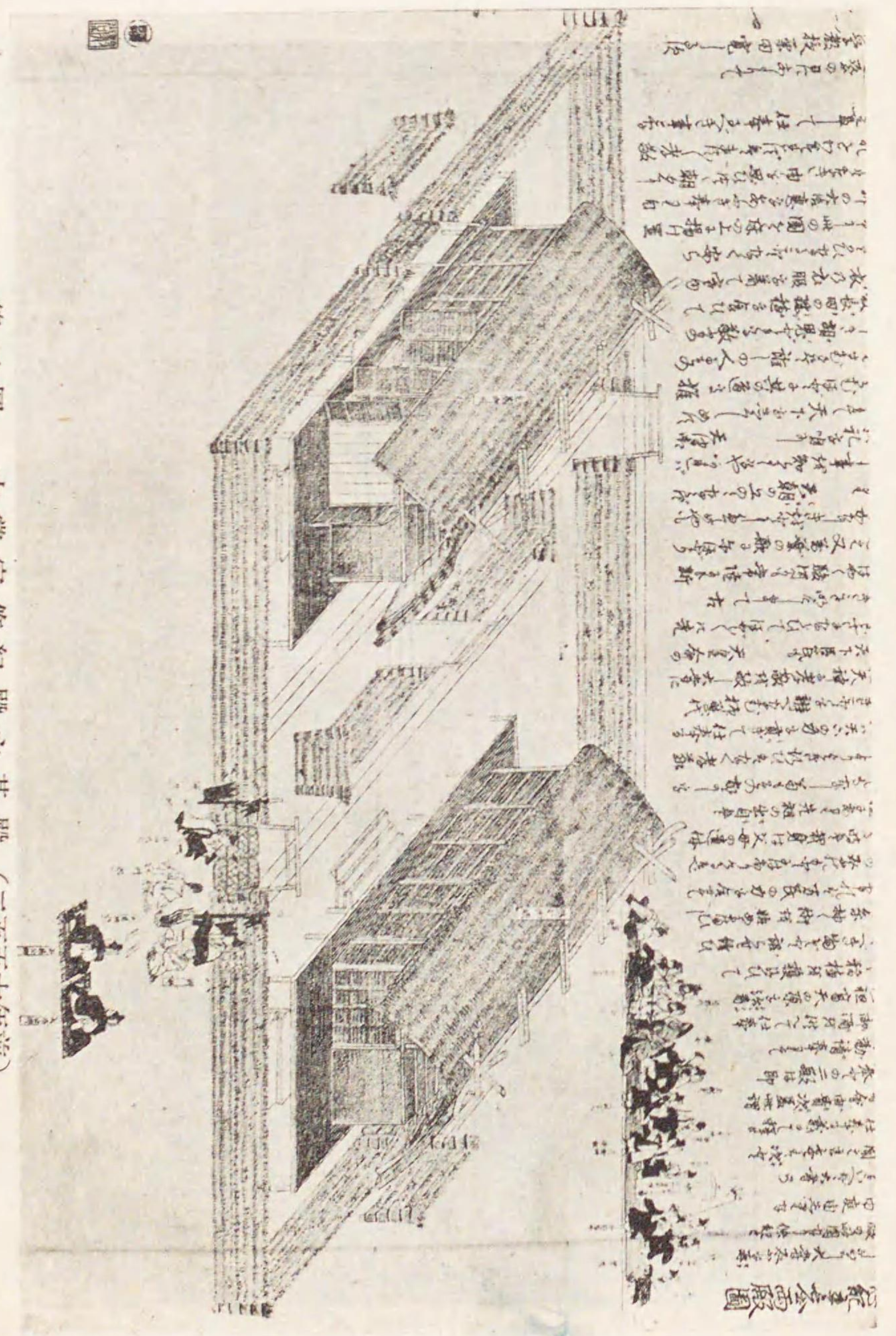


百十三頁參照
以下東西即位式

1111

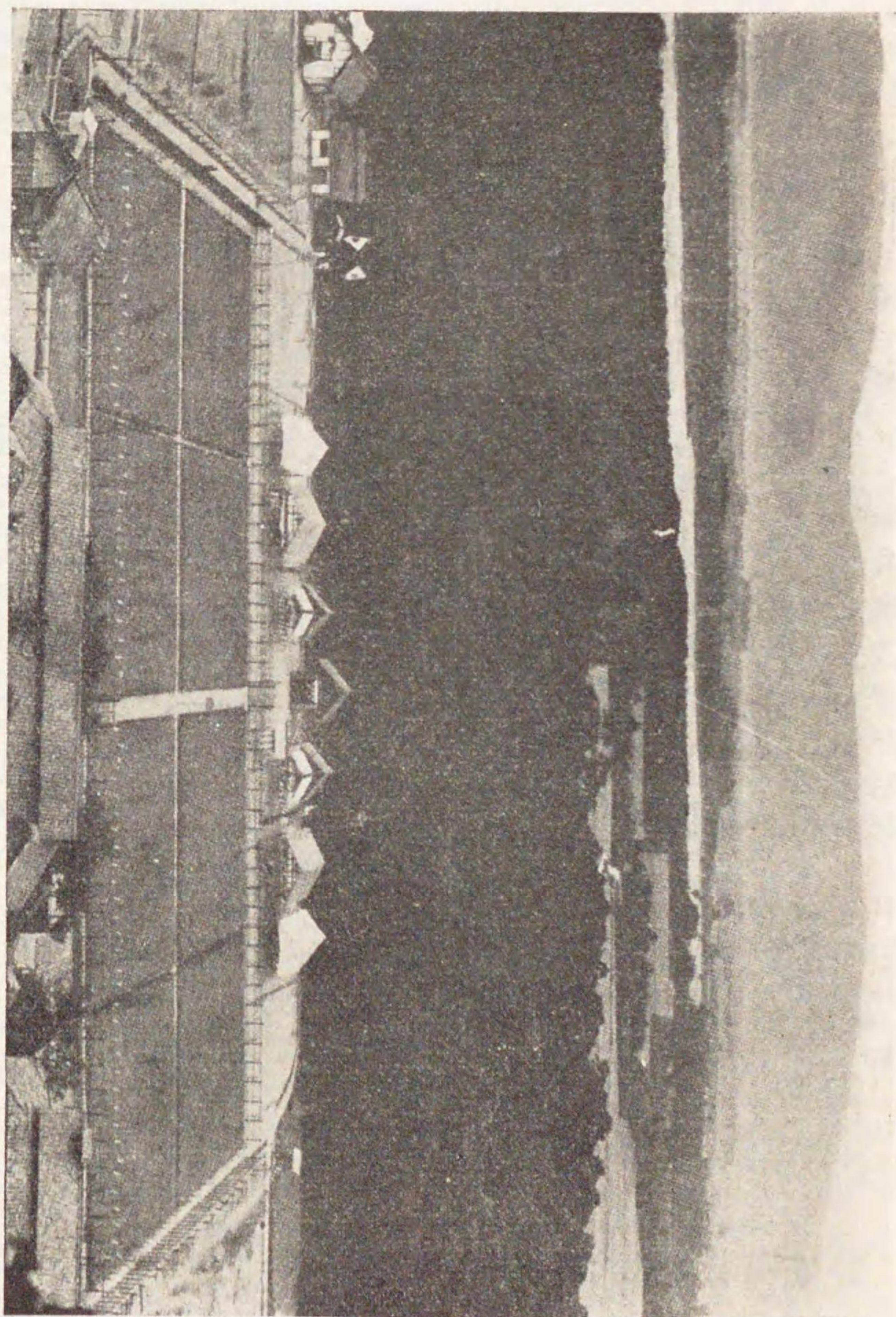


第一圖 [上] 北野悠紀齋場外院 [下] 悠紀國齋場 (千百年前)

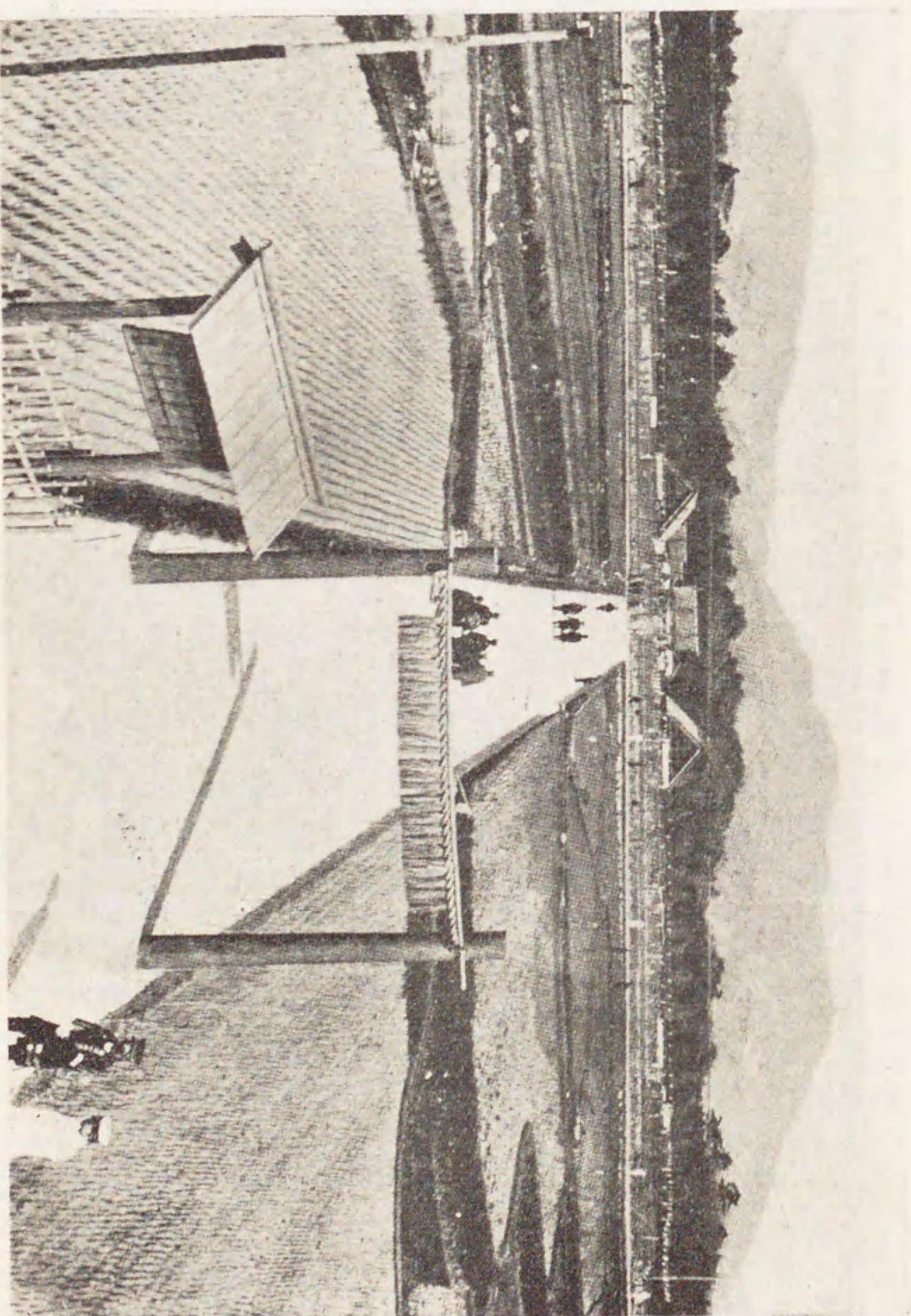


第二圖 大嘗宮悠紀殿主基殿 (二百五十年前)

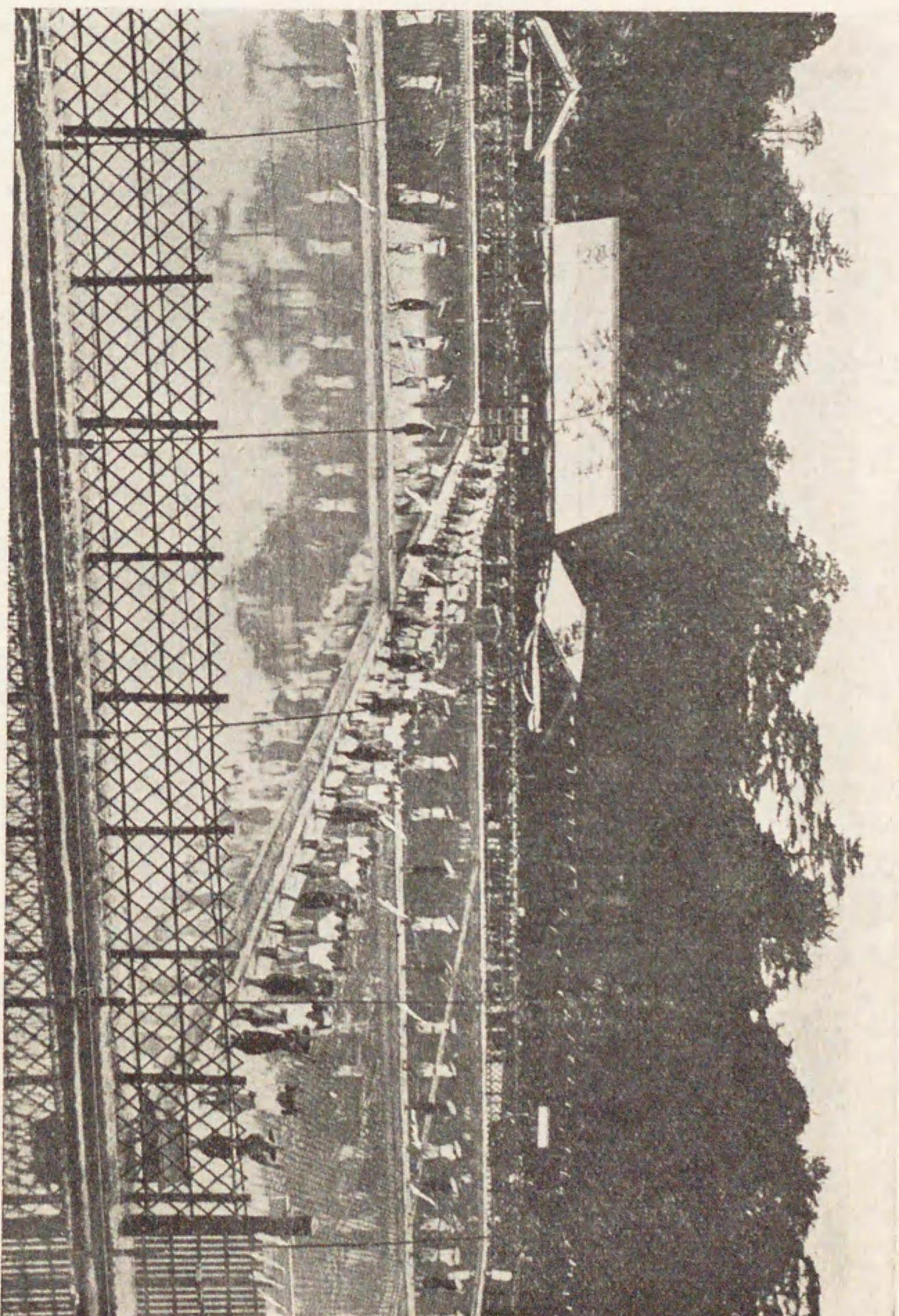
1111



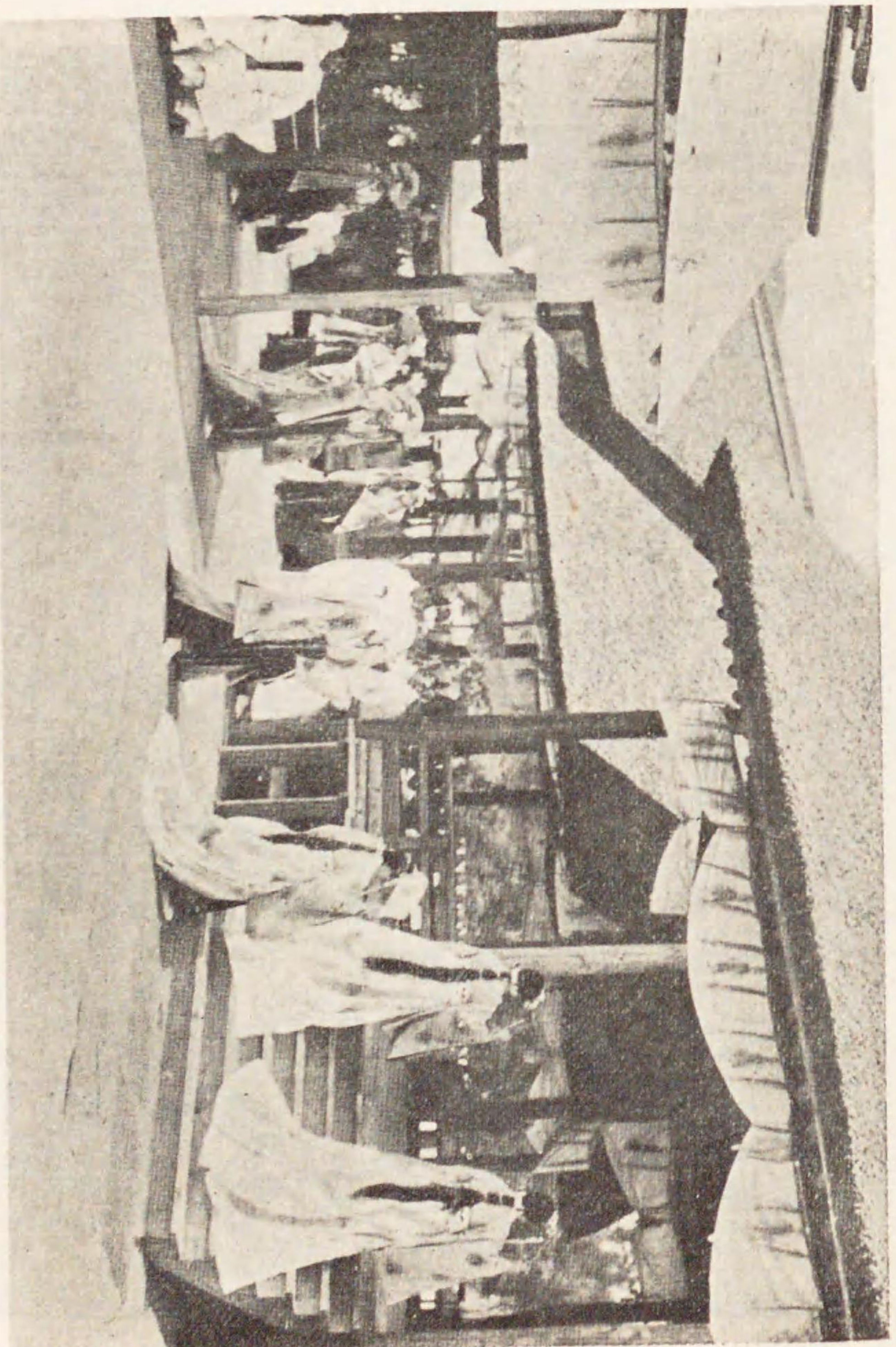
第三圖 昭和三年悠紀の國齋田



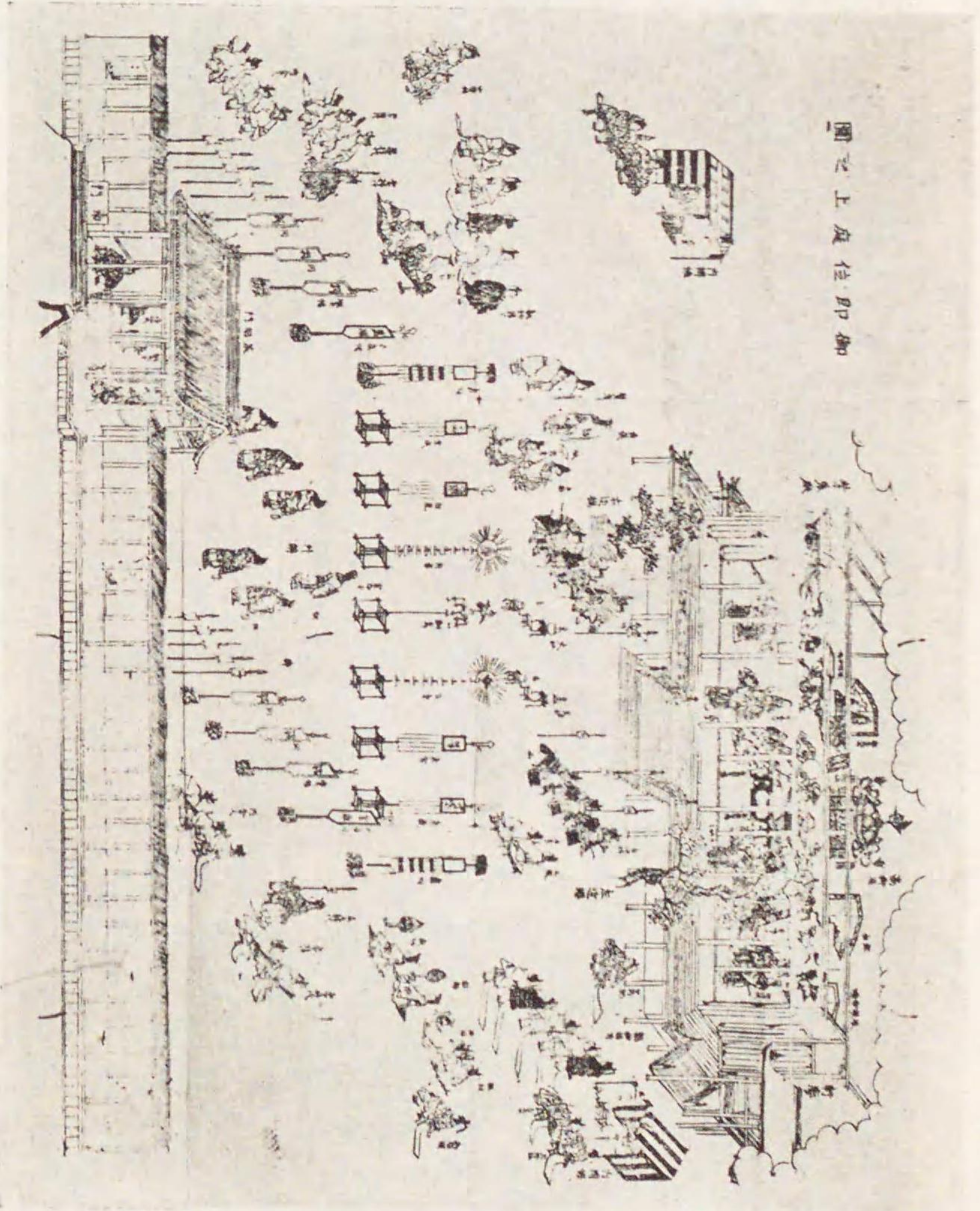
第四圖 昭和三年主基の國齋田



第五圖 悠紀齋田御田植式御田植跡

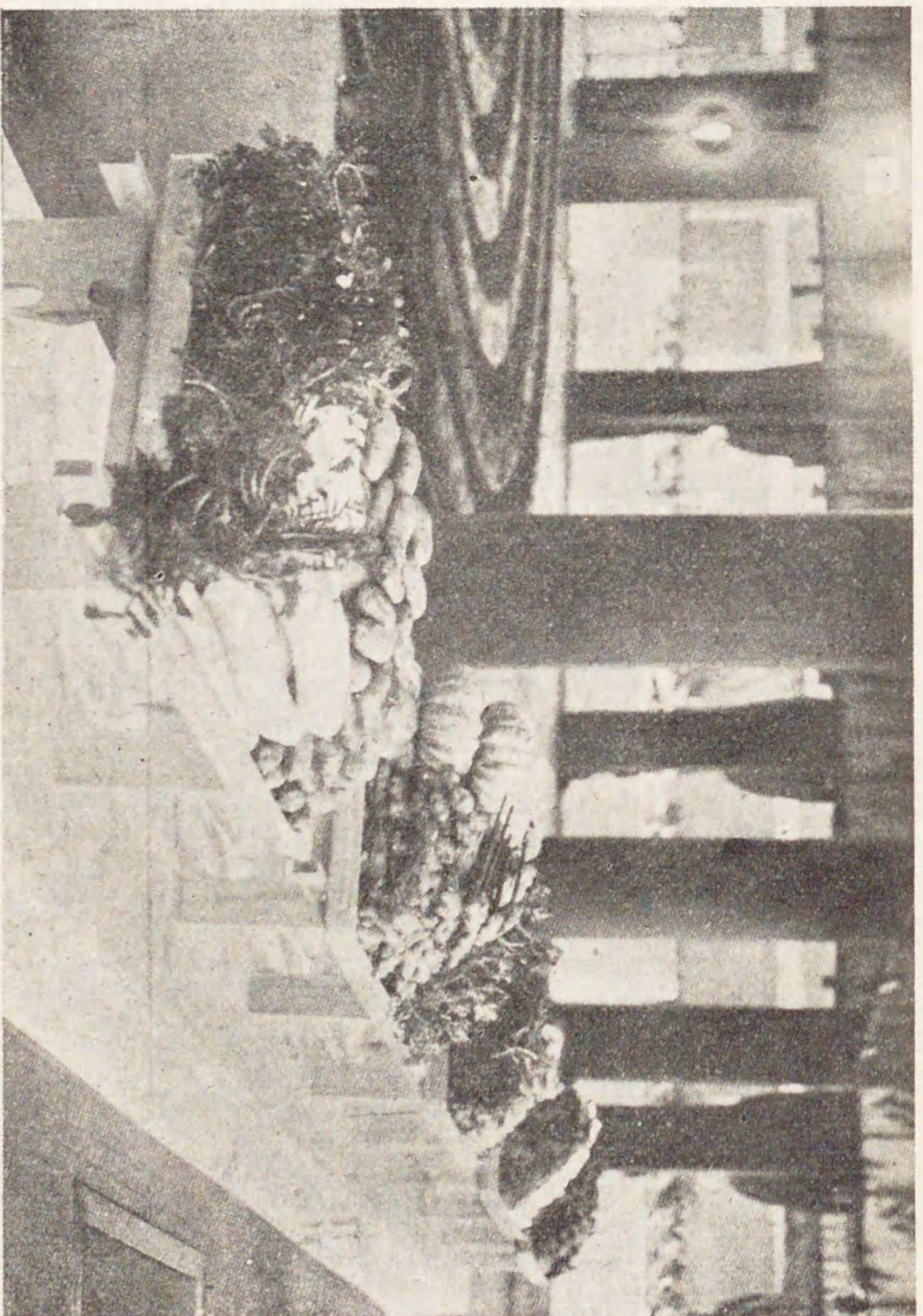


第六圖 主基齋田八少女舞

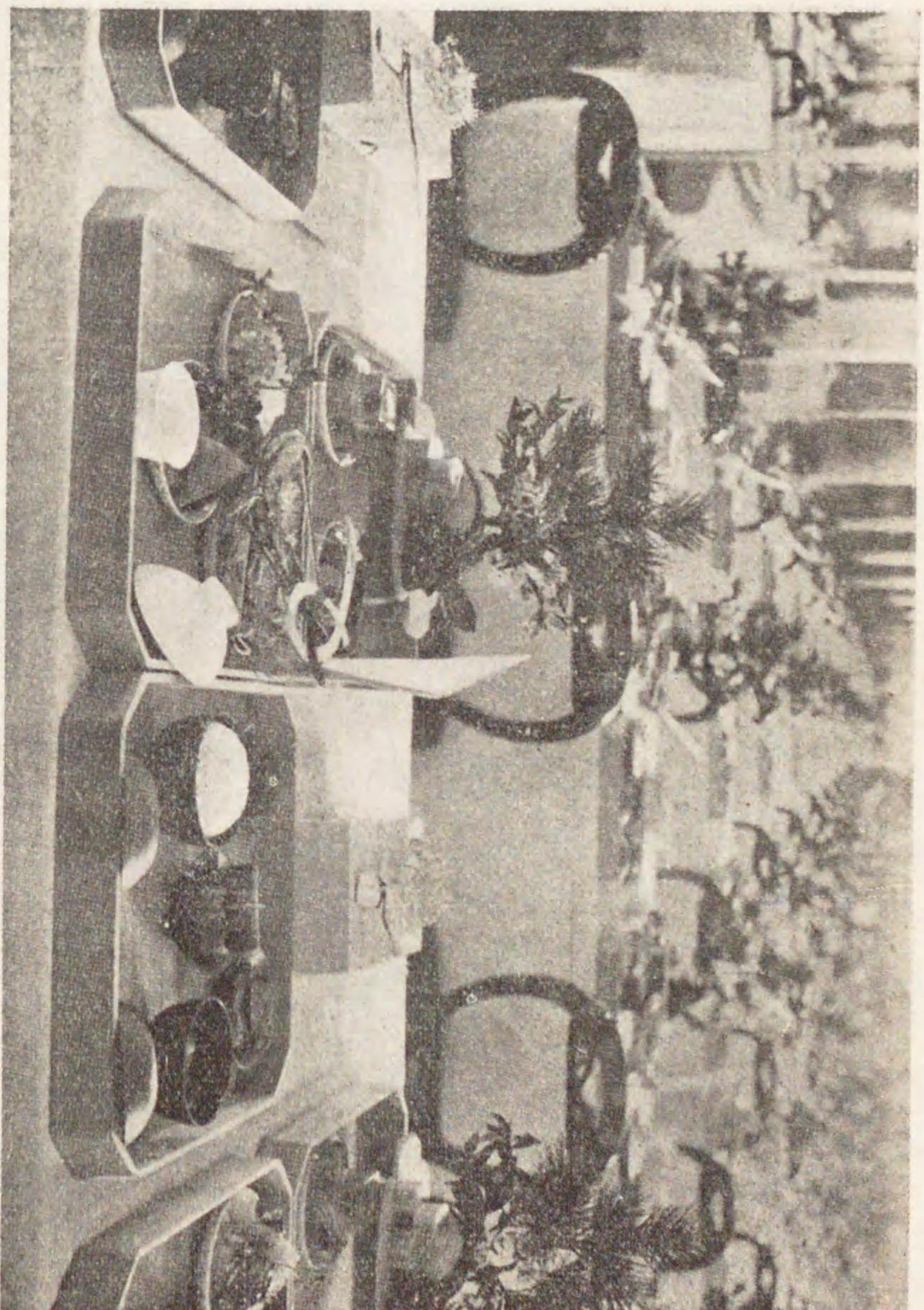


圖七上及佳即御

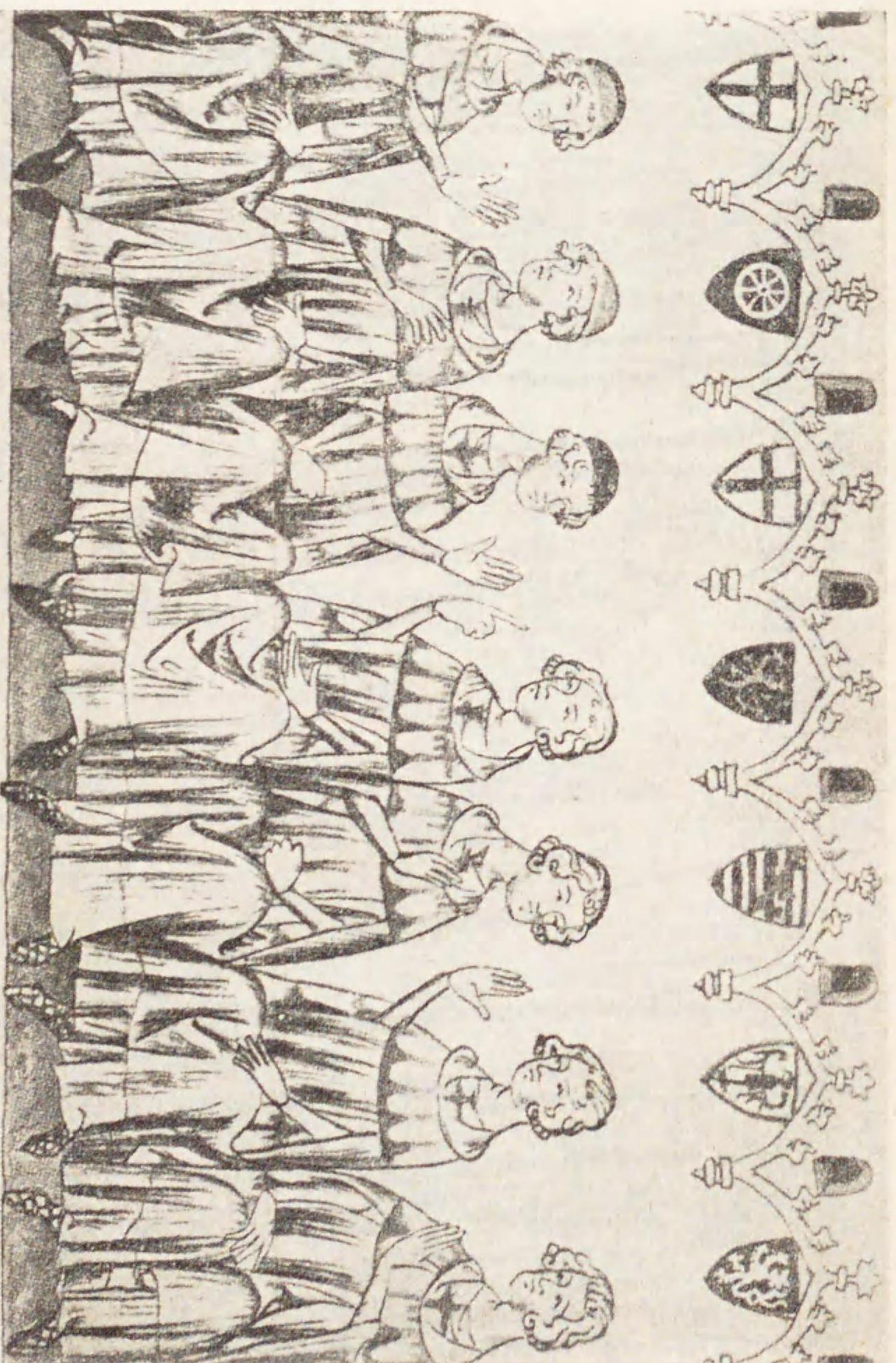
第七圖 御即位式 (百五十年前)



第八圖 獻物



第九圖 大嘗祭後臣下饗膳



第十圖 一三〇八年ハイトリック七世三人の俗籍貴族と四人の俗籍貴族により獨逸王に選舉さる



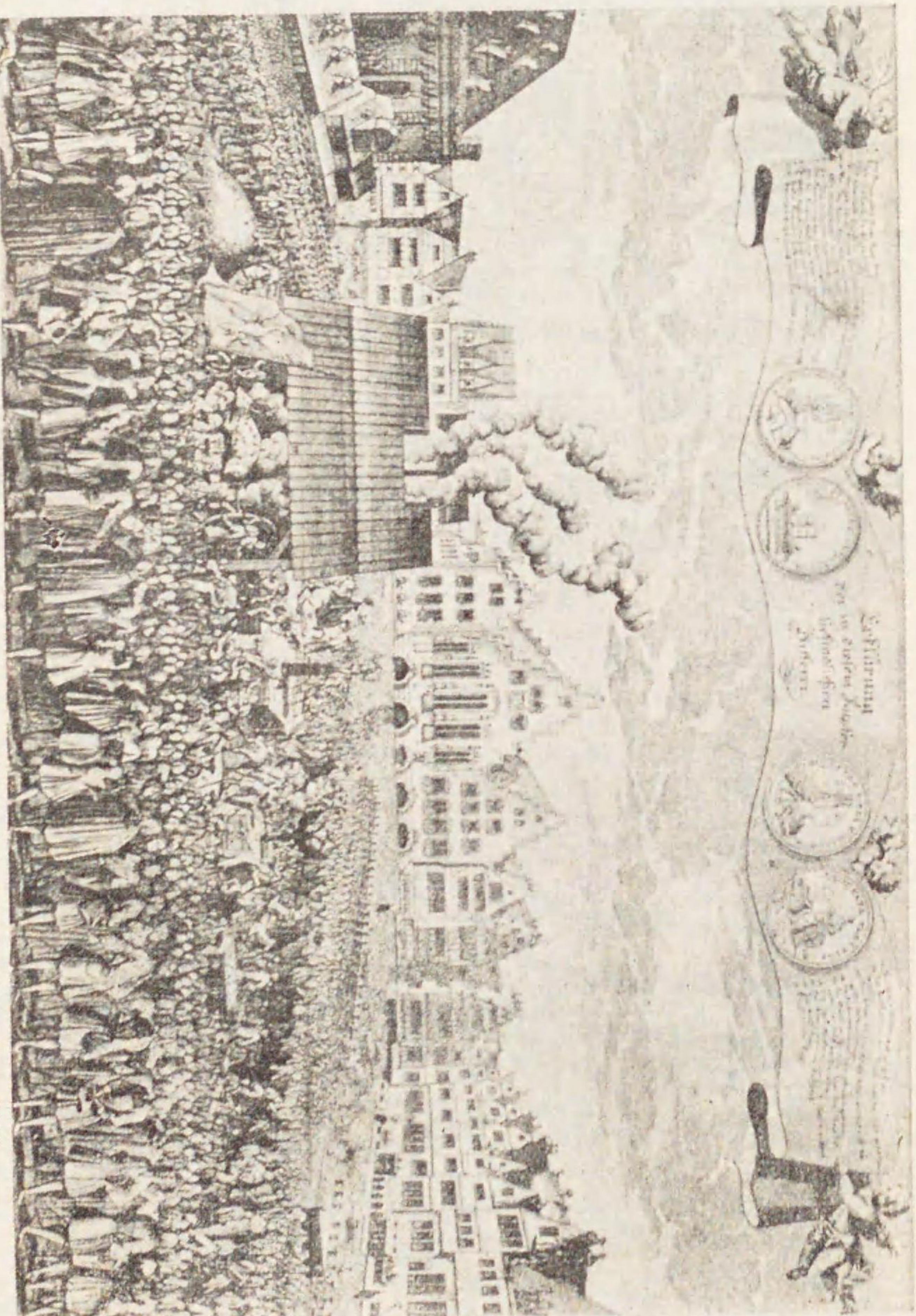
第十一圖 一三〇八年選舉されたる獨逸王ハインリッヒ七世二人の僧籍貴族により神壇につかしめらる



第十二圖 一三〇九年ハインリッヒ七世アーンヘンに於て獨逸王の王冠を戴く



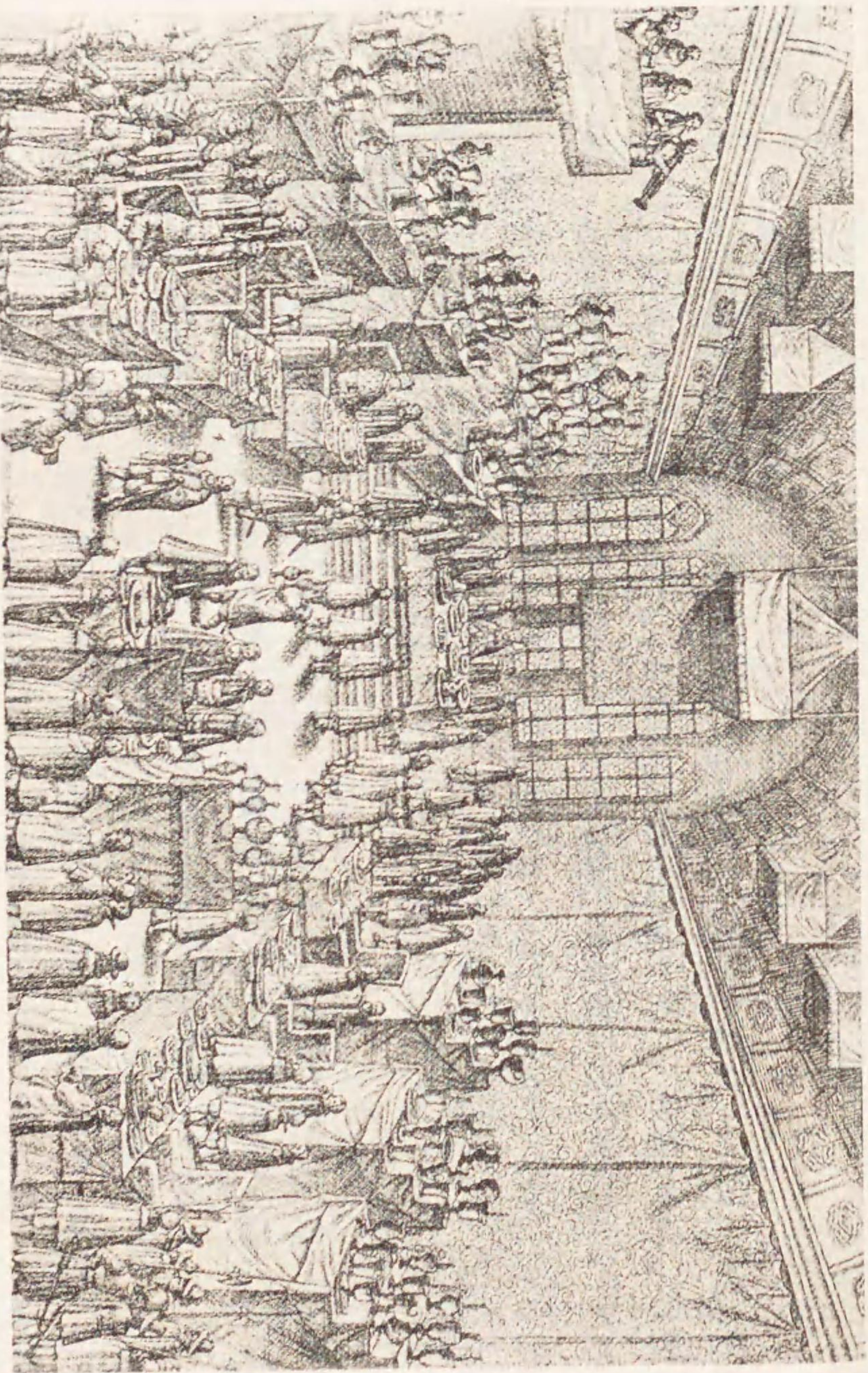
第十三圖 一三〇二年ハインリッヒ七世三人の大僧正によりローマ皇帝の皇冠を戴く



第十四圖 一七四二年カール七世の戴冠式に於ける祝典及び人民の歡樂



第十五圖 一五六二年マキシミアン二世の戴冠式典に際し牛を炙る



第十六圖 一六一九年フランクフルト・アム・マインに於けるフェルチナンド二世の即位大饗(戴冠式饗宴)

十四世紀

皇紀一九六一—二〇六一 西曆一三〇一—一四〇〇

一 北條氏は次いで貞時執權となり、第九十四代後二條天皇の時師時執權となる。次の第九十七代花園天皇の時、北條實時が金澤文庫を作つた。當時戦亂多く文化の見るべきものなかつた時、彼はよく學問の興隆に盡した。

二 次の執權高時は暗愚にして人望を失つた。時に京都に於ては第九十三代後醍醐天皇（皇紀一九七九—一九九八、西曆一三一九—一三三八）即位せられ、天皇は稀に見る賢君で、この機に乘じ幕府を討滅し、聖徳太子の御聖徳に則り、天皇親政の御代に還さんと謀られ、日野資朝、俊基等と事を起さんとしたが事未然に現れ、兩人は處罪された。然し、やがて楠正成出で兵を起して天皇を助け、諸國の忠臣又天皇の召に應じて蹶起し、幾多の困難の中に遂に北條氏を滅ぼし、茲に天皇親政の時代を招來した。これを建武の中興と稱する。

一、頼朝が征夷大將軍に任せられ、鎌倉幕府が名實共に確立したのは建久三年で、皇紀一八五二年西曆

一一九二年である。それより二十九年目の承久三年、皇紀一八八一年、西曆一二二一年に第一次王政復古運動たる承久の亂があつたが、それは不成功に終つた。

承久の亂後百〇三年、鎌倉幕府の創立後百三十二年目の正中元年、皇紀一九八四年西曆一三二四年に第二次の王政復古運動があつたがこれも不成功に終つた。

それより九年の後、鎌倉幕府創立後百四十一年目の元弘三年、皇紀一九九三年西曆一三三三年に第三次王政復古の元弘の亂があり、目的は遂に達成された。

二百四十一年間の努力に依る王政復古の後僅か二年、再び武家政治に戻り、それより徳川幕府の倒潰、即ち皇紀二五三〇年西曆一八七〇年、慶應三年十月十四日大政天皇に奉還される迄には五百三十七年、鎌倉幕府の創立以來六百七十八年であつた。

三、後醍醐天皇は仁慈の御心深く、天下の饑饉を開召して「朕不徳あらば天朕一人を罪すべし黎民何の咎有てか此罪に遭ふ」と仰せられ、朝餉の供御を止められて飢人窮民に施された。

當時は一日二食の時代であつたから、一日食の半分を割かれたことになる。

四、元寇は北條氏の滅亡を早めたとも云へる。元寇に依り幕府の財政困難を來し、將士に賞金を與ふることも出來ず、財政困難を救ふために重税を課し、幕府の家人の急場を救ふために貸借關係を解消して良民を苦しめ、而も高時の如きは日夜遊樂に耽り、政治を怠り、奢侈を極めたので人心北條氏を離れ、後醍醐天皇の御英邁により滅亡せしめられた。

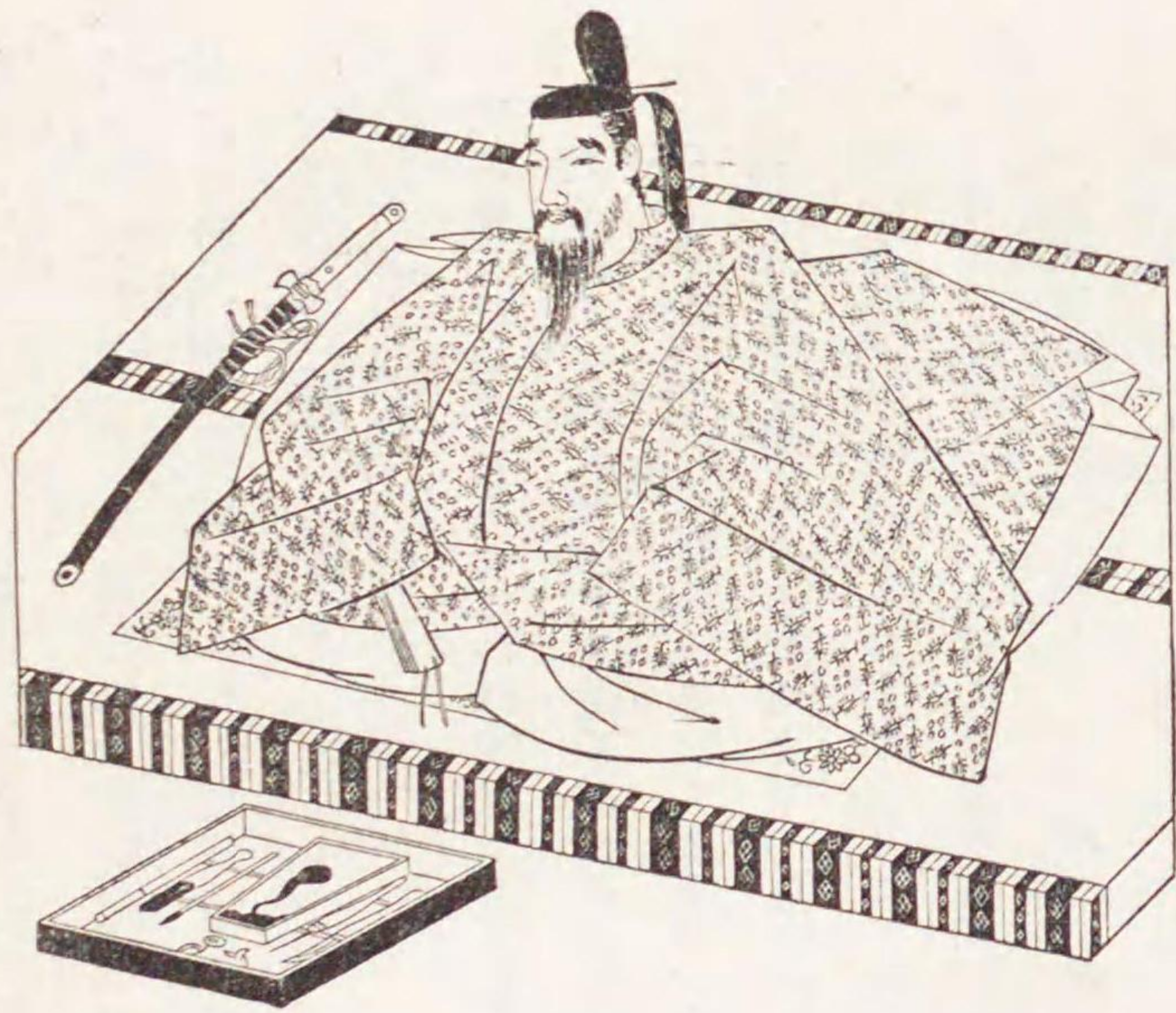


僧西行伊勢大廟を拜す

五、後醍醐天皇は天皇中心政治を行はれ、攝政關白を認めず、無論武家が政治をすると云ふことは認められなかつた。

三 建武中興は折角の大事業の完成であつたにも拘らず、實際政治に經驗なく時世の流れに就ての識見を持たぬ公卿達の執政と、それに對する武家の不満は、武家時代を再び思ふ者を生ぜしめ、第二期の武家政治時代が開始された。即ちかゝる風潮を看て忽ち足利尊氏が叛き、楠正成、正行、新田義貞、北畠親房、同顯家等の諸忠臣は之に對し戦つたが、正成は湊川で戦死し、義貞は藤島で戦死し、形勢非常に不利な中に、苦闘に終始せられた天皇は位を第九十七代後村上天皇に譲られ崩御された。

一、歌人として聞え又高僧として名高き僧の西行は全國



後醍醐天皇

を行脚中、伊勢皇大神宮を參詣、左の歌を詠んだ。
何ごとのをはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるる

二、伊勢皇大神宮、加茂神社は日本人以外の者の神域内に入ること許されず、又僧侶は如何に高僧と雖も參拜するところが出来ない。僧の西行も五十鈴川の手前から遙かに神宮を拜んだのである。其の禁が解かれ參拜の出来るやうになつたのは明治維新の後からである。

四 後村上天皇の時、北畠親房は神皇正統記を作つて天皇に奉り、忠孝の大道を世に示した。

五 尊氏の叛するや、後醍醐天皇は難を避けて吉野に行幸せられたが、それより

後村上、第九十八代長慶、第九十九代後龜山の諸天皇は神器を奉じて吉野に居られた。足利氏は之に對し別に皇統を奉じてゐた。

故に吉野の朝廷を南朝とし、足利氏に奉ぜられた朝廷を北朝とし、この諸忠臣と足利氏との争亂時代を南北朝時代とも云ひ、種々の軍記物語の悲劇的に取扱つてゐる所である。

一、北條氏は高時執權たるの時滅亡して、第九十六代後醍醐天皇の建武中興は成つたが、足利尊氏間もなく叛し、楠正成は之を兵庫に邀えて戦死した。正成の首が尊氏に依つて故郷河内に送られるや、子の正行は見て悲嘆抑えるにもなく、持佛堂に入つて自殺しやうとした。

二、「母急ぎ走り寄りて正行が小腕に取りつき、涙を流して申しけるは、故判官殿が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より返し留めしことは、全く跡を弔はんためにはあらず、腹を切れとて殘し置きしにあらず。我れたとへ運命盡きて戰場に命を失ふとも、君何處にも御座ありと承らば、死残りたらん一族若黨をも扶持し置き、今一度軍を起し御敵を滅して、君が御代にも立て參らせよと云ひ置きし處なり。その遺言具さに聞きて、我れにも語りし者が、いつのほどに忘れけるぞや。かくては父が名を失ひ果て、君の御用に合ひまゐらせんことあるべしとも覺えずと泣く／＼諫め留めて、拔きたる刀を奪ひとれば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣き倒れ母と共にぞ歎きける。」(太平記)

三、その後正行は父の遺言と母の教訓とを肝に銘じて忘れず、天晴れ大忠臣となつたのである。

五

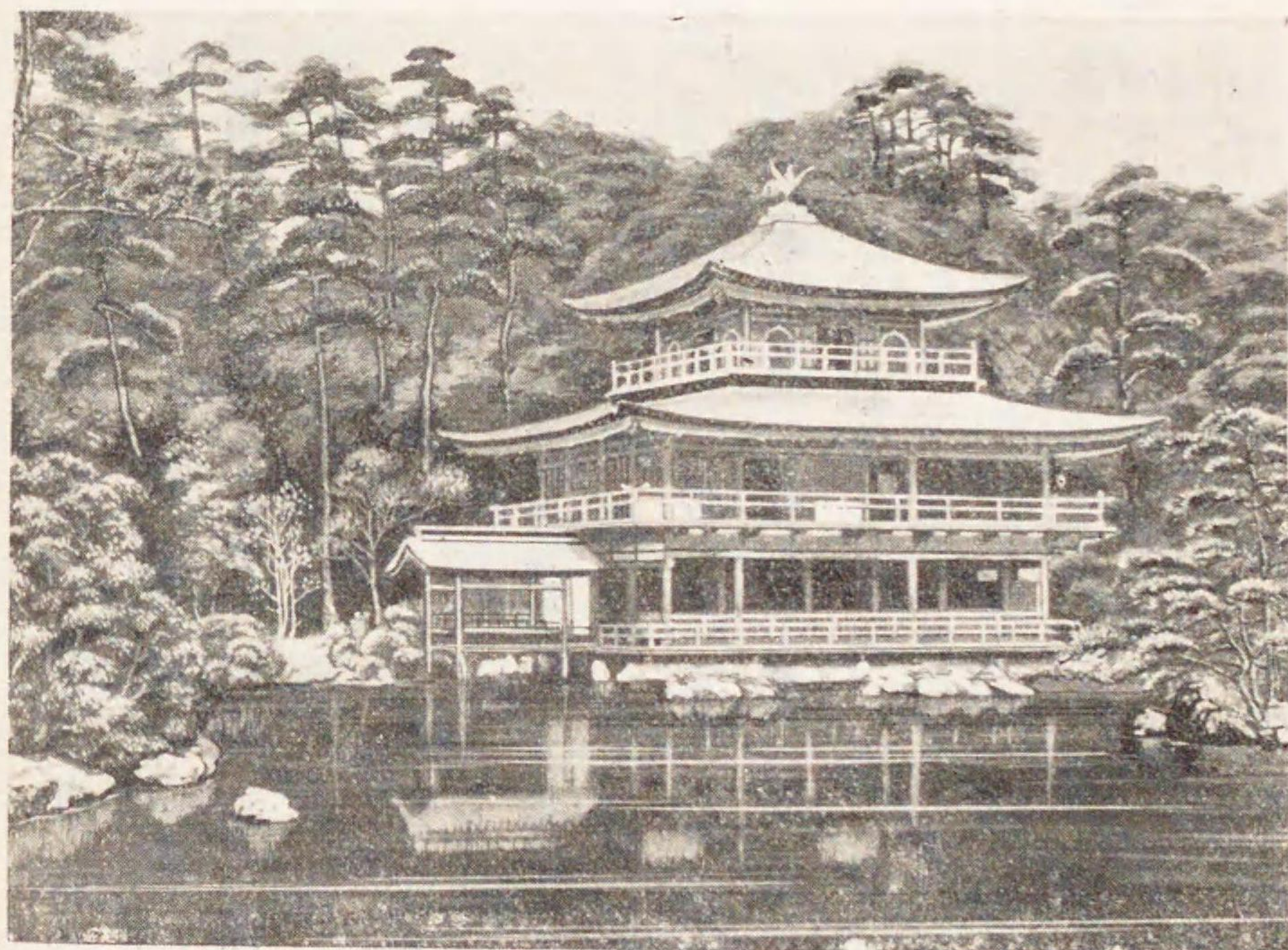
この間に尊氏は病死し、次いでその子義詮も死し、義滿が繼いだ。義滿は大内義弘を吉野に遣し、後龜山天皇の還幸を請はしめたので天皇は之を許し、京都に還幸し、神器を第百代後小松天皇に傳へられ、茲に南北朝對立は解消し、足利義滿は征夷大將軍として室町幕府を京都に開いた。

後醍醐天皇の建武の中興より南北兩朝の合一まで、約六十年間吉野朝廷は續いた。

- 一、後醍醐天皇の建武中興には輔佐の重臣缺乏し、復興精神に乏しく、公武軋轢し、舉國一致が出来なかつた。思ふに當時明治維新の如く外國關係がなく、單に國內關係のみであつたから、折角の復興は大をなさず、又繼續も出来なかつたのであらう。
- 二、吉野朝廷の方では紀州半島を経て外海に進出し、海運者と結び、内海、大洋に活躍した。吉野朝の物資は海より供給された。即ち吉野朝廷方は開國的であつた。
- 三、大内義弘は海上での勢力を握つてゐた。義滿が彼を使者として吉野に遣したのは海上の關係から適任者と見た故であらう。

六

室町幕府はその體制を鎌倉幕府に模し、中央に政所、問注所、侍所あり、政務を掌り、地方に守護、地頭を置いた。



金 閣 寺

七 義満は非常に驕奢で、彼の造つた金閣寺は、後に義政の建てた銀閣寺と共に有名である。彼は驕奢のため財政困難に陥るや、明と修交し、甚だ卑屈な態度をとつた。義満の後義持が將軍となつた。

- 一、この世紀の中頃に、支那では明の太祖兵を擧げて元を討ち天下を一統した。この頃から倭寇漸く支那、朝鮮の海邊を荒した。末頃には朝鮮では高麗が滅び、臣の李成柱代つて王となり國を朝鮮と號した。
- 二、西歐では一三〇二年佛國は初めて國會に庶民から代議士が出た。翌

年航海用磁針盤が發明された。法王クレメンス五世は居所をローマからアビニヨンに（一三〇九）移した。スイスがオーストリアより獨立して建國（一三一五）した。ダンテが（一三二〇）没した。歐洲北部に紙が（一三三〇）現れた。火藥、油繪の發明（一三三四）あり。英王エドワード三世が佛國に侵入し百年戰爭の戦端（一三三八）開かる。大砲の發明（一三四〇）あり。チャールズ四世ブラーグ大學を開いた（一三四八）。英國黒太子、佛兵を破りその國王ジョンを擒に（一三五六）した。ウイン大學起る（一三六六）。ポルトガル人（一三九二）初めて希望峰に達した。

十五世紀

皇紀二〇六一—二一六〇 西曆一四〇一—一五〇〇

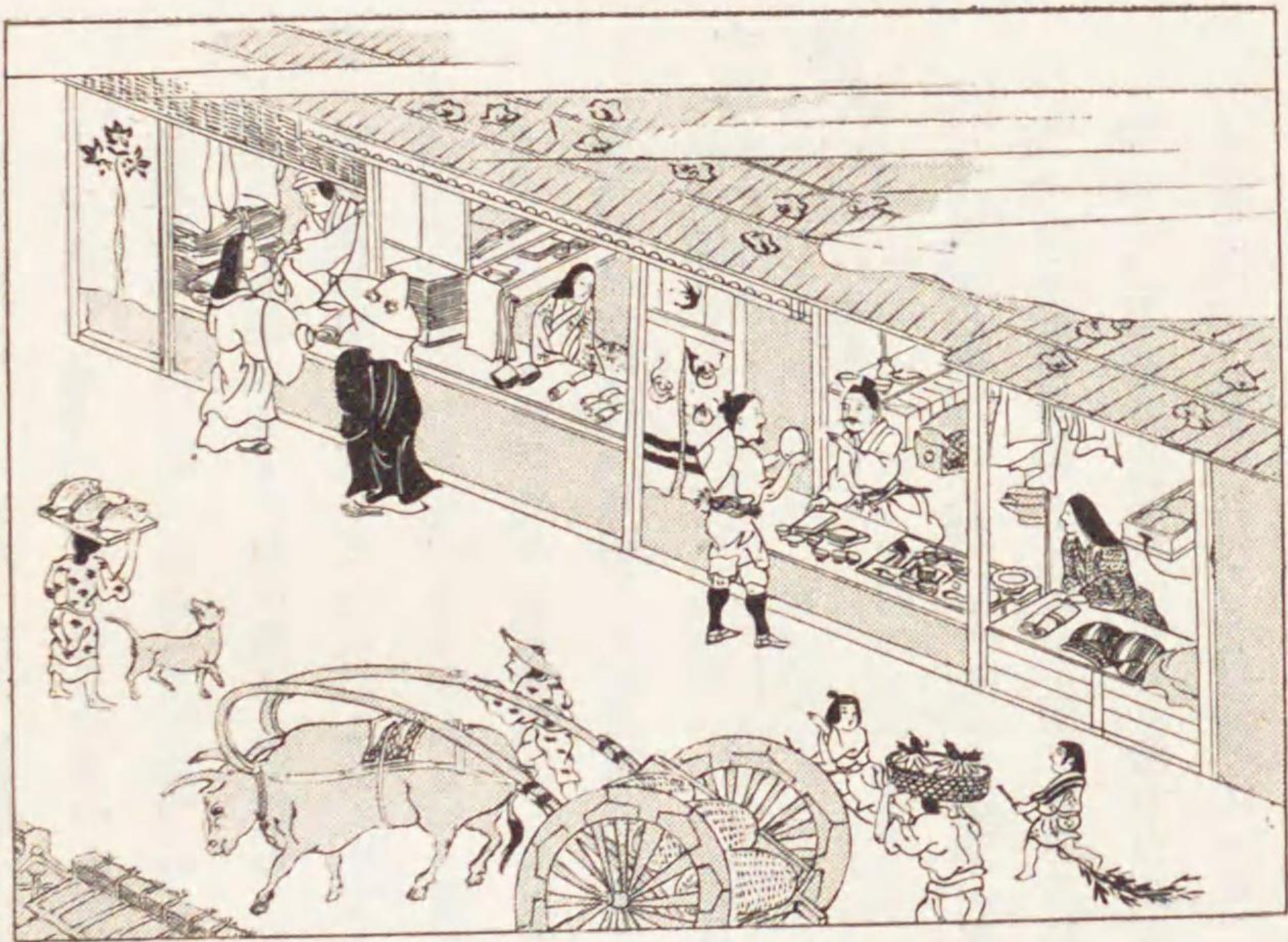
- 一 義持から義量、義教、義勝を経て將軍となつた義政は、時に天下よく治まらず、諸將相反き相戦ふので、之を鎮める氣力と勢力とがなく、専ら奢侈を事とし、義満に倣つて銀閣寺を建て、遊藝を事とした。ために茶湯、猿樂、香道の進歩、陶、漆、磁器の發達を促した。と同時に財政は困難となり、徳政と稱して借財を帳消しにする命令が屢々發せられた。
- 二 義政の時前後十一年に亘る應仁の亂が起り、山名氏と細川氏が勢力争ひをなしたが、兩軍



應仁の亂

の兵數二十萬を越え、このため京都は兵火に掛り名所舊跡多く失はれ、文獻も焼け、京都は荒涼たる焼野と變じ、朝廷の御衰微も甚だしく、公卿も地方の豪族を頼つて避難した。かくて義政から義尚、義植になるに及び、幕府ありと雖もその政令全く地方に及ばず、茲に地方豪族相争ひ、約百年の暗黒な戰國時代に入ることとなる。

- 一、應仁の亂は、當時大布政令に干與して色々なことをしてゐた義政の御台所が根本であると云はれて居る。
- 二、應仁の亂は日本の改造の大きな役目



足利時代の商店

を果した。應仁の亂以後百年間の戰亂は、日本全體の身代の入れ代はりをした。應仁の亂の爲めに足輕と云ふ階級が目立つようになり、下剋上が盛になつた。足輕即ち武士以下にある補卒が亂暴をするに就て非常に憤慨したことが舊記に書いてある。

三、今日多數の華族中、公卿華族を除いた他の大名華族の家は、大部分は此の應仁の亂以後に出來たものである。

九州では島津家は以前からあつた。肥後の細川も以前からあつたが、肥後の土地に前から居たのではない。其他秋月、鍋島などは九州土着の大名ではあるが應仁の亂以後に出たものである。

四、信州の諏訪家は昔からあつた。關東には古い

ものは先づ無いと云ふて良い。東北では伊達とか南部とか上杉、佐竹とか云ふ家は應仁の以前からあつたが、其の土地に土着して居つた者は極く少い。徳川時代二百六十藩もあつた多数の大名中、應仁の亂以前からのものはこの位である。

五、朝廷の衰微により公卿は離散して地方の豪族に寄食した。爲めに文化が地方に傳播した。又學僧も多く難を地方に避けたので、これ又地方の文化の發達を促した。

六、當時米は蒸したるものを常食とした。強飯の様なものである。味噌は早くより用ひられたが汁にせず、そのまま用ひられた。味噌汁にしたのは足利の末頃からである。

喫茶は鎌倉時代から始まり、足利以後盛になつた。

三 吉野朝の頃から始まり、足利義滿の頃一時中斷した倭寇は、その後戰國時代には又、支那朝鮮の沿岸を荒掠した。

一、日本人は由來海の人種である。太平洋の怒濤に取り巻かれた小さな島國、而も亞細亞へも南洋へも點々たる島を足場とし潮流に乗じて容易に渡航出来る地位にある日本人は海に親しむ人種であつた。倭寇とは日本人が支那、朝鮮の沿海を荒掠した時、支那人によつて呼ばれた名稱であるが、それはこの人種的特性を發揮した行爲であつた。

二、建武の中興が足利氏によつて、又元の幕府制度に還らうとした時、楠、新田等と志を同じくする一

聯の忠臣達は頑強に之に對抗した。然しそれは不成功に終り、彼等及び彼等の子孫の陸上での勢力は狭少となり、廣い海洋に出たのであつた。即ち勤王家は開國論者であつた。

三、そして支那の沿岸に於て正常なる取引を行はうとした。應じない場合には掠奪した。然しこの掠奪は、民家を焼き良民を殺戮する事はなかつた。況んやノルマンの侵寇の如く領土をさへ窺ふような野心的なものではなく、單なる經濟的の行爲であつた。

倭寇を以て元寇に對する日本人の復讐なりと見るのは全く正鵠を得ない説である。

日本人はそれ程強く長く復讐觀念を持続するよきな民族ではない。

無法に對しては強く之を膺懲するが、その後では直ちに平常の心理に立ち還る。

四、元寇に於て日本人は舉國的に之に對抗した。そして之を却けた。

然しその後では深く之を怨みに思つて居ない。

元の文化にしても、そこから採用すべき物があれば、日本人は直ちに採用したであらう。之も即ち「母の氣持」なのである。無法の子供に對しては一時は強く之を叱るが、その叱りは是正のためであつて、冷い感情の下に爲されるものではない。

「八幡大菩薩」と大書した旗を潮風に靡かせた倭寇が、支那沿岸住民に多大の脅威を與えたのは支那人が加入してからである。支那の海賊は倭寇の名を藉り自國の沿岸を荒し之は慘酷な振舞もあつた。

五、足利時代に中國の大内氏は印を與へて正常な取引の元締になつた。

取引を望む者は大内氏から印を貰ひ、之を持つて支那に出掛けた。それ故最早掠奪の必要はなくなつたのである。戦國時代の倭寇は多くは支那人海賊が自國、朝鮮の沿海を荒したものである。

六、金看板が日本の藥種屋に特有のもの、如く考へられるようになったのは、足利時代に於て日本の對支貿易の最も重要なものであつた藥種屋が、直接支那に渡り、支那風の金看板を用ひることになつたからである。支那では藥屋のみならず如何なる店でも金看板を下げて居る。

- 一、この世紀の間に、支那では明朝の下に特記すべきものはない。
- 二、西歐に於ては佛に銃砲(一四一四)發明され、ジアンダークの活躍がオルレアンの圍みを解いて佛を救ひ(一四二八)、印刷術の大發明あり(一四三三)、文化の急速な伸張の基礎を造り、ロシアが建國し、聖書を活字で印刷し(一四五〇)、東ローマ帝國がトルコに(一四五三)滅ぼされ、英國では薔薇戦争が(一四五五)起り、アラゴン、カスチラ合併してスペインが(一四七四)一統され、コロンブスのアメリカ發見(一四九八)等があつた。

十六世紀

皇紀二一六一—二二六〇 西曆一五〇一—一六〇〇

一 足利義植から義澄、義晴、義輝、義榮と室町將軍は續いたが、將軍と云つても名のみで、臣下が實權を握り、只近畿地方に勢力が及ぶのみであつた。



織田信長

この間、關東では北條早雲が出で勢力を占め、奥羽では、伊達、最上、南部の諸氏相争ひ、伊達正宗出で、最も勢あり、中部には上杉謙信と武田信玄とが長年相争ひ、静岡に今川義元、名古屋に織田信長あり。

近畿に淺井、淺倉氏あり。中國にては毛利元就あり。

四國の長曾我部は四國を大半平定し、九州では島津氏が制覇した。

一、日本に於て常に文化の中心になるのは帝室である。帝室では如何なる時代にも其の文化を失はずに保存せられた。

歌道、書道、音樂傳授の如き皆さうである。音樂は神樂道の如く日本で出來た音樂のみならず、支那から傳來したのも保存せられた。

皇室が非常に困窮して居られる時でも、代々で御傳授になつて決して失はれなかつた。

二、歌道の傳授は應仁、文明の戦亂に依つて殆んど絶えんとしたが、後土御門天皇は其の詞藻を傳へて居た關東の武士東常縁を京都に召されて歌道を再興せしめられた。

歌は二條家とか冷泉家と云ふ所から傳授を受けなければ詠めないことになつた。

其の當時、音樂の中で笙の秘曲を傳へて居つた豊原統秋の書いた體源抄には「戦亂の中に其の父と叡山に避難して傳授を受けたが、將來まで傳を失つては不幸になるからとて此の書を書いた」といふ旨を述べてある。

皇室を中心として公卿や、諸職の人々が、懸命に暗黒時代にも保存してゐたのである。

二

かくて大小の群雄が相互に争ひ一盛一衰してゐたが、名古屋の織田信長は今川氏を破り、京都に出で、足利最後の將軍義昭を奉じて近畿を平定し、御所を修理し、勤王の實を擧げ聲望高くなつた。將軍義昭之を嫉視して討たんとし、却つて信長の爲めに追はれ、足利幕府は滅びた。

一、戦國時代、諸將は何れも城を構へて相角逐したが、日本の城廓は外國のそれと異り、天險の地を相

して建てられ城の外に柵或ひは濠を廻らして護りとする外に、都市或ひは部落全部を圍ふような事をしない。それは必らずしも城主がその領内の民を保護しないからではなくて、領主が全責任を帯び戦争に破れば城主とその家臣が死し、領民は勝者により何の苦痛も負はされないからである。

二、戦争は戦ふ者相互間の事柄で、一般の人民はその田畑が戰場とされた場合に荒される外は、何の痛痒を感じる必要もない。戦争は多くは田畑の收穫後に行はれた。自領の領主が敗戦したからとて彼等が捕虜になつたり、又は拉し去られて苦役に使驅される事はない。

勝敗の結果は領主が全責任を帯びる事が習慣であるからである。

これは日本人の責任觀念の強烈なると、犠牲をして可及的小ならしめんとする優しき性質の結果である。日本人は闘争に於て勇敢ではある。然しその勇敢さは總てを虐殺するが如き残酷なものではない。結果がつけば、それで満足して引き下り、時としては敵の關係者を助ける。これは武士道精神として主要なものである。

三、日本には他國で見るやうな階級戦争がなかつた。

源平の戦、其他の戦争は何れも主腦者間の戦争で、階級戦争ではなかつた。

日本人には對立思想が少ない。然し競争心は激烈である。日本人の競争心は崇祖、子孫愛より發せる協力的の競争心である。

戰場に相對峙する時には對抗熱が極めて猛烈になるが、一度捕虜にするや其の捕虜に對しては全く

敵對觀念がなく、將來の協力者として、これに對するのみである。

三 信長は尾張の一小城主であつたが、大志よく全國一統を企て、京都に上り、朝廷に對し忠節を致し、四方を平定し統一事業が着々と奏效して居たが、不幸にして家臣明智光秀の謀反のため、京都の本能寺に於て死し挫折した。然し乍ら豊臣秀吉によりその遺志は繼承され遂に天下は一統されるに到つた。近世の日本に於ける信長の果した役割は高く評價されなければならぬ。

一、織田信長の父信秀は夙に勤王の志篤く、戰國時代で衰微した朝廷に屢々献金して御感を蒙つたことがあり、朝廷では信秀に朝廷の御領地恢復のことを委ねられたが、當時信秀は小臣故他日に巨大を期して勅命を拜すべきことを奏上した。

其の奏上を實現することが出来ずして死んだ父信秀の意志を信長が相續し、信長未だ小臣なれども豊臣秀吉等を同伴し、東武士の京見物者として京都に上り、朝廷に獻金致し、尙ほ御意を承り父の遺志を繼がんことを固く決意し、道を變へ、變装して歸國し、天下を統一して皇室の安泰を圖らんと努めた。

二、信長の成功は、根據地の位置が活動上便利であつたと云ふ外に、信長が人となり精力絶倫で獨創的の智略を持ち、卒先して兵制上の革新を爲し、鐵砲隊を組織し、長い槍を奨励し、近世的の大城廓

を建設し、鐵板の軍艦も造つて群雄に先んじたからである。

三、信長は皇室中心を標榜して人心の統一を圖り、人民の最も苦痛とせる關所交通税を廢止し、河川橋梁を修繕して交通の便を圖り、土地制度の統一及び貨幣の統一を圖り、都市の保護、臣民の保護を

圖り、宗教的武力を殺ぎ。人材登用には能率主義を採り、極端とも云ふべき信賞必罰主義を採つて練磨訓育し、茶の湯、馬揃へ、鷹狩り等を奨励して眞正武藝を訓練した。

四 戰國時代の末に漂流したポルトガル人により鐵砲が初めて日本に渡來し、戰術、築城法を一變させた。

當時ポルトガル人及び續いて來たスペイン人を南蕃人と總稱して交易を營んだ。



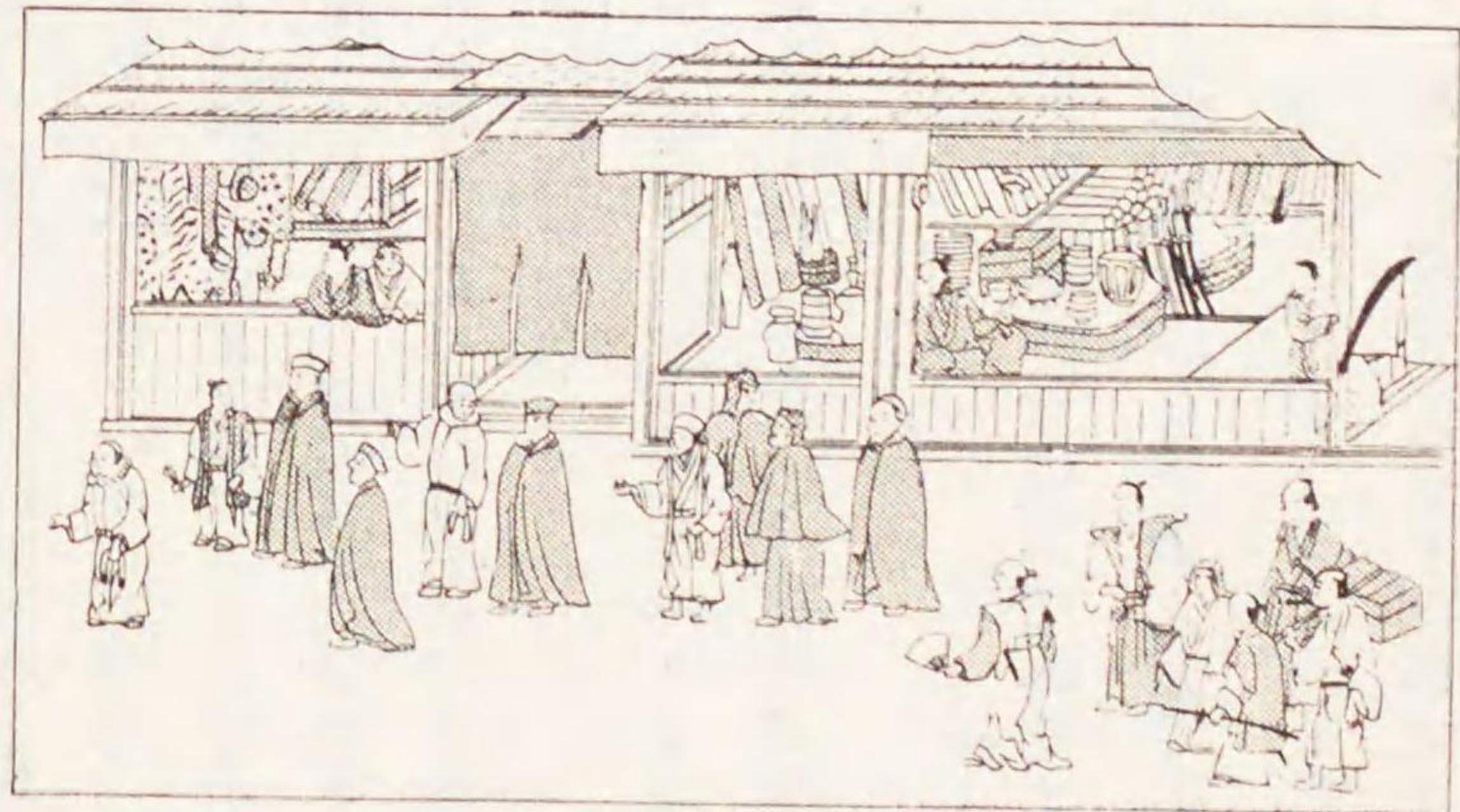
フランシス・ザビエル

信長の時代、英船も來り九州で交易を初めた。

五 天文十八年（西曆二二〇九年）フランシス・ザビエルが鹿兒島に來り初めてキリスト教を齎らして以來多くの宣教師が來り熱心に傳導したので九州、中國に漸次擴まつたが、信長



南 蕃 人

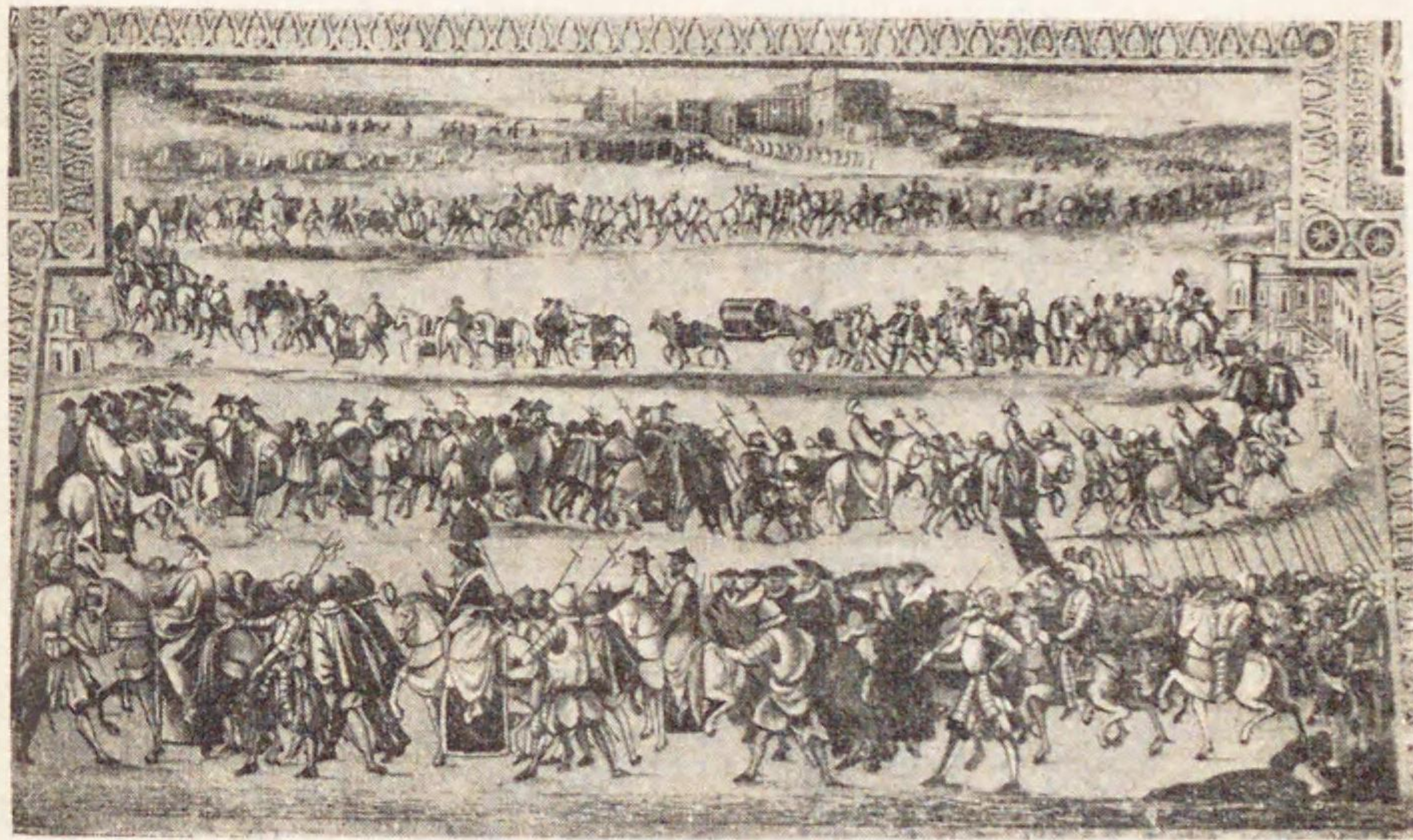


南 蕃 人 と の 交 易

はこれを許し、己れの城の近傍にキリスト教徒を置いた。
かくて基督教は九州を中心として忽ち勢力を得た。九州の大名、大友、大村、有馬の三家は何れも熱心な信者となり。天正十年には伊藤義賢を使節として羅馬法王の許に遣したが、これ日本人の最初の渡歐である。

一、日本のお母さんは永遠の生命を信するのであるが、其の永遠の生命はキリスト教の云ふ神の國でもなく、佛教の云ふ極樂と云ふ特定の場所でもない。子孫の生命生活の中に求めて居るのである。日本にキリスト教の來たのは皇紀二二〇九年西曆一五四九年であつた。若き日本の一娘が熱心なる信仰者となり、洗禮を授けられんとする時に、娘は宣教師に對して洗禮を受けた後の特權を尋ねた、宣教師の死後天國に行けるとの答へに對して、其天國には自分の母も父親も行けるかと重ねて尋ねた。お前の親は異端者であるから行くことが出来ない。お前一人だけ行けるのだと云はれた其の娘は、親の行けない處に自分一人行くと云ふならば洗禮を受けることは少し考へさせて呉れと云ふ。宣教師は大いに興味を持ち、支那に對してよりも大なる希望を持つて熱心に日本に宣教したと云ふことは有名な話である。

日本のお母さんの求むる永遠の生命が子孫の生命生活にあることがこれにて窺ひ知ることが出来る。
二、お母さんの創つた國たる日本の宗教は、お母さんの心が出發點になつて居る。



日本使節の羅馬入

日本は一神教でなく汎神教であつて、そうして其の汎神教が他の人種に見る汎神教と其の趣を異にして居る。

日本の宗教は祖先崇拜が基礎になつて居る。祖先崇拜は子孫崇拜であるのだ。この生命も、この生活も、祖先から受けたものであるから、それを少しでも良くして子孫に良き生命と良き生活を與へることを使命とされてある。其の使命を果す爲めに人の模範になる様な立派な働きをした人を神として祀られてあるのだ。

三、お母さんの心からは祖先が神である。子孫が神になるものとされてある。従つて人が神である。民衆が神である。子孫の住むこの世をより良くすることに犠牲的の働きをした人は皆神とされるのであつて、日本の神は總て人間として此世に生活した人である。

佛教の傳來と共に自然を神とする念も入つた。例へば山の神、川の神と云ふ様なことが起つたにしても、單に山そのもの、川そのものに對するのではなく、山を拓いた人、川を治めた人と共に祀つてあるので、自然と人とを合體したのである。

四、支那では明の裔の利瑪竇（マテオ、リッチ）と云ふ者が西洋から歸つて天主教を擴めた。

其の當時、西洋から來た艾儒略と云ふ宣教師が支那で西洋の學問全體に關する西學凡と云ふ冊子を書いて支那人に見せた。それは文科、理科、醫科、法科、教科、道科等に分かたれてある。

日本では西洋の本を自分で翻譯したが、支那は自分で翻譯せず、外人を金で雇つて翻譯させた。

七

信長が明智光秀に殺された時、信長の家來豊臣秀吉は恰度中國の毛利氏を攻めてゐたが、この報に接し毛利氏と和を結び、急ぎ引返して明智を山崎の戦に破り主君の仇を報じ、それより全國を平定した。こゝに百年の暗黒は漸く閉



フランシス・ザビエルの墓

ち民心は安定した。



豊臣秀吉

天正十五年十月北野松原で八百餘の茶室を設け、公卿諸侯を初め町人百姓更に外國人までも茶の湯に熱心なるものゝ來會者を招んでその楽しみを共にした。

八 秀吉は至つて勤王の志厚く、初め築いた大阪城(現存)の外に聚樂第を造營し、第七代後陽成天皇の行幸を仰ぎ、皇居を修理し、御料地を定め、公卿に對しても大いにその生活を安定せしめた。かくして平和の持續は桃山時代と稱する文物隆盛期を出現せしめたが、この時代の文物は秀吉の豪壯濶達なる氣象を表現して壯麗であり、足利時代の隱遁的な暗鬱なものではなかつた。

一、豊臣秀吉は軍事上政治上、非凡な見識を有し、性格は雄壯豪華であつた。

天正十六年七月全國に刀狩の發令をなし、百姓の武器を沒收した。

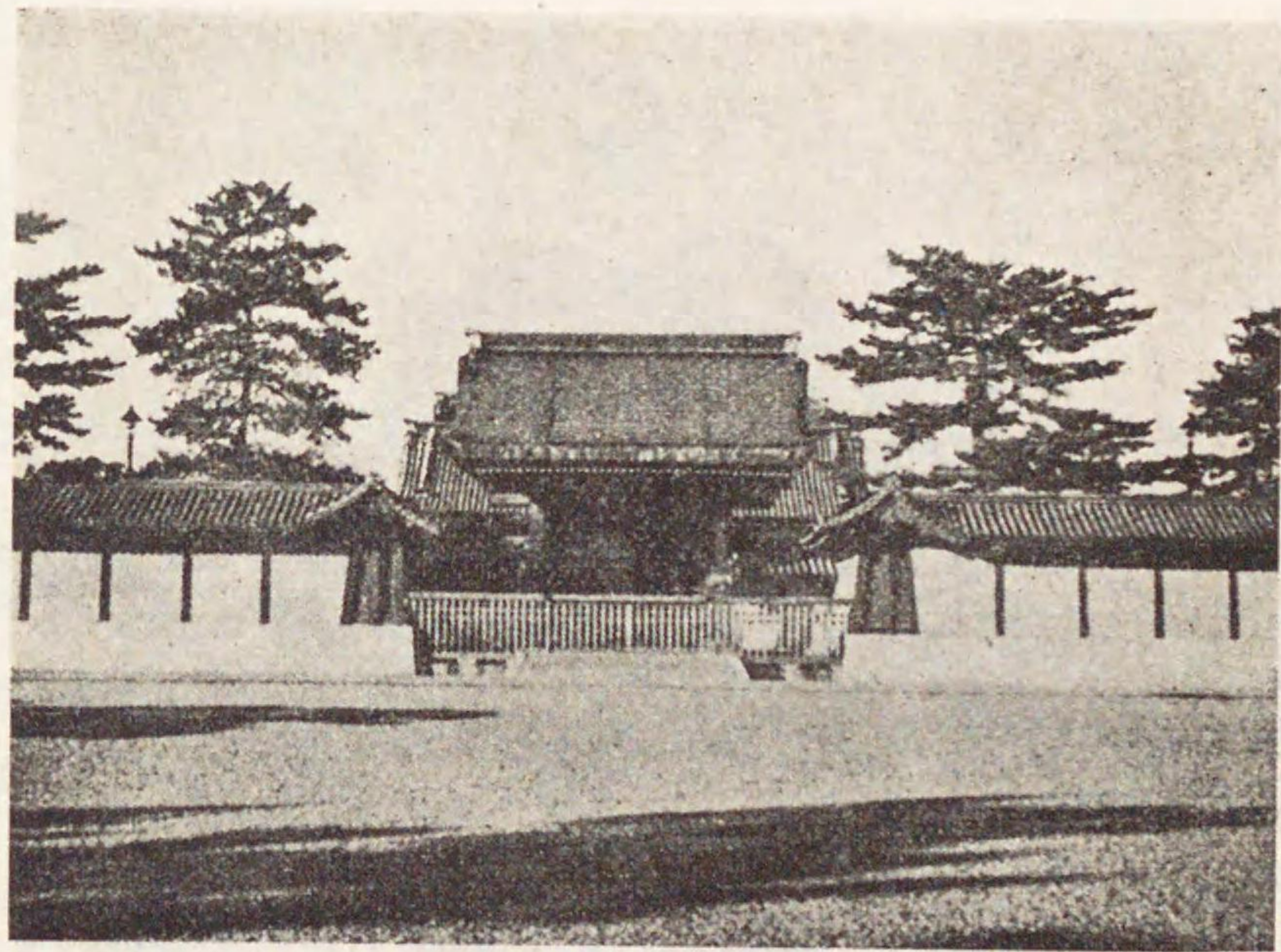
天正十七年聚樂第に後陽成天皇を御迎ひ申上げ大饗應會を開き金銀三十五萬五千兩を積み上げ之れを公卿一族諸將に分配した。

九 秀吉は基督教を禁じた。初めは放任の方針を採つてゐたが、信徒中に社寺を焼く者なども現れ、又基督教を利用して領土的野心を仄かす宣教師も出でたので、天正十五年西曆一五八七年遂に禁止の命令を發した。

一、天正十九年に印度のポーチユガルの副



大阪城



京都御所

王から基督教の布教の許可を請求して来た書面に答へた秀吉の書簡の中に、「日本は神國である。この神は印度にあつては之を呼んで佛法となす。支那にあつては之を以て儒道となす、日本にあつては之を神道と云ふ。日本は神國なる故基督教の布教は許されぬ」旨記されてある。

一〇 秀吉は天下を統一しても幕府は開かず、大阪城にあり、五大老、五奉行を置いて政務を見た。

當時長い戦亂の結果、産業は荒廢したが、秀吉は大いに之を興し、民力の充實に意を注いだ。

彼は又戦國時代、諸侯により錢が

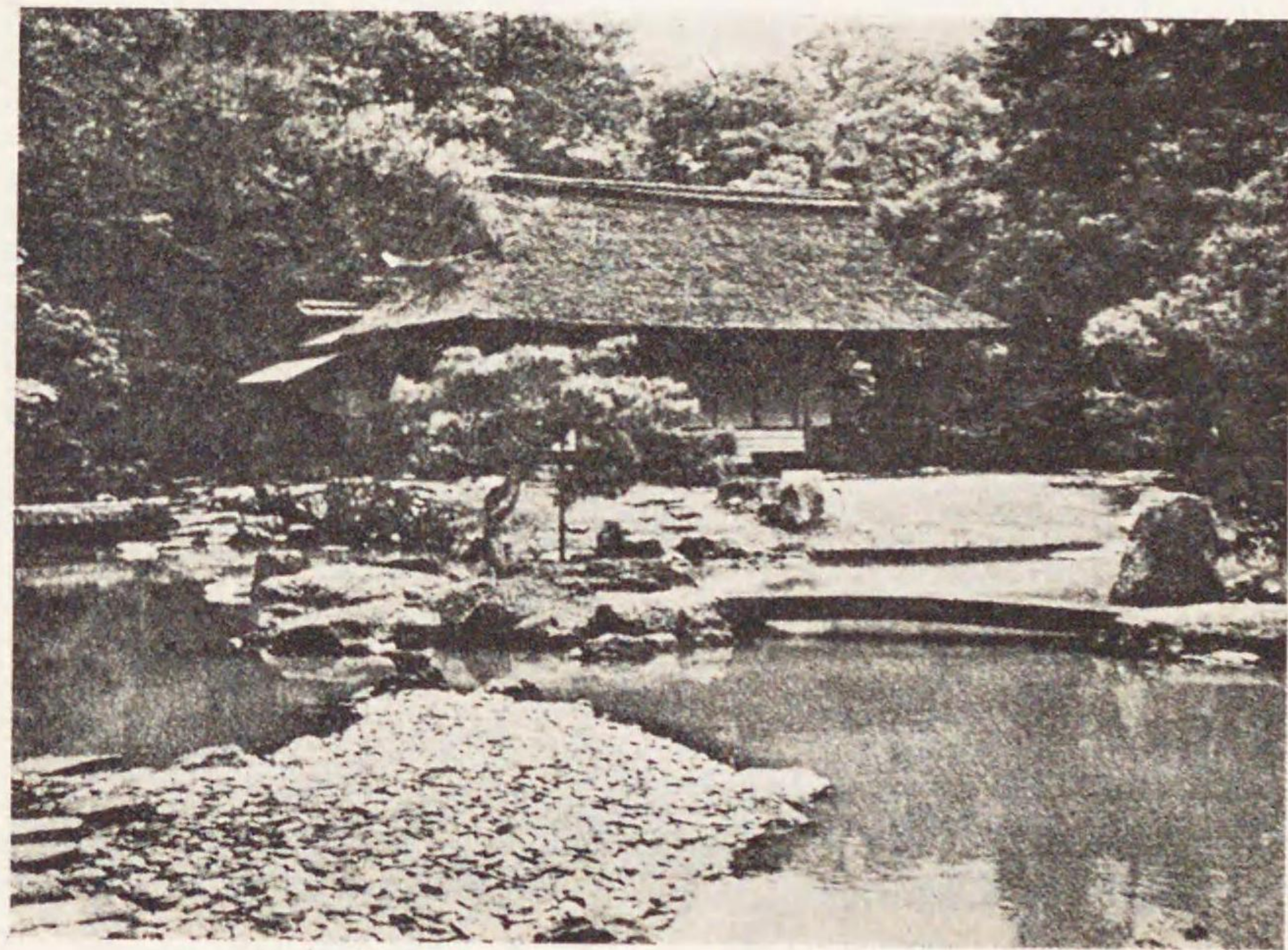
鑄造され流通貨幣が混雜したのを統一するため、大判、小判の金錢やその他の銀錢銅錢を鑄造した。この通貨は良質なるを以て後世珍重された。

一、女は弱し、母は強し、と云はれてゐる。母ほど強い者は此の世には無い。種の保存、種の發展の大責任を持つて居る母の強いのは當然であらう。母の強いのは、單に人類に於てのみ見る現象ではなく、動物に於てもそれを知ることが出来る。母は妊娠すると、健康に、舉動に細心の注意を拂ひ、慾望を犠牲にし、自制し、克己して行くが、その勇氣は誰も認めるところである。

二、人の妻となることは母となることであるから、人の妻となつた日本の婦人が神社佛閣に參詣するのは、良い子供を授からん事を願ふためである。又夫が酒呑みでもあれば、その酒呑みを直さんことを祈る。これも子供を愛すればこそである。家庭繁榮の願ひに神詣するも皆子供のためである。

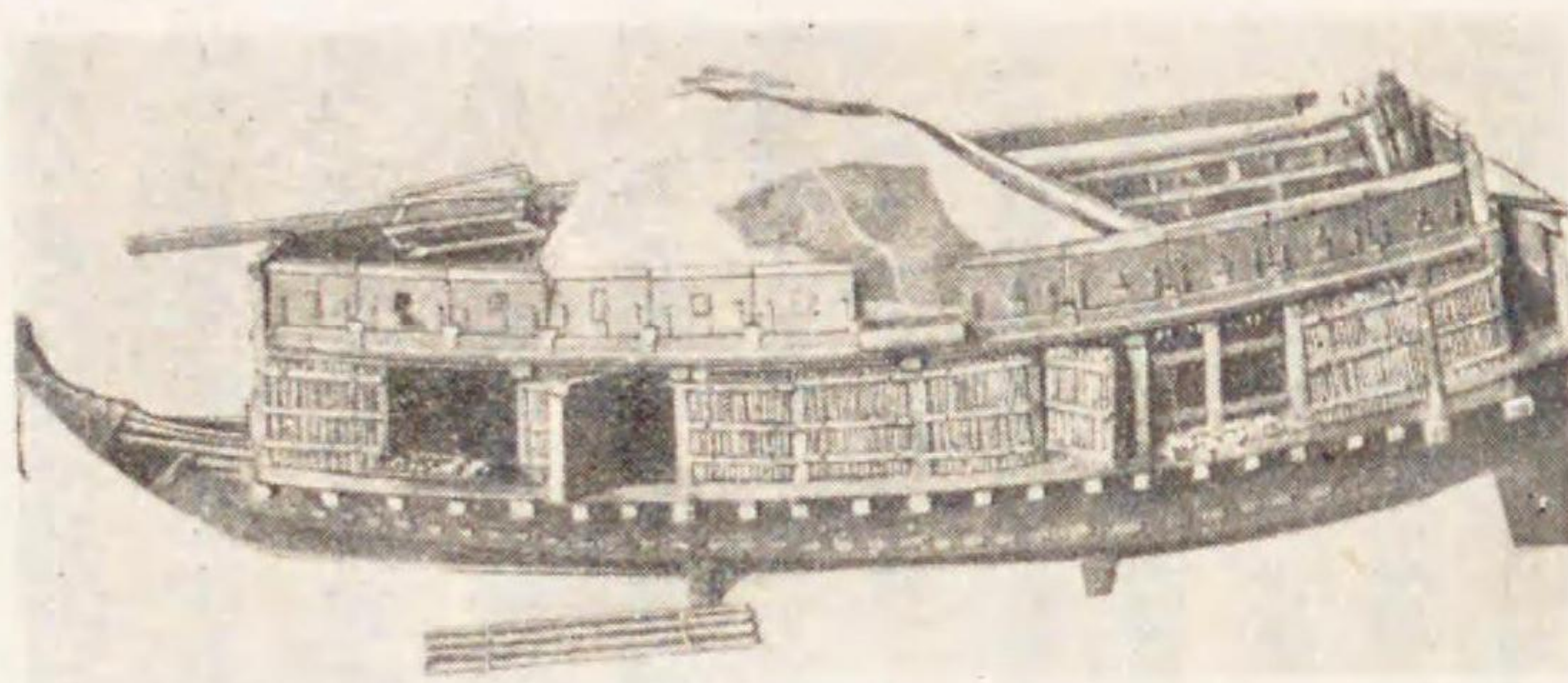
三、日本の母は子供のために總てを捧げて居る。子供が出来れば日本の女性は、世界に於ける最良の主婦と云はれて居る。臺灣に於ても、朝鮮に於ても、支那に於ても、日本の婦人と結婚した臺灣人、朝鮮人、支那人は盡く大満足して居る。歐米人も同じである。

四、今より約四百餘年前に名古屋市附近の一貧乏百姓の子に生れ、太閤の位に迄登つた豊臣秀吉の母は毎朝太陽の上るを拜んで、良い子の授からん事を祈つた。其の長き毎日毎日の祈りの結果として生



京都桂離宮茶室

れたのが秀吉であつた。秀吉の生れた後も、母は熱心に其の教育、其出世に努力した。これが日本第一の出世頭を造り上げたのであつて、秀吉は太閤の位に即いた時に、母が毎朝太陽を拜み、良い子の授からん事を祈つた結果、自分が生れたと云ふことを人に話して母の慈愛に感謝した。そのことから、太閤の母が日輪懐ろに在りと夢見て秀吉を孕んだと云はれるに到つたのであるが、事實は名古屋は大きな平原地で、秀吉の家の庭に立てば海上にあると同じく、水平線上から太陽の上るのを見ることが出来る。日本を創られた天照大神は太陽とされて居る。その太陽を拜



朝鮮出征軍船

むのによい位置であつたので、秀吉の母が熱心に太陽を拜んだものと思はれるのである。秀吉もその母には孝行を盡した。その母に對する孝行傳だけでも秀吉の偉人たるを観ることが出来るのである。

五、日本の神社の奥の殿に祀られてあるもので物質的のものは多くは只一つの鏡である。神社に參詣し、お賽錢を奉り、拍手參拜の後に遙か奥の殿を眺むれば鏡に映る我が姿を見るのである。

天照大神は皇孫に神鏡を授けられて「この鏡を見ること我を見るが如くせよ」と仰せられた事から、鏡が奥の殿に祀られるようになったのであつて、天照大神たる「お母さん」は我即ち神たれと教へて居るのである。

一一 秀吉は明に修文を求めたが容れられなかつた。そこで明を討とうとして、先づ朝鮮に對し嚮導たるべきを要求した。

たが、朝鮮は常に支那の隸屬的立場にあつたので之を拒絶した。

そこで秀吉は朝鮮から先に討伐するの必要を感じ皇紀二二五二年西曆一五九二年兵を發し

た。日本は連戦連勝し加藤清正は國王の二子を捕虜にした。之は人質或ひは誅殺のためではなく、之を安全に保護して他日確乎不動の朝鮮たらしめんが故である。日本の勢威に驚愕した支那は和を請ふた。日本は戦闘が目的ではないから、直ちに之を認め、兵を引き上げた。明は使者を日本に遣はしたが、その携へた文書に「汝を封じて日本國王となす」とあつたのを見て秀吉は激怒した。日本には天皇があり、秀吉は臣下の一人に過ぎぬ。それを僭越にも日本を封土視し、秀吉を國王に任ずるが如きは日本を侮るの最たるものであり、日本は面積に於て小國なりとも斷じて許容すべき事柄ではない。茲に秀吉は皇紀二二五七年西暦一五九九年、二度の討征を敢行した。然し間もなく秀吉は死し、軍を引上げた。

一、朝鮮征伐は宇喜多秀家が總大將、加藤清正、小西行長が先鋒となつて、大いに敵を破り、清正は二王子を虜とし、行長は平壤を陥れ、朝鮮國王は國外に走つた。

明は朝鮮國王の求援に依つて兵を送つたが行長に破られ、沈惟敬をして我れに和を請はしめ、その虚に乗じて明は我が軍を撃つた。然し小早川隆景等に依つて撃破されたので、明は恐れて沈惟敬をして和を請はしめた。秀吉は之れを許して肥前の名護屋で和平の約を結んだ。條約は

一 明の皇女を日本の皇妃とすること

二 朝鮮は南四道を日本に割讓すること

三 朝鮮は王子及び大臣を人質とすること

四 日本はさきに捕虜とした二王子を還すこと
等であつた。

此の條約に依つて第一に注意すべきことは、明の皇女を日本の皇妃とすると云ふことである。日本も朝鮮も支那も上古から共存共榮の位置にあつて、朝鮮、滿洲の如きは上古には殆んど共存の状態であつたので、秀吉は其の上古の關係に戻らんとする復古の爲めに日本の皇室と明室と親類關係を作らうとしたのであつた。條約中の南朝鮮の四道割讓の如きは、上古には日本の領地であつたので、其の地の割讓を求むるは、領土擴張と云ふよりは寧ろ明との緩衝地帯を造らんとするに過ぎなかつたのである。

一一 「お母さん」の創つた日本は平和を希求し、協力を本體とする國である。徒らに戦を好み外國を征服せんとする氣持は絶體にない。

秀吉は既に國內を統一して戦國時代の暗黒不安を解消せしめて居たが、當時諸外國との交易往來から世界の智識を持ち、朝鮮、支那との協力の必要なる所以を悟つてゐた彼は、國內の物資缺乏から之を支那に求めんとし、修交を求めたのであつた。そして之によつて彼

我の向上、和平を招來せんと考へた。

一、「お母さん」の創つた日本は平和、協力の國であるから、神代の時代から皇統連綿として一大家族制度を營んで来て居る。子孫の住む此世を良くする協力事業以外はなにも考へて居らない。

「お父さん」の創つた國なる日本以外の國は絶えず戦争をし、戦争は國事でもあるかの様に、國を取つたり取られたりして来てゐる。

かゝる競争のうちには進歩があるかも知れぬが、又そのために進歩が妨げられるとせねばならぬ。二、權力の競争だけでは世の中は進歩しない。基督教が長い間バイブルを唯一の教科書とした爲めに進歩を妨げられたことは歴史の示すところである。

競争は進歩である。併し其の競争は極端なる自由主義の競争でなく、協力の下にある競争であらねばならぬ。母の下にある子供等同志の競争のような競争でありたい。

三、太閤秀吉は織田信長の日本統一事業の半ばを引受けて日本を統一したものである。織田時代の前後から葡萄牙人が日本に來た。彼等と接近して世界の智識と國際貿易の智識を得て、國民生活の向上の必要を悟ると同時に、基督教宣傳が領土獲得に利用されて居ることも知つた太閤は、一面に於て當時日本國民の生活が日本といふ島國だけでは物資が足らず、どうしても其の物資の供給を隣國に仰がなければならぬことを痛切に考へて居た。

四、當時米すらも不足を來し、朝鮮に近い對島に之れを求め、對島は朝鮮から輸入して日本本土に送つ

て居た程である。殊に着物については大きな不足を感じて居た。日本は棉の耕作には適しないのであるから、養蠶に力を注いだのである。綿は此れより六七百年前に傳つたが中絶し、漸く復興し、輸入に依り國民が綿、木綿を用ゐる様になつたのは秀吉の少し前頃からであつて、棉の必要を強く感じた。當時の着物は絹と麻、格から出來て居たが原料不足であつた。これを朝鮮支那に求めねばならぬので、其等の物資を得るには、日本の上代、日本に接近した朝鮮の四ヶ國が日本の貢國であつた當時のように、朝鮮に其等の物資を供給する協力國をつくる必要があつたのである。

五、又歐羅巴から來た宣教師の話に照らしても、支那が最初に歐羅巴の武器を採用して居るので應ては約三百年前(太閤の時代より)支那が十四萬餘の兵を以つて襲つて來た様なことが起らぬとも限らない。支那に元來戦争を仕事にして居る國であるから油斷は出來ない。支那に其力が無いとしても、或は支那が歐羅巴に分割される様になるかも知れぬ。何れにしても折角統一した日本を維持するには朝鮮を通じて支那に其の野心の起らない様に、又分割されることのない様に支那を教化して置く必要を感じた。恰度支那は國王愚にして國內亂れてゐるので支那を救済し安定せしめ、朝鮮支那兩國間と通商を開き、以て國民生活の向上、必要物資の供給を得んとして、朝鮮に兵を出したのであつて、決して朝鮮を征伐せんとする野心のあつたものではない。

六、太閤が其の戦争中に死し、朝鮮に居る兵も呼び戻し、目的を果さずして終つたので、太閤に取つて代つた徳川氏は、國民は遠征に疲れたるを覺り、秀吉が恰かも自己の満足のために徒らに大兵を大

陸に送り國民を苦しめたかの如き宣傳をなし、自己に有利ならしめんとした爲に、秀吉に有利なる事實を抹消してしまつたのであつた。

七、徳川幕府が二、三十年續いただけであつたらば、總べてがもつと太閤に有利に書かれてあつたらうが、徳川は二百数十年の長い間續いたのであるから遂に其の事實が葬られることになつた。斯かる例は日本ばかりでもなく又外國にも見られることである。

八、太閤秀吉の主人たる又先生たる織田信長は、武を以て統一を計つたのであるが、秀吉は武よりも寧ろ協力を以て統一を計つたものである。

秀吉は才能者を廣く國內に求め、之れを信長に推薦した。又信長が戦争して居る最中、秀吉は單身敵陣に乗り込み、皇室を中心とする國內統一の信長の事業を述べて信長に降服せしめ、戦争を出来るだけ避けんとしたことが屢々であつた。

九、信長の命に依り備中に乗り込み毛利軍を征伐した時には、遠く城を圍み城の周圍に堤防をつくり、川の水を之れに引き入れ水攻めにし、又小田原城を攻める時にも同様に戦はずして遠く包圍し、交通遮斷に依つて之れを攻め落したと云ふ様な戦ひをして統一をした人である。斷じて秀吉は自己の名譽的慾望のため朝鮮に出兵を敢てした人ではないのである。又その様な個人的慾望の爲めに徒に兵を海外に出すと云ふ様なものは、「お母さんの創つた日本」にはないのである。

一〇、織田信長が足利義昭を奉じて京都に入ると間もなく、元龜元年皇紀二二三〇年西曆一五七〇年、信

長は僧天刑を使者とし朝鮮に遣はし、舊好を修めたいと申送つた。

その後數年を経て天正五年更に僧天刑を朝鮮に遣はして再び修交を求めた。

其後信長は又使者を遣つた。此時始めて朝鮮に向つて、どうか明との國交が絶えて居るから之を復したいものだ、就いては貴國が中間に立つて紹介の勞をとつて呉れまいかと頼んだ。朝鮮は迷惑に思ふてか天正九年これを斷つた。其翌年信長死んだ。

一一、天正十五年皇紀二二四七年西曆一五八七年、秀吉が九州征伐の時、對馬の宗氏に命じ、宗氏から使者を朝鮮に遣つて、舊好を修めたい、此方から使を遣るから、そちらからも答禮使をよこす様にと交渉させた。朝鮮政府は大會議を開いて拒絶した。

一二、天正十六年秀吉の命を受け、宗對馬守は、自身朝鮮に渡つて前の交渉を繼續し、明の方へ紹介して室町時代に行はれた支那との通商貿易復活に盡力あらんことを懇願した。

朝鮮の亡民で沙火洞と云ふ者が日本に逃げて行つて居り、日本人を語らつて屢々朝鮮へ仇をしに來て困るから其者を捕へて私の方へ送つて呉れるならば其勞をとらんとしたことであつた。

一三、秀吉は早速此者を探がし捕へて朝鮮に送つた。更に朝鮮を侵かした九州對馬の人民の中のものも捕へ、朝鮮人で日本に來て居る者百十六人をも送つた。

朝鮮は答禮使を日本に遣はして、亡命の民を送り倭寇の巨魁を送つた事を感謝したのである。秀吉から明への紹介を要求した處、三年間の猶豫を興へて貰ひたいとのことであつたので、秀吉は待つ

ことにした。

一四、朝鮮からは約束の時が来ても、返事が来ない。

明に對しては、明人と一處になつて明を苦しめて居る倭寇を、九州の大名に命じて嚴重に探索し之に嚴刑を課した。

斯く迄、秀吉が平和的通商の復古を要求するに明は飽く迄國際信義を無視する態度を執るので、秀吉は「我邦を小國なりと輕んじ之を侮るか」と憤慨した。秀吉の朝鮮役は斯くして起つたのである。

一、この世紀支那では明の王朝が續き。

二、西歐ではマルチン・ルーテルが(一五一七)宗教改革を唱え、佛のフランシス一世がドイツ皇帝のカール五世(一五二五)に破られ、マキアヴェリが(一五二七)死に、コペルニクス地動説(一五三〇)を唱え、ジェズエツト教會がイグナチウス、ロヨラにより(一五四〇)設立され、ミケランジェロ(一五六四)死し、ユグノーの亂佛國にあり、セントバートロミューの(一五七二)大虐殺あり、十四世紀のルネサンスから科學の進歩、地理上の發見が十五世紀に於てなされ、これに伴ひキリスト教に對しても新しい解釋が下され、それが十六世紀の宗教改革となり、保守と進歩との抗爭が宗教改革に伴ふ抗爭として現はれ、英、佛を初め西歐諸國は近代國家的統一を完成して海外に發展せんとする時代であつた。

十七世紀

皇紀二二六一—二三六〇 西曆一六〇一—一七〇〇

一 豊臣秀吉薨じてその子秀頼が繼いだ。時に徳川家康は野心あり、天下を窺つてゐたので、石田三成、上杉景勝等は兵を擧げて徳川を討たんとした。

天下の諸大名は兩派に分れて關ヶ原に戦ひ、勝利は徳川側の上に揚つた。

徳川氏はこれで愈々實力を確保することになつた。

その年和蘭の船來り修交を求めた。明も亦修交を求めた。

二 皇紀二二六三年西曆一六〇三年、家康は征夷大將軍に任ぜられ、江戸に幕府を開いた。秀頼は大阪に居たが、秀吉麾下の諸將多く家康の下につき、秀頼の滅亡は時日の問題でしかなかつた。

家康は豊臣氏を滅すべき適當な機會を狙つてゐたが、偶々秀頼の再建した寺の鐘の銘が國家安康とあつたのが問題となり、家康が己れを呪ふものとして秀頼を詰つたので、秀頼の母淀君は大野治長と計り兵を擧げた。家康は子の秀忠と共に大阪を攻めた。大阪城は秀吉

が築城したもので、難攻不落と稱せられてゐたが、これに據つた真田幸村、木村重成等よ

く防いだので、勝敗決せず和を結んだ。

翌年夏再び戦ひ、遂に大阪は落城し、秀頼母子は自殺し、豊臣氏は滅亡した。

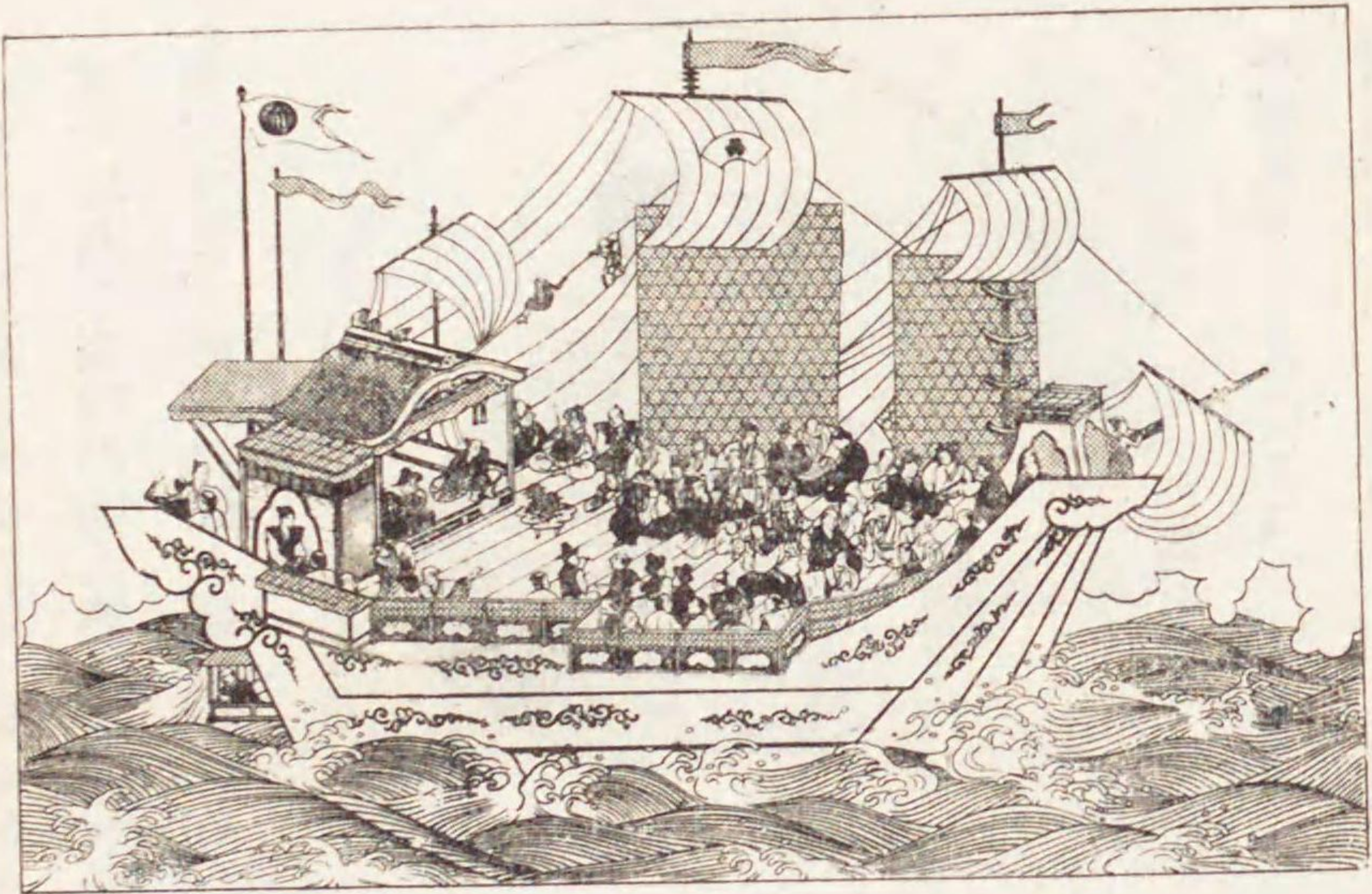
三 これより前、家康は幕府を開くや、二年にして職を子の秀忠に譲つたが、大阪を落した翌年宿望をとげて死んだ。

日光の東照宮は家康を葬つた所で、三代將軍家光の時社殿を改修し、華麗目を欺くばかりにした。

四 江戸幕府には大老、老中、若年寄があり要務に携り、その下に三奉行があり、寺社、財政、江戸市政を掌つた。諸大名は親藩、譜代、外様に分ち、それを適當に振り當て、相牽制せしめ、武家諸法度を作つて大名を抑制し、大



徳川家康



御朱印船

名の邸宅を江戸に建て、妻子を住まはしめ、参観交代の制を設け、隔年に江戸に参候せしめた。即ち人質を江戸に置かしめ、又参観交代の道中費は莫大な額に上るので、これによつて諸大名の財政を窮乏せしめ、幕府に對する反抗を不可能にしたのである。

五 この頃日本人で海外に雄飛する者多かつた。家康はキリスト教は禁止したが外交に意を注ぎ、朝鮮、明との修交は勿論、和蘭の商船が来るや、和蘭人ヤン・ヨースチン及び英人ウイリアム・アダムスを江戸に召して西洋事情を訊ね、俸給を與へて江戸に居らしめた。

アダムスは遂に日本に歸化し、三浦安針と

名乗り、尊敬と厚遇の下に安樂な生活を送つた。

六 當時堺及び長崎の商人等に渡海の朱印を賜ひ、御朱印船と稱する巨大な船舶を建造して支那、南洋、西洋諸國と通交せしめた。



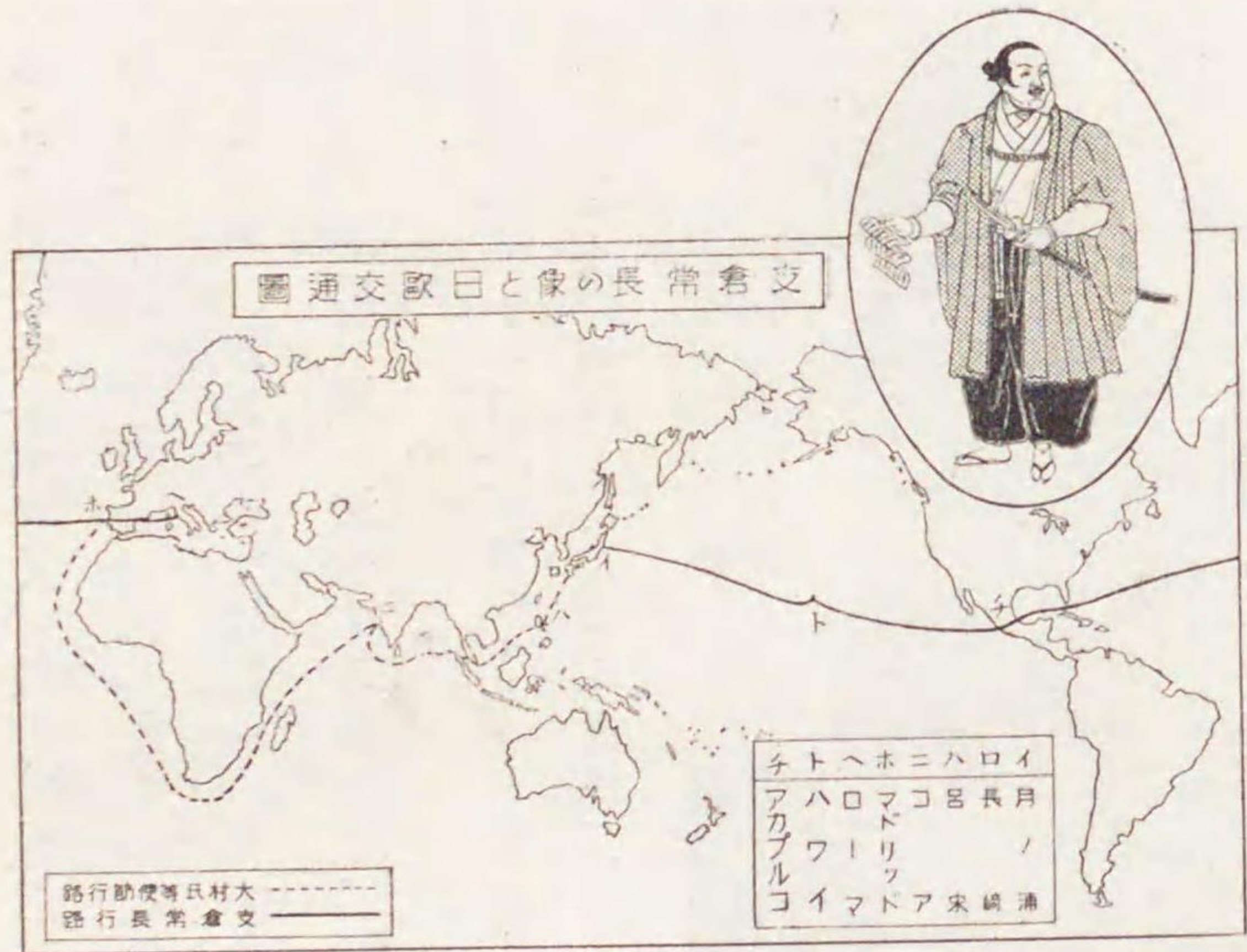
山田長政

伊達正宗はその臣支倉常長をして太平洋を渡り、メキシコを横断してロトマ法王に謁せしめた。

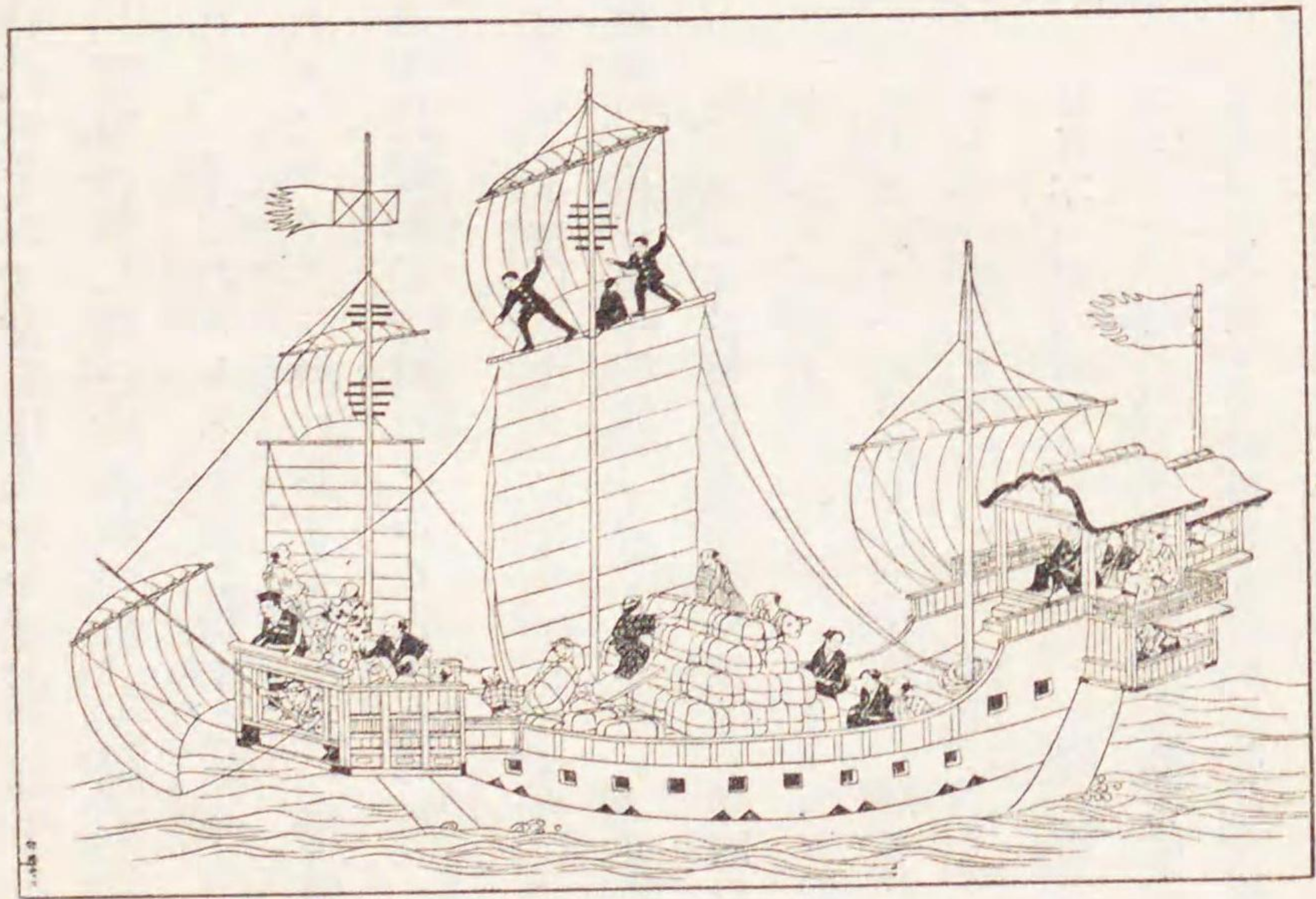
山田長政はシナムに渡り、内亂起るや國王を助けてそれを鎮定し、王女と結婚し重要な地位に登つた。かゝる傾向を放置せば、日本は英、佛と共に、南洋印度、アメリカに雄飛してゐたらう。そして世界の歴史は變つた面貌を呈してゐたに相違ない。然し間もなく三代將軍家光は島原亂の後キリスト教を嚴禁

すると共に、明、和蘭を除く外國との交易を禁じ、その場所も長崎の出島に限り、邦人の外國渡海をも禁じた。

七 家光の時代、九州のキリスト教徒は佐賀の島原で亂を作した。この亂は日本に於けるキリ



支倉常長と日歐交通圖



貿易船